

---

# 不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

トロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

### 【Nコード】

N6548Y

### 【作者名】

トコ

### 【あらすじ】

自他共に認めるヤンキーの早森いなほは、ある日死の運命にあった少年の運命を変えたことに目をつけられ、謎の男に異世界に吹き飛ばされた。

元の世界にはいなかった人の天敵である魔獣、そして魔力を用いて使われる魔法の存在。ファンタジーと呼ばれる世界にて、いなほにあるのは己の五体が唯一つ。

唸る筋肉！暴れる筋肉！異世界ファンタジーなんのその。男ひたすら拳を固め、貫き通すは我が信念。無茶と無謀を笑われようが、鋼

の肉体漲らせ、筋肉馬鹿が我が道のみ行く。  
端的にまとめると、荒唐無稽マツルファンタジーです。よければ  
一読のほうをよろしくお願いします。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー」(軽傷)【(前書き)

筋肉って凄い。全編通してそんな話ですのでご注意ください。

## 第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー（軽傷）」

別に現実を理解していないわけではない。

ただ単純に、藁にすらすがらなければならぬほど、現実が冷たいのだ。

「願いを捧げる。私の夢、私の理想、あなたを象る全てが、私の願いという血肉で成る」

少女は大地に膝をつき呪文を歌っていた。彼女の膝もとには、土の大地に描かれた下手くそな魔法陣が一つ。北に太陽を書き、西に盾を示し、東に剣を描く、そして南に少女が一人。中央には東西南北を繋ぐ星の印。

それは、ありもしない魔法陣と呪文だ。だが少女がそんな新しい魔法陣と呪文を生み出したのかと言えば、そうではない。少女は簡単な魔法こそ使えるが、せいぜいはちよつとした炎をともしたりといった程度、召喚を行えるほど、ましては新たな魔法を使えるほどの卓越した魔導師ではない。

「理想を紡ぎ、理想と化せ。あまねく悪をかき消す光、祖は太陽、其は無限の勇気を抱く奇跡」

だが詠唱は続く。両手を組んで胸の前、祈りを捧げる少女がまとう衣服はただでさえぼろぼろの上、土で汚れて身窄らしい。体にはいくつもの擦り傷、そして足首は痛めたのだらう、青く腫れているが、それらの傷の痛みを押し殺し、少女は意味のない詠唱をひたすら綴る。

少女は逃げてきた。平和な日常の中、ある日突然村を襲撃してき

た巨大な魔獣、トロールの群れに追い立てられ、少女は家族、友人、全てに守られ逃げおおせた。魔獣の群れにより鮮血に溢れることになった村から逃げ、森に入り込み、ただ闇雲に走った。そしてつい先ほど、森まで追い立ててきたトロールにより、少女は友人と家族と引き裂かれ、一人孤独に逃げ続け、ついに足首を痛め大地に屈したのだ。

自分は無力だ。か細い腕に足、魔法を使えるほどの魔力もないただの少女。そんな自分に何ができるわけでもない。でも助けたかった。助けてほしかった。この理不尽を救う奇跡が欲しかった。

「其の総称は人の夢。其の理想は世界の夢。大いなるあなたよ、大いなる奇跡よ、この身、この言霊に応えたまえ」

詠唱は続く。だがその詠唱は、今少女の横に置かれた誰とも知らぬ人が書いた『絵本』に記されたものだ。そう、それはただの御伽話の言葉に過ぎず、どんなに願おうが祈ろうが、その全てに意味はない。

だが少女は歌う。歌うように祈る。藁にもすがろう。藁にしかすがれないから、藁にだってすがってみせよう。

絵本の名前は『太陽の勇者』。悪の魔王を打倒する偉大な勇者の物語。そして、少女が歌う詠唱と、下に描いた魔法陣こそ、絵本に出てくる勇者召喚の召喚魔法。

不可能である。出所不明の絵本の在りえない詠唱に意味はない。詠唱は続く。でも少女にはこれしかなかった。小さなころから、手垢で汚れても読み続けたこの理想の英雄に願うしか、少女には残されてなかった。

だから祈る。お願いと、どうか奇跡よ起こってくださいと。

「誓約は今。応えよ、応えよ、奇跡を具体せよ。この世界に光をもたらせ」

お願いします。それだけが、弱い少女にできる唯一の抵抗だから。

「太陽の勇者よ！」

来て！ 両手に力を込める。だが、どんなに待っても、少女の描いた魔法陣には何かが起きるわけでもなく、響くのは森の木々のざわめきばかり。

「そんな……」

わかってはいたけれど、それでも奇跡のない現実には少女は今度こそ力を失った。組んだ両手は力なく大地につき、絶望感が少女の肩に重くのしかかる。

現実の理不尽を打倒する奇跡の存在はない。世界はいつも冷たくて、少女の穏やかな日常を守ってくれる英雄はいない。

「どうしよう……お母さん、お父さん、エイミー、トト……」

溢れる涙は、彼らへの罪悪からだ。何もできなくてごめんなさい。弱くってごめんなさい。

私には何もできない。圧倒的な力を前に、私はただただ逃げるだけしかできないんだ。

少女の中の芯が砕ける。犠牲にして逃げるだけの己への自責の念に潰されそうになる中、不意に木々のざわめきではない、木々をへし折る音が聞こえてきた。

それは膝をつく少女にどんどん近付いてくる。そして、最早動くこともできない少女の前に、音の主は現れた。

「あ……」

悲鳴すらあげられない。少女の前に現れたのは、少女の倍以上はあるつかという巨体の、緑色の皮膚をもつ異形の怪物。トロールと呼ばれる魔物は、恐怖に震える少女を見下ろして、手に持つ棍棒を見せびらかすように掌で弄ぶ。

トロールを見て、少女の記憶が掘り起こされる。突如群れをなして村を襲撃してきたトロールの群れ、駐在していた兵士は闘うでもなくなさけない悲鳴をあげて一目散に逃げ、村の人々が次々と死んでいく地獄が具現した世界。それでも母親や友が自分をここまで逃がしてくれたこと。

「嫌だ……」

立ち上がれもせず、後ずさる。足首の痛みのせいか、最早起き上がることさえ難しいのが見て取れた。森のなかで転び、運悪く木に打ちつけてしまったときの怪我だ。これがなければ、少女はひたすらに逃げていただろう。

だがもう逃げられない。運悪くトロールに見つかった今、少女を守る優しい母に、頼もしい友人達がいない以上、少女の命運はすでに決まっていた。

「グビヤビヤビヤビヤ」

汚らしい鳴き声をあげながら、トロールがジリジリと少女に近づく。あくまでゆっくりと、絶望に沈む少女を見て楽しむように。

だがそんなトロールの下衆な思考など理解する余裕のない少女は、必死に後ろに下がるしかできない。大地に刻んだ魔法陣が後ずさる度に少女の体で消されていく。まるで願った奇跡はただの張り子であると言わんかのように、呆気なく消える少女の理想。

一歩踏み込んだトロールが、少女の絵本を踏みつぶした。踏みに

じられ、蹂躪される少女の夢、理想。ありもしない奇跡に意味はない。世界はどこまでも理不尽で、この世に奇跡をもたらす勇者はいない。

「嫌だ……」

「ゲヒヤヒヤヒヤ」

「嫌だ……！」

次々に零れる涙。否定しても迫る悪夢。と、少女の背中がついに木にぶつかった。これ以上逃げられない。絶望と恐怖、嫌だと言おうが、トロールはその醜悪な容貌に笑みを張り付けて少女に向けて手を伸ばし

「誰か、助けて！」

吐き出される生への渴望。か弱い少女の、最後の抵抗。

瞬間、何の前触れもなく、トロールの手が横合いから伸びた手に掴まれた。

早森いなほは人類である以前に、喧嘩しか能のない糞つたれの畜生であると豪語するくらい、見た目も中身も筋金入りのヤンキーだ。茶色に染めて痛んだ短髪に、眼力鋭い目つき、二メートルに届くか

という長身の彼は、道端であえば誰もが道を譲るほどの威圧感を放っていた。

何よりもその威圧感の元となっているのは、鋼か何かと見間違うくらい屈強な筋肉だろう。世間的には細マッチョと言われるような、厚すぎない筋肉だが、筋の一本まで丹念に鍛えた肉は、そこらの鉄なんかよりも遥かに頑丈である。実際はただの細マッチョなどではない。見栄えだけの余分な筋肉を搭載しない、戦いに特化した攻撃的肉体こそいなほの自慢なのだ。

そんな男が、まさか積載量一杯の十トントラックに轢かれそうになった少年を庇って轢かれ、さらに吹き飛んだ先で落ちてきた鉄骨に潰されたあげく、鉄骨をどけようとした瞬間ガス爆発に巻き込まれたのはなんとという悲劇か。

ともかく何の気まぐれか、いらん正義感を発揮したいなほは、まるで少年を確実に殺そうとした連続攻撃を代わりにもらって、最後の爆発で結構な深手を受け気絶したはずだった。

普通は死んだと思うようなダメージの連続だが、いなほは自分が事故などというしょうもないことで死ぬなど考えもしなかった。せいぜい『もしかしたら骨折れたかもな』程度の認識である。

だが流石の彼も目覚めたらまるで自分に怪我がなかったということには驚きを隠せなかった。しかも世界各国のあらゆる文字と、地球にはない文字がいくつも浮かんだ空間において、目の前にそんな空間に似合わない革製の豪華なソファーに座る、ソファーに似合わないぼろぼろの黒いマントをまとった陰鬱な面持ちの男がいるとなれば、自分の正気を疑うのも致し方ないだろう。

「あー……なんだ、これ」

ガシガシと茶色に染めすぎて痛んだ髪を掻き耨り、いなほは男の前にまで歩み出た。

「で？ こんなとこに連れ込んだのはアンタか？」

「……」

男を見下ろすが、男はいなほを見上げて視線を交わすだけで、何かを言おうとはしない。ム力つく態度にいなほの頬が引きつる。ガキの頃から喧嘩っばやく、生粋のヤンキーとして生きてきたいなほにとって、自分を無視するような態度は、すなわち喧嘩の合図に他ならなかった。ただでさえ訳のわからない場所にいるのだ。いなほの沸点はすでに振りきれていた。

「テメー」

「例えば、水が上から下に流れるがごとき覆しようのない必然、それが運命だ」

その胸倉に掴みかかろうとしたタイミングで、男が口を開いた。ボソボソした声の癖に、何故か沁み渡るようにいなほの心に響く。出鼻を挫かれ、しかも訳分らない話をしだしたとなれば、いなほの動きが止まるのも仕方あるまい。

内心の苛立ちをぶつけるタイミングを逃したいいなほは、釈然としない面持ちで、男の隣の空いてる場所に大股開きで座った。男の座るスペースすら侵略して座るのはせめてもの意趣返しか。だが男は特に気にしたそぶりもみせず、淡々と、やはり陰鬱なまま口を開く。

「だが、そんな必然を覆す者がいる。因果の否定、絶対運命の改変、激流に抗う矛盾存在。しかしその資格を持つ者が、誰しも運命を覆せる力を持つわけではない。大切なのは不倒不屈の強靱な鋼の意志。これがなければ、資格を持つのが因果の否定を行うことができない。現にこれまで、資格の保有者で運命を覆した者は一人しかいなかった」

た。お前で二人になったがな」

「へー」

話している内容など、県内最底辺の高校にぎりぎり合格した程度のいなほにわかるわけがない。いなほは男の言葉は話半分、周りの増えたり消えたりを繰り返す幾つもの文字を目で追うことに集中していた。

だが構わず男は話を続ける。陰鬱なまま、しかしどこか願うようなその口調。

「お前はあの少年の死の運命をその意志のみで打ち壊した。それで私は確信したよ。お前こそが私の望んだ者なのだ。だからお前をこちらに引き寄せたのだ」

「……おい、そりゃ」

少年とは、あの事故で庇った少年のことだろう。言ってることはさっぱりだが、知っていることならば興味はある。

「安心しろ。少年の因果の鎖は生存の方向に切り換わった。矛盾を嫌う世界の選択はそうらしい」

「なんだ、つまりガキは死んでないのか？」

「ああ。お前がそうした」

「……けっ、しぶといガキだぜ」

悪態とは裏腹に、いなほの表情はどこか穏やかだ。口は悪いが、

心より少年の安否がわかって安心しているのが見て取れた。

「……お前を待っていた」

安堵するいなほに、不意にそんなことを男が呟いた。いなほは眉をひそめる。当然だ、いなほには男との接点がるでないのだから。

「先に言っておく。お前はあの世界では死んだことになっている」

「道理が通らねえなあ。俺アこの通り無傷でピンピンしてんぜ？」

「怪我のほうはここに至る途中で私が治しておいた。軽い火傷と右肩の脱臼と骨にひびが入った程度だったのもあるが、専門外でも存外、何とでもなるものだな」

「つまりテメエが俺の怪我を治したってのか？」

「ああ、そしてその代わりに、お前にはこちらの世界に来てもらう。後は好きにやれ」

唐突な話に、いなほは言葉を失った。何を言えばいいのかもわからず、そもそもやはり言ってる意味がわからない。

当然、男はそのまま続ける。語りだすその顔は、僅かな安堵が現れていた。

「さて、今更だが自己紹介と別れの挨拶をしよう。私は第十一位『帰結運命』。名前はレコード・ゼロ。勝手にこちらに来てもらう上に身勝手な願いだが、どうか一つだけ私の願いを聞いてほしい」

突如、謎の空間に光が満ちていく。いなほはその急な変化を、何

故か当たり前のように受け入れていた。思えばそうだ、こいつの話は理解はできないし意味不明だが、何故か『受け入れられる』。

「おう。何だ」

だからいなほは、不思議と素直に男、レコードの願いを聞き入れようと思った。光に包まれ、何もかもが白に染められていくが、心中は穏やかなものだ。いつの間にかソファ―に座っている感触もなくなり、自身の肉体も曖昧になっていく。

それでも、その陰鬱な言葉は、

「世界の運命を、打ち砕いてくれ」

どうしてか、頭にはなく、心の芯に重く響き渡った。

「……」

光が消えると、文字が浮かぶ部屋の景色が戻ってきた。果ての見えない広大な空間にただ一つ置かれたソファ―には、先程まで座っていたいなほの姿はない。変わらず陰鬱な面持ちのレコードがただ一人。次々に浮かんでは消えていく文字群を見据えている。

「さよなら、いなほ。何、君がそのまま不屈なら、必ずまた出会うぞ」

紡ぐ言葉を聞く者はいない。だがそれでも眩くレコードの瞳の奥底には、薄暗い情念の炎が灯っていた。



第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー」(軽傷)【(後書き)

次回、ヤンキー大地に立つ。

第二話【ヤンキーばんち】（前書き）

この小説は

筋肉 > 物理法則

となっております。

## 第二話【ヤンキーばんち】

目が覚めると太陽が眩しいくらいに頭上で輝いていた。

久しく感じたことのなかった土の感触と匂いが全身を包んでいる。

涼しげな葉鳴りを響かせる森の鳴き声が心地よい。

どうやら自分は倒れているらしい。混乱するでもなく冷静に、森の中にいることをいなほは理解した。

上体を起こし、ややまどろんだ頭でこれまでを改める。

ガキを庇った俺はトラックに轢かれ、鉄骨に潰され、ガス爆発に巻き込まれた結果、レコード・ゼロと名乗った男に助けられ、ここに飛ばされることになった。

そして、ここが地球でも日本でもないことも理解していた。別の世界であるという何となくの知識がある。

異世界。そう、異世界だ。今まで自分がいた世界とは別の世界。意味はわからないが体感的に理解はした。

ようはここが日本ではなく外国という解釈でいいのだろう。

「つまりアメリカってことだな」

いなほは単純明快な馬鹿だった。

ともかく、この知識はどうやらレコードの奴がどさくさに紛れて自分にもたらしたのだろう。頭の中に『そのまま送るのは不便と思っただのでな』というレコードの言葉が浮かぶ。

そう思うならなんで元の世界になんて返さなかったのか。別れが惜しいと思う奴も一応は何人かいるし、勝手に飛ばすのは道理が通らない等と悪態をつきたくもなるが、

「まあ、しょうがねえ」

起きてしまったことを愚痴るのは性分ではない。あいつが事故で怪我した自分を救ったのもまた事実。かつての世界に未練がないわけでもないが、こうなっては仕方ない。俺は切り替えの早いナイスな男なのだ。

などと自分を奮い立たせるついでに立ち上がる。ご丁寧に、黒のタンクトップとひざ丈の短パンにサンダルと、事故当時の格好はそのままだ。爆発で吹っ飛んだにも関わらず服装がそのままなのはいなほとしても助かる。全裸で森に置かれたらただの変態以外の何者でもないのだから。

体にも怪我ひとつない。試しにいなほは近くの木に向かって構えると、深く呼吸。サンダルを脱ぎ棄てて裸足になり、後ろ足を蹴り上げる。鞭を振るうように斜め上に走るつま先、それは木に着弾する間近、腰の回転も加えられさらに速度を増すと、轟音と共に木に叩きつけられた。

人の胴程もある幹が、いなほの蹴りの絶殺に負け、乾いた音と共に真横に折れる。その音は人外の一撃に負ける木の断末魔だ。トラツクに鉄骨、はてに爆発をもらって、ようやくちよつと危ない程度のダメージしか受けないいなほの保有する筋肉の堅牢は、攻撃という点に關しても無類の火力を与えていた。

まさに人類の皮を被った猛獣の一撃を、いなほは当然とばかりに領き一つで受け入れた。人にはありえない戦闘能力。だがそれこそが、彼を近隣の不良、果てはヤクザすら屈服させるに至った所以に他ならない。単純な筋肉の質量と、その過程で培った格闘術こそ、いなほが絶対の信頼を置く武器なのだ。

「う、し……体はまあ大丈夫か」

それだけ確認したいなほだが、さてここで問題が起きた。そもそも、自分はここで何をすればいいのだろうか。好きにやれとレコー

ドは言っていたが、自由すぎるのも困りものだ。

せめてどっかの町にでも置けよ。とサンダルをはき直しながら内心で悪態。ともかく、早く町に出よう。ズボンの尻のポケットには都合よく財布もある。新たな世界に飛ばすとか言っていたが、いなほ的には外国のどっかに飛ばされたのかもしれないと解釈した。だとしたら財布の円では意味ないかもしれないが、そこはあれだ、いざとなったら悪そうな奴捕まえて金を巻き上げればいいだろう。

呼吸を一回。排気ガスの溢れていた世界とは違う空気を肺一杯に取り入れ、その時には頭はもう冴えわたっていた。

「おーし、まずは真っ直ぐだ。んでム力つく奴は殴って黙らして金撒きあげて唾吐き捨てる。その後は……その後だ！」

行動方針が決まれば後は早い。いなほは快活な笑顔を浮かべ、へし折れた木を跨ぎ、真っ直ぐという名の適当な行動を起こそうとした瞬間。

その進路を遮るように緑色の何かがいなほの前に現れた。

「あ？」

思わず素っ頓狂な声が出る。

のっそりと現れたそれは、まさに異形だった。長身のいなほより、さらに顔一つでかく、腰巻一枚しかつけていないその怪物は、見た目も最悪だ。遠くでもわかる異臭に、豚を醜くしたような顔、体は丸々としており、どこか相撲取りを思わせる体だ。その手には一メートル以上はある木を削っただけの棍棒を持ち、明らかにこちらに敵意を放っていた。トロールと呼ばれる、この世界でも高い戦闘能力を誇る魔獣、それが今いなほの前にいる異形の名前だ。

普通の人間ならば、こんな化け物に会ったらその怪物然とした姿に怯え、一目散に逃げ出すだろう。だが、いなほはと言えば、その

姿を上から下までじっくりと観察したうえで、まるで変わらない、快活で、しかし犬歯を剥き出しにした凶相の笑みを浮かべた。

「おうおうおう！ 豚を腐らせて二足歩行にしたようなツラしやがって。デケエからって見下してんじゃねえぞ！？ ああん！？」

下から睨みつけながら、いなほが自らトロールへと歩を進める。人間には見えない生物だろうが、いなほには関係なかった。

こつちに敵意を持って現れたのならば、それが例え子どもでも女でも総理大臣だろうが一緒だ。

叩いて潰す。いなほの行動原理は単純だが、故に誰だろうがブレはしない。

トロールもいなほの戦意を感じたのか、静かに唸り声をあげて棍棒を強く握り直した。武器も魔法も使っていない人間如きが、こうして慣れたように自分へと向かってきている。例え猿並みの知恵しかないトロールにもプライドがあった。目の前の人間が自分を完全に舐め切っている。トロールにはそれが許せない。

「ガアアアアアアア！」

「うるせえぞ豚面あ！ ギャーギャー吠えりやいってもんじゃねえ！」

互いに臨戦態勢に入る。剥き出しの野性が衝突。後一步踏み込めばトロールの棍棒が直撃する距離で、いなほはサンダルを脱ぐと、両手の拳に力を込めた。

健康的な小麦色の肌が筋肉で隆起する。盛り上がる筋肉は、いなほの肌を引き裂いて溢れんばかりの力強さだ。

敵を睨み、犬歯を剥いて奥歯を噛みしめる。相手は訳もわからない豚もどき。だがビビらない、ビビった奴が喧嘩で負けるのだ。

猛る気持ちとは裏腹に、構えは流麗、静寂の水面を彷彿とさせる静かな動作だ。体をトロールに対して真横に向け、右手を掲げトロールへと向ける。左手は腰に、重心を低くして、大地に根を張るように構えた。

トロールの間合いより一步、いなほの拳か足には二歩、あの棍棒の威力は、トロールの体格的に見たら脅威だろう。だがいなほがトロールに一撃を与えるには、まず棍棒の一撃を掻い潜らなければならぬのだ。

大人でも容易にミンチにするだろう一撃。だがそんな一撃を前に、いなほが感じるのは恐怖ではなく歓喜だった。近隣では最早戦う相手はいなかった。幼少より暴力に染まっていたいなほは、そんな現狀に飢えていたのだ。自分と戦おうとする奴とのイッチまうくらいに楽しい喧嘩にだ。

だからやろう。すぐにやろう。もう言葉はいらない。本能の赴くまま、いなほは自ら死地へと飛ぶように右足から踏み込んだ。

大気の震えを産毛の一本一本で感じる。頭上を焼く殺意の奔流。違わず走るは魔獣の怒涛。

「ガアアアアアアア！」

待ち構えていたトロールの棍棒が振るわれる。魔獣の怪力の乗った棍棒の速度は、太った体軀に見合わず早い。

迫りくる正面衝突の悲劇。

描かれる脳漿の飛び出す地獄絵図。

だがいなほは、避けるでもなく、まだトロールを射程に入れていないというのに踏みとどまる。否、大地を陥没させる程の凶悪な踏み込み。そして大地を破碎する運動エネルギーが、足の裏から盛り上がった下腿を周り膝へ。

膝で跳ねた力はそのまま大腿を駆け登り腰へと集束。溜まった力を腰を捻じり加速させて射出し、さらに倍加した力はタンクトップ

を圧迫するほど肥大した広背筋へと威力を連絡する。

その間にも回転した腰に引つ張られるように、いなほの左手は空気の壁を突き破る勢いで走っていた。背筋に溜まった力は余すどころか肥大させて左肩へ。筋繊維をサーキットに駆け抜ける衝撃は、発射先である拳目にかけて突き進む。

尚もスピードを速める拳を押し出すように、左足で大地を蹴る。限界まで高まったエネルギーは、最後の押し出しを持って遂に爆発した。

「オラア！」

トッピングは獅子の雄たけび。物理的な破壊力と闘争心を乗せた極限の左拳が、その異常な反射神経を持って疾走する棍棒へと着弾を果たす。

いや、それは最早爆撃と言っているレベルだった。魔獣の怪力すら凌駕する筋肉と技術のハイブリッドは、触れた瞬間に棍棒を容易く砕いたのだ。

言葉通り木っ端となった棍棒の残骸が空に散る。だが、トロールは驚愕する暇もなく、遅く過ぎる映像の中で、確かにいなほの顔を見た。

凶悪に笑う男のなんたる恐ろしさか。こんなのは人ではない。魔法による強化も使わずに、魔獣の一撃を力で完封する規格外の突然変異のその一連。

ゆっくりと動く世界で、いなほは既に次の行動に移っていた。振りぬいた左拳を軸に、独楽のように回転しつつさらに一步距離を埋めるは大地を蹴った左足。トロールにとっての危険地帯、そしていなほにとっての必殺の間合いに入り込む。

魔獣の脳裏を過る壮絶な死の予感。一回転しながら、いなほの右足が伸びあがる、勢いそのまま回転が体を倒すことで変則、横から縦に、円を描いて虚空を切る足の踵が、ただそれを呆然と眺めるしか

できないトロールのこめかみ目がけて、

「うるああー！」

咆哮に合わせて、直撃した。

胴回し回転蹴り。いなほの巨体には見合わぬアクロバットな絶技がトロールの頭蓋にて発生した。歪な顔は踵のぶつかった部分を大きく凹ませ、余計にグロテスクな変貌をした。そのまま重力を振り払って飛んだトロールが、勢いのまま木にぶつかり盛大に幹を揺らしながら力なく大地に屈する。崩れ落ちるトロールは既に着弾と同時に絶命していた。

「ハッ……根性だけはよかったぜ豚野郎」

トロールの骸の前に近づき、いなほはそう吐き捨てた。加減なく放った自身の全力。命を一つ奪ったことに対して、いなほが感じたのは清々しい心地よさだった。

全力を出せば人が死ぬ。故に出せなかった全力を出せたことは爽快以外ない。まあ相手には運がなかったと諦めてもらおうと、いなほは両手を合わせて合掌。

「しかし……何だあ、この生き物は？」

もしかしたら猿の仲間かなんかなのだろうかと考えるが、生憎と考えるのが苦手ないなほは、一分も掛からずにもういいかと結論した。どうせこいつは俺より弱い。ならそれ以上の意味はないはずだ。

切り替えは早く、とりあえずこういうときは埋めるのが礼儀なのかとよくわからん思考に至ったいなほは、早速トロールを埋めるための穴を掘ろうとした。

「って、随分ご機嫌な雰囲気じゃねえか」

だが、いなほの驚異的な闘争を嗅ぎわかる嗅覚が、どんどん自分の周りに集まってくる気配を敏感に感じ取っていた。草木をかき分け大地を揺らす、巨人達の群れの行軍。

木々に阻まれ見えないが、おそらく十に届く程度だろうか。姿を現すトロール達、怪力無双の魔獣の集団。粘りつくような殺意の奔流が、いなほの本能を直接刺激して、アドレナリンを分泌させる。

「ああ？ 仇取りに来るたあ気合い入ってんじゃねえの」

指の骨を鳴らしながら、いなほは自分を取り囲むように迫るトロールに向けて笑った。

面白い。ここが何処かもわからないが、自分に対して『調子のいい野郎が吐いて捨てるほど現れるのは嬉しい限りだ。命のやりとりなど数える程しかやってないが、とどのつまり喧嘩と何一つ変わらないのは立証済み。』

どっちもビビった奴が負けるのだ。

「行くぞオラア！」

いなほは完全に周りを取り囲まれる前に、まずは真正面のトロールに突撃した。素手の人間の奇襲を予期していなかったのか、驚きたじろぐトロールへ「おせえ」と一言に合わせて、肥え太った腹に正拳突きを一撃。充分加速を伴った拳は、トロールの腹に深く入りこむと、まるでボールのようにその巨体を空に舞わせた。

血反吐を撒いて、トロールが地に沈むころには、新たなトロールを狙おうとしたいいなほ目がけて迫りくる二体のトロール。

「グオアアアアアア！」

「グラアアアアアア！」

「ハッ！ 絶頂だあ！」

高々と頭上に掲げられる二振りの棍棒。叩きつければ人間をたちまち弾ける血袋となす攻撃に応じるいなほの対応は、まさに常人の考えの外れだ。

「オオオ！」

変わらず落ちる木の塊を、いなほの両手ががちりと捕らえる。その衝撃にいなほの足首までが土に沈んだ。今まで感じたことのない強烈な重さに、いなほの両手がぶるぶると震える。単純な質量では圧倒的に負けるトロールの渾身を二つ、ただの身体能力でこれと拮抗するいなほの筋肉の異常は推して測るべきだが、少しずつ両手持ちの棍棒に押されて腕が下がり始めてきていた。

「俺、と、腕比べ、たあ、いいタマ、してやがる、ぜ……！ ぎい……！？」

歯を食いしばり、唸り声。盛り上がる両腕の筋肉は既に限界を訴え悲鳴を上げている。だが、普通ならトロールとの力比べなどというイカれた行動などせず、力を逸らすなりして棍棒をいなすのがこの場では最適な方法だろう。勿論いなほにはそれを成したうえで反撃する技量があるのだが、あえて彼はその選択を廃棄した。

男と男（？）の真っ向勝負で、力を逸らすなどというつまらない選択を選ぶなど馬鹿げている。

「アアアア……！」

だが内心の気合いとは裏腹に、いなほの膝は折れ、今にもトロール二体の怪力の前に屈服しようとしていた。その事実的喜悦を覚えたのが他ならぬいなほだ。自分が窮地であることこそが楽しいと思うその精神は、まさに戦闘者としての本能か。

浮かぶ笑み。攻撃的な歓喜が、押されている自慢の筋肉を刺激する。まだまだ、この程度で俺が屈するわけがない。これ以上ないと思われた筋肉の肥大がさらに起こる。いなほの筋肉が、まるでアクセルを踏み込み勢いよく回転しだしたエンジンのように発熱し、あまりの熱量に蒸発する汗が湯気となって体から舞い上がった。熱した鉄か何かか、人類の規格を凌駕した筋肉は、今まさに鋼の如き変貌をなしていた。

「グギャー!?」

トロールが困惑の声を出す。押しこんでいたはずの棍棒が、何故か徐々に自分のほうへと押し返されている事実が二体の怪物に驚きを与えていた。

そして驚愕を叩きつけた本人はといえば、膝を持ち上げ、腕を突き出し、そして一気に棍棒を押し返したところで、幼い子どもの胸程度はある棍棒をただの握力だけで握りつぶした。

「ハッハー！ 最高だあああ！」

頼りの武器を失った二体にいなほは飛びかかると、鋼の腕で首にリアットをかました。分厚い皮と脂肪と骨に守られているはずのトロールの首が、それ以上の硬度を持つ肉体の爆撃によってたまらず破碎。一撃で命を刈り取られたトロール二体が沈むといなほも着地。さらに前には三体のトロール。焦らず中央の奴の懐に潜り込み、

鳩尾に拳を叩きこむ。

三度吹き飛ぶトロール。いなほは吹き飛んだ奴には目もくれず、左右にいる魔物を交互に睨んだ。戦いに飢えた獣の眼に見据えられ、頭の鈍いトロールですらようやくいなほという化け物が、自分達を大きく上回る戦力を持つことを理解した。

恐怖から、後ずさるトロール。だが既に戦意を失ったところで、全力での戦いに酔ういなほが攻撃の手を休めるわけがない。次はどいつをぶっ飛ばすか。両手を大きく広げて拳を作る。

「次い……よおやくよお。俺の小せえ脳みその奥のほうでギンギンしてきたんだ。もっと派手に決めようぜ」

左右に目配せ。ぶん殴りにこいと、あえて挑発するいなほだが、行けば死ぬのが確定している死地へ行こうとする程トロールは馬鹿ではない。

残された手段は少なく、故にトロールは、何も考えず尻尾を巻いて森の奥へと逃げ出した。

あまりにも唐突な戦いの終わりに、暫くいなほは馬鹿みたいに口を開けて遠くなっていくトロールの足音を聞き続ける。だが次第にその体がわなわなと震え、遂に爆発した怒りのままに地面を思いつきり踏みつけた。

「テッ……メエラアアア！ それでもタマあ付いてんのかあ！」

激昂。野獣のような絶叫をあげて、いなほは自分の左側にいたトロールに狙いを定めて走り出す。

まだまだ戦い足りないのだ。欲求不満で憤る心のまま、いなほは深い森の中を足音目がけて疾走を始め、

「見つけた……！」

その途中、運よく立ち止まったトロールを見つけて、いなほはそいつ目がけて襲いかかった。

第二話【ヤンキーばんち】（後書き）

次回、少女とヤンキー

### 第三話【ヤンキーと少女】

「おい。何がキに手えだそうとしてんだよ」

え、と疑問を口に出す。涙で滲んだ少女の視界に、トロールとは違う、不思議な出で立ちの男が立っていた。トロールより低いのが、充分に大きな体と、細いように見えて、綺麗な調度品のような筋肉は、太陽の光を反射して何故か神々しく感じた。

強い意志の籠った目は、変わらずにトロールへと向けられている。そして少女を掴むはずだったトロールの醜くぶよぶよとした腕は、男の逞しい腕に掴まれ、それ以上少女へ近づくことができなかつた。

「ギャギャギャ!?」

トロールの混乱は、突然の乱入によるものではない。たかが人間の腕の力で、自分の腕を全く動かすことができないことに混乱していた。怪物にとっての悲劇は、先程の戦いに参戦しておらず、男、いなほの能力を知らなかつたことか。

だが万力のようなだつたいなほの手が突如緩められてトロールは拘束から脱することができた。掴まれた部分はうっ血しており、緑色の皮膚にいなほの手形がくつきりと残っている。

「ガアアアアアアア!」

トロールが怒りのままに咆哮した。叩きつけるような声を聞き、少女はたまらず耳を塞いで縮こまる。そんな少女を庇うように、トロールとの間にいなほは立ち塞がった。

「あ、あの……！」

少女は、武器も持たず、魔法も使おうとしないいなほに危ないと声をかけようとしたが、恐怖から上手く声を出すことができない。いなほは少女に振り向くことはせず、ただ拳を天高く突き上げることで応じた。鉄塊を思わせる拳を少女は目で追う。光に濡れるそれはやっぱり綺麗で、見ているだけで体を捕らえていた恐怖の鎖が解かれていく。

「ガアアアアアアア！」

だがそんな少女を現実に取り戻すのはトロールの雄だけびとこちらに迫る地鳴りのとき足音だ。巨体を揺らし襲いかかるトロールに対し、いなほは掲げた拳を腰だめに、迎え撃つように腰を落とす。

「危ない！」

少女の悲鳴は当然だ。普通、トロールという魔獣を打倒するためには、装備を整えた兵士が数人、または熟練の冒険者でなければ打倒が難しいとされる生き物である。

だというのに、目の前の男は、肌の露出の多い衣服しか身に付けておらず、武器もなければ魔法を使う気配すらない。

言ってしまうえば生身一貫、己の肉体のみで肉体という点で人間を凌駕するトロールと対峙しているのだ。

「おう、ありがとうよ」

少女の叫びに、いなほの返事は場違いなまでに軽い。そこらに散歩にも行く気軽さだ。だが少女の悲鳴が当然ならば、いなほの余

裕もまた当然。ここに至るまでに、何匹ものトロールを葬りたいなほからすれば、今更一体どうしたところではない。

見慣れてしまった棍棒が頭上より来る。いなほは慣れた動作でそれを避けると、対象を失い前のめりになるトロールの顔面に、カウンターの拳を突き出した。

「そらあ！」

巨体を持ち上げ、拳は振り切られた。まるで体重がないかのように吹き飛ぶトロールが木と接触し崩れ落ちる。少女は人類が力で勝る魔獣に単純な力で勝った事実を目を見開いた。

「凄い……」

他に出る言葉がない。「チツ、野郎ども完全に逃げやがったか」  
ぼやくいなほを、少女は驚愕一転、今度は神聖なものに祈る巫女のように羨望の眼差しを向けた。

「本当に、勇者様」

「あっ？」

声に釣られて、ようやくいなほは膝をついたままの少女を見た。  
向けられる視線に込められた尊敬を感じてか、いなほはむず痒そうに頬を掻く。「あ……」何か言おうとするが、生憎と女さらにかギの対応なぞしたことのないいなほは、何を言っていないかわからず、とりあえず手を差し出した。

「立てよ。いつまでもケツ汚す必要はねえだろ」

「あつ……」

慣れないことに恥じているいなほの赤い頬を知らず、少女は差し出された大きくて固そうな掌に視線を移した。

たくましくて、鋼のように堅牢だというのに、大樹のごとき安心感のある無骨な手。少女はいなほの手をマジマジと見てから、次いで自分の掌を見た。土で汚れ、畑仕事と毎日の家事でひび割れかさついた自分の手。目の前の強くて傷も知らない鋼の手と比べ、なんと汚く、弱いのだらう。

そんな自分の手で、はたしてこの手を握っていいのか。逡巡する少女に、いなほはしびれを切らしたのか、その手を無理矢理掴んだ。

「ひゃ……!?!」

強引に立たされると、少女はいなほの大きさを改めて認識した。トロールに比べ低くはあるが、それでも充分人間にしては巨大な体躯と、その体がまとう細くしなやかな筋肉は、パツと見は確かに鍛えて入るが、トロールを打ち倒せるほどには見えない。だが、間近で見た今ならわかる。皮膚の内側の筋肉は、一本一本の繊維すら感じられるほどの力強さを放っていた。一体どんな鍛錬をすればこの境地にいたるのかわからない。

「やつぱし、勇者様だ」

だから少女は確信した。家に唯一あるおとぎ話の絵本。そこに描かれていた悪を打倒する強き正義の勇者。それが彼なんだと少女は信じた。

「勇者あ?」

だが言われた当人であるいなほとしては意味不明である。偶然助けた女が、何を思ったのか自分を勇者と呼び潤んだ眼差しでこつちを見ている。

とりあえず、立ち上がった少女が日本語を話していることに感謝した。天然だるう肩まで伸ばした金髪と、緑色の大きな瞳に、形のよい高い鼻、そして透明感のある白い肌の少女は、いなほの胸よりやや低い背丈しかなく、見た目の幼さと相まって、そこそこに可愛い少女ではあるが、いなほ的には後数年先に期待といった感じである。おそらく十四、五歳程度といったところか。ともかく、そんな見た目であったため、まさか会話が通じるとは思わなかったのだ。

それにしても田舎っぽい服装である。使い古されてよれよれのシャツと、足もとまで隠すぼろぼろのスカートとは、まだいなほの服のほう丈夫であろう。靴もぼろぼろで、ただ底がある程度といった感じか。

まさか初めて会った人間が（いなほとしてはトロールは豚の進化系でしかない）ホームレスとは、内心少女に対して失礼なことを考えながら、まずはとばかりに、少女の手を握ったまま、力加減に気を付けてもう少し力を込めて握った。

「いなほだ。早森いなほ、俺の名前な。テメエは？」

「えっ！？ あっ……わ、私はエリス、です……あの、助けてくれて、ありがとうございます！」

少女、エリスは言い終わると同時に頭を勢いよく下げた。手を離したいいなほは「まあそりゃついでだから気いすんな」などと感謝にむず痒そうにして眉をひそめ、照れ隠しを眩く。

流石勇者様、謙遜するなんてなんと奥ゆかしい。などと、エリスは勘違いをする。だが実際彼女の目の前にいるのは、勇者などという強く優しく凛々しい人ではなく、気合いと根性と喧嘩が大好きで

しかない場末のヤンキーでしかないのは何たる皮肉か。

「とりあえずよ、ここが何処かさっぱりなんだ。エリス、どっか近くの町まで道案内頼むわ」

「道案内……そうだ！ 皆！？」

突如、エリスはこれまで見せていた安堵の表情を青ざめさせた。そして弾かれるように走り出そうとして、足首から走る痛みにはバランスを崩しその場に倒れた。

「オイ！」

慌ててその体を抱きとめる。そこでいなほはようやくエリスが足首を痛めていることに気付いた。

「っ……村に、皆が……！」

「なんだかわからねえが、村にいきでえのか？」

エリスはいなほの問いに頷く。「あの……」お願いだから村の皆を助けて、そう続けようとしたエリスの頭に、いなほはその大きな掌を乗せた。

「理由は知らねえ。だが、状況は理解してるつもりだ。あの豚、お前の村に来たのか？」

「は、はい」

「任せろ」

掻き毟るように、エリスの頭をなでると、荷物を持つかのようにいなほはエリスの体を肩に担いだ。

「わわ！」

いきなり高くなった視界にエリスがたじろぐ。その反応が可笑しくて、いなほは口を弧にして笑った。

「んじゃ、道案内は任せたぜエリス」

「は、はい…！」

コクコクとエリスが応じて指を指した方角に向けていなほが駆け出す。

その一歩こそ新たな門出。不倒不屈の不良の冒険が、今始まる。

第三話【ヤンキーと少女】（後書き）

次回、ハイパーグロタイム

**第四話【ぶっつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり(前書き)**

タイトル通りキツイ表現があるので閲覧には気をつけてください。

#### 第四話【ぶつつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり

「皆……！」

いなほの肩に担がれたエリスは、指をさして村の方向を示しながら、はぐれてしまった家族と友人を思い、焦燥感に駆られていた。森をまるで猿のような軽快さで駆けるいなほも、そんなエリスの横顔を見て、一層速度を速めた。

喧嘩で熱くなった思考はすっかり冷えている。改めて言えば、あのトロールはこれまでいなほが戦った生物で一番強かった。それでもいなほの敵にはならなかったが、問題なのは、あれが複数来た場合、はたして普通の人間が相手できるのかということだ。

いなほの中でのトロールの位置づけは拳銃で武装した人間よりも高い。走りながら、先程エリスの気晴らしになればと考えトロールのことを聞いたが（この状況の当事者についての話をする時点で気晴らしにはまるでならないが）、どうやらトロールはHランク相当の敵で、一体倒すのに武装した兵士が幾人も必要らしい。

そんな魔物が群れで襲ってきた。頭の悪いいなほだが、野獣の如き本能が状況が危険であることだけは理解した。

「間に合えよ……！」

加速しながらも、木々にエリスが当たらないように気を配りながら進むいなほ。エリスの焦りをわかるからこそ、彼の内心は逆に冷静になっていた。そして、話を聞いた上で、最悪な状況も脳裏に描く。

そして、遂に抜けた森の先に広がる光景は、いなほが思い描いた以上に最悪な結果そのものだった。

視界一杯に広がるのは、質素でありながら、それでも穏やかな空気と、暖かな人達が暮らしていたエリスの生まれ育った村の姿ではない。そこにあるのはトロールの群れによりなすすべなく蹂躪され、荒れ果てた村のなれの果てだ。

家屋は倒壊し、作物等を育てていた田畑は荒れ果て、その崩壊した村を、優しかった村人ではなくトロールが闊歩していた。その周りには村人達の見るも無残な死骸が転がっている。一撃で頭を砕かれた死体は、まだ幸せなほうだったかもしれない。手足を潰された少年の苦悶に満ちた残骸。

破られ、最早身にまとう衣服ではなくただの布切れを体に羽織り、トロールなのであろう汚い体液に穢された、この世で最悪に近い蹂躪を受けて絶命した少女の骸。その周りには少女とおなじように、トロールに鬩られ死んだだろ女達の死体が積み重なっていた。

張り付けにされて体中を殴られ死んだ者もいた。もう死んでいるのにトロールに振り回され遊ばれている者もいた。棍棒の代わりに使われ、それを持ったトロール同士の試合に使われている者もいた。

「あ、うあ……」

エリスはそこまで見て、これ以上見るのに耐えられず嗚咽を漏らしながら目を閉じた。

トロール達は笑っている。下衆な鳴き声を轟かせて、村人達が大切に育てた食料を乱暴に食べ散らかし、村人達を『遊び道具にして』笑っている。

これが魔獣だ。人間が恐怖する魔獣の姿だ。躊躇なく人にとっての絶望を振りまく最悪の天敵。

「う、うえ……」

肩に担がれたままのエリスが、我慢できずに嘔吐した。手で押さえるが、溢れた内容物はいなほの体を容赦なく汚した。だがエリスにはそのことを謝罪する余裕もなかった。手で押さえる気遣いが出ただけでも上等だ。

そしていなほは、体を汚されていることを気にする余裕もなく憤怒していた。

「テメエら…… テメエ…… テメエら……！ やったな…… やりやがったな……！」

エリスが目を瞑っていたことは不幸中の幸いだっただろう。もし今少女がいなほの顔を見ていれば、あまりにも壮絶な険相い意識を手放していたに違いない。最早、いなほの形相は鬼のそれだった。だがどうにか残る理性でエリスを下ろすと、蹲る彼女には目もくれず前に、地獄を具体した村へと踏み込む。

いなほは生まれてこのかた死体を見たことは片手で数える程度にしかない。それですら事故にあつた仲間や、抗争の結果頭を強く打つなどして運悪く死んだ奴と言つた程度だ。このような直視すら難しい死体を見たことはない。なら普通はエリスのように吐いて、泣いて、蹲つて、どうしようもない現実に打ちのめされるはずだ。

だがいなほは怒つた。悲惨に憤怒し、激昂した。体の内側から沸き起こる感情の波は、いなほはひたすら前へと押し出す。気分を速度で表すなら既に音速は振り切つた。白熱する鼓動と、連動して盛り上がる血流、五臓六腑を疾走する音速の鮮血は、いなほの骨と肉に際限なく沁み渡り起動を促す。

心臓がライブハウスのバンドの音楽のように五月蠅い。だが騒音のビートが今の自分には似合っていると頭の片隅でいなほは思った。なんせこのゲロを吐きたくなるような状況だ、狂つた音が相応しい。

「ゴキゲンだ…… 随分とユカイな光景じゃねえか……！」

吐きだす吐息も熱を帯びている。浮かぶ笑みと言葉とは裏腹に、赤く沸騰するマグマのような心は奴らへの絶殺をすでに確定していた。

ようするに、いなほはこの状況に驚くでも怖がるでもなく、単純に『キレてしまった』のだ。

眼下の地獄へゆっくり歩み寄る。いなほの周りに浮かぶ怒気に感付いたのか、村で好き放題していたトロール達が一齐に森から現れたいなほを見た。

「ここが何処かもわからねえ。お前らが何なのかもわからねえ。でもよ……」

一歩一歩、踏み出す足はサンダルを脱ぎ棄てている。素足のままの歩行は、その一踏みごとに大地を揺らし、土を抉っている。土に沈む足はまるで雪原を歩いているかのような。それほどの踏み込みで歩かないなほの心境は、最早筆舌も出来ない。

燃えるような怒りを、殺戮を決定した筋肉が指し示す。抉れる大地は貴様らだと、足蹴にせんといなほが行く。

語るまい。告げる言葉は後一言だ。

「瞬殺だぜテムエらああああ！」

言葉に偽りはない。初速で最速、大地を抉る脚力の踏み込みは、いなほの近くにいたトロールにあった十メートルの距離を瞬く間にゼロにした。

そのトロールからしたら、まるでいきなりいなほが消えたように見えただろう。懐に潜り込んだいなほは、握りこんだ拳を腰だめにする、バネ仕掛けのごとき勢いでトロールへと解き放った。

吹き飛ばすであつたらまだよかつただろう。トロールの腹に直

撃したいなほの拳は、その肥え太った腹を貫通していた。背骨も砕き背中から飛び出た拳にまわりつく生温かく、腐臭を放つ臓腑を意識もしない。回復は絶対にさせないとばかりに、捻じりながら拳を引き抜くと、空いた穴から血が噴き出していなほを染めた。すっかり赤いじゃねえか。狂喜するいなほは鮮血を頭から浴びて嘲る。

「ガアアアアアアア！」

そこでようやく他のトロールも気付いたのか、二十を超える魔獣の群れが同胞が死んだことに憤り咆哮する。それまで遊び、または蹂躪していた村人をゴミのように放り出す様に、いなほの怒気がさらに膨れ上がった。

その尋常ではない狂気に気付くことはない。本来なら有象無象の人間など、トロールにとって相手ではなかったはずだ。だが、この瞬間大勢は決まる。刈られる対象こそが己だと理解した時には、トロール達は全ていなほの人間の範疇を超えた理不尽すぎる筋力の暴虐によって、ものの十分もせずに壊滅するのだから。

殲滅に至る過程には意味はない。逆に蹂躪される側になったトロール達は、先程森でいなほの強さに怯え逃げた者と同じように、半数が容易く葬られた時点で逃げ出した。だが怒りに猛るいなほはその超人的な脚力で、鈍重なトロール達に追いつき、今度こそ逃がすことなく殺し尽くした。

「ふっ……ふっ……はああ……」

流石に疲れたのか、顔に付着した血を拭いながらいなほは肩で息をして、周囲への警戒を行いなながら呼吸を整えた。村にはトロールと村人の死骸が転がっている。戦いの最中、周囲に無事な人間がいるか確認したものの、無事に思える人は確認できなかった。

だがもしかしたら家屋の中にもいられるかもしれない。

「……その前に、だな」

いなほは森の手前で未だ蹲るエリスへと歩み寄った。体を震わせ、亀のように縮こまる少女の肩を叩こうとして、その手が赤く染まってることに気付き、寸でで止めた。

「おい」

変わりに、彼にしては比較的穏やかに（普通の人からしたら威圧的ではあるが）声をかけた。

だがエリスからの返事はない。何事かを呟きながら、一向に顔を上げようとはしなかった。

「……あいつらをあのままにはしておけねえからよ。墓あ作るから何かあつたら呼べ」

かける言葉が見つからないとはこのことだろう。普段相手にしている悪ガキなら叩いて無理矢理起き上がらせるが、相手は少女、しかも育った村の人間が蹂躪されているのを見たとなれば話は別だ。居づらそうに眉を潜めたいいなほは、辺りを警戒しながらも、トールを持つていた棍棒を拾い、素手で真ん中から『引き裂く』と、適当に開いた空き地で裂いた棍棒をスコップ代わりにして穴を掘り始めた。

「ったくよ。俺ア何やってんだかね」

事故にあつたと思つたら、よくわからん奴のいるよくわからん場所に飛ばされ、少し話したと思つたら光に包まれ。そして光が収まつたと思えば森の中、さらに見たこともない巨大で醜い豚もどきと

の盛大な殺し合い。

「それで、やったこともない墓作りたあ、俺もヤキが回ったか」

水でも掬うかのような手軽さで土を掘りつつ、自分の境遇に苦笑する。これまでも喧嘩に明け暮れた生活だったために、決して非凡な人生だったとは言えないが、こつも滅茶苦茶なことは人生で初めてだ。

あつという間に人一人分の穴を十個作れば、空き地に穴を掘るスペースはなくなってしまった。とりあえず掘った分だけ埋葬しよう、そう決心したいなほが振り向くと、そこには未だ泣きながらも立ち上がり、足を引きずりながらもいなほの傍に近づくエリスがいた。

「あー……大丈夫か？」

すぐ傍に来たエリスは、下を向いていなほを見上げようとはしない。

だからガキかつ女は苦手なんだ。髪を乱暴に掻き毟り、二の句を告げようとした瞬間、エリスは勢いよく顔を上げた。

「あ、あのー！」

「お、おお！？」

身を乗り出しながら叫ぶエリスの迫力に、さしものいなほも驚いたのか一歩後ろに後退した。

エリスの瞳は、さっきまで蹲っていたとは思えないくらい強い意志が見て取れた。いなほが穴をせっせと掘っている間に一体何が起こったというのか。

「私も、私にも手伝わせてください」

「手伝うってーと……墓か？」

「は、はい」

何度も頷くエリスに、いなほは先程と違った驚きを感じていた。何か知らないが、必死に目の前の死を受け止めたのだろう。そのいなほより遙かに小さく、弱弱しい細い体で、親しい人と、住み慣れた村の破壊を見て、しかし立ち上がった。

内心を知ることにはできない。おそらくはやせ我慢だろうし、ただ単純に現実を理解することを手放しただけなのかもしれない。でも、立ち上がったことは事実で、いなほはエリスに最初感じた弱いというイメージを訂正した。

彼女はその心の在り方が強いのだ。

だからこそ、少女の下した決断に対して、いなほは確然とした態度で、

「駄目だ。足怪我してんだ、邪魔だから失せろ」

そう言って、エリスの足首を指差した。

「あつ……でも、私……」

言われて、確かにただでさえ肉体労働もできないのに、足を怪我しているとなれば、邪魔以外の何者でもない。

それでも何かしたいと目で訴えてくるエリスに、困った風になほは頬を掻いた。

「思ってる……」

「え？」

「死んだ奴らを、思ってやれ」

目をまん丸に見開いて、エリスはいなほの言葉を聞く。

柄にもないことをしたな。いなほは恥ずかしさを隠すようにエリスに背中を向けると、空いてる空き地に向けて逃げるように歩き出した。

第四話【ぶっつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり(後書き)

次回、暫くの世界説明

## 第五話【墓掘りヤンキー】

いなほの馬鹿みたいなた力のおかげで、この村にいる人間、全員分の墓は日が傾く前に完了していた。襲撃が起きたのが朝方だったというもあり、今はちょうど正午を少し過ぎたところだ。

「……」

一つ一つの墓に、エリスといなほは黙祷を捧げる。いなほは彼らとの面識はないが、その死を心に刻むために、こうして祈りを捧げていた。

エリスは果たしてどんな心境なのか。横目で目を閉じて祈る少女を見るが、神ならぬいなほでは少女の心の中までは分からない。

そうして全ての墓に黙祷を終えたとき、エリスは無数の墓をじっと見据えて、躊躇いがちに口を開いた。

「助けてもらったうえに、お墓も作っていただきありがとうございます  
ました」

「感謝される言われはねえよ。俺が勝手にやったことだしな」

「でも、ありがとうございます」

「ちっ……そういうの、くすぐってえんだよ」

感謝の言葉には慣れていない。憎まれ口は照れ隠しだ。エリスはそつばを向くいなほが可笑しくて小さく笑った。

不意に大きな風が凧いだ。未だ村に籠る肉と血の匂いが二人の鼻

を攢る。訳もなくいなほは眉を顰めた。「もしかしたら、生きてる人がいるかもしれませんが」と、風が収まると同時にエリスはそんなことを言った。

「多分、半分くらいは逃げたと思います。その内の何人がが、もしかしたらマルクっていう大きな町に向かっているかもしれませんが……」

唐突に語りだしたエリスの言葉は、地理を知らないいなほには希望的な意見か、現実的な意見かの判断はつかない。

「それに、死んじゃった皆の中にお母さんとお父さんはいなかったんです」

「……そうか」

「もしかしたら私のこと心配して探してるかも知れません。もしかしたら明日にはマルクに着いて、すぐに人を連れてここに帰ってくるかもしれません」

「……エリス、そいつは」

「だか……ら。私、私……まだ皆、生きてて、生きてるって……私……生きてるんだって……！」

次第に穏やかだったエリスの言葉は途切れ途切れになり、遂にはへたり込んで大声で泣き始めた。ダムが決壊でもしたかのように、止めどなくエリスは泣きじゃくる。

いなほはどうしようか悩んで、エリスに手を伸ばし、その手に乾いた血のついているのを見て、少女の細い肩を抱こうとした手を途

中で引つ込めた。何でも通してきた自分の手が、この時はどうしようもなく頼りなく、小さい。

いなほは、思い出したかのように唐突にポケットをまさぐると、ありがたいことに入っていたタバコの箱とライターを取り出した。そして、タバコを一本口に咥えて、ライターを先端に近づける。火の灯ったライターに、タバコの先が燃やされた。そのまま息を吸い込み、タバコに火を点ける。

同時に口の中に広がる紫煙を、内に潜む無力感と共に肺へと取り込み、ため息をするように吐き出した。

「……うるせえよ、エリス」

悪態は嗚咽するエリスには届かないし、聞かせる気もない。追いつかなかった現実が、いなほもようやく実感できた。

人が死んだ。他人だと割り切るには難しいくらい、あまりにも無残な形で人が死んだ。もし自分がもっと早くここに来ていたら、そんな仮定の話はどうしても考えてしまう。それは弱気だ。いなほはありもしない可能性を紫煙に紛らわせた。感傷など、らしくない。

今になって体に付着した血肉の臭いが嫌でも鼻についた。己もまた、初めて生き物を殺した。エリスの話では、あれは人間ではないらしい。それでもいなほは、躊躇いなく奴らを刈り尽くした。

そのこと自体には後悔はない。トロールもまた殺意を持って自分に接してきたのだから、あの場面でもし自分がビビっていたら、墓にいる野郎共と同じ末路を辿っていただろう。

だが殺したのだ。殺害、かつての世界なら逮捕され、罰を受ける重罪。犯してはならない禁忌。それをいとも容易く実行した自慢の五体。

心に引つかかることは何も無い。それこそが、いなほの心になによりも引つかかることだった。

「うえ……えう……」

まだ肩を震わせてはいるがエリスの鳴き声は次第に収まりを見せていた。涙で腫れた目がいなほを見上げる。

何も考える必要はない。タバコを啜えたまま口を弧に吊りあげて、いなほはエリスの視線を真向から受ける。

「とりあえず体が臭くてたまらねえ。シャワーかなんか貸してくれや」

今はこの、小さいながらも強い少女の傍にいよう。いなほはそう決心した。

**第五話「墓掘りヤンキー」(後書き)**

次回こそ世界観についての説明。

## 第六話【まっばヤンキーと説明少女】

シャワーでは通じなかったのは流石に焦っていたいなほだが、どうか水浴びをしたいという意図が通じ、エリスの案内で二人は近場にある川に来ていた。

生まれも育ちもコンクリートに囲まれた世界にいたいなほの知る川とは、捨てられたゴミや様々な事柄が重なって生まれた底の見えない汚い水だ。そんなわけで当初は服を洗えればいいやというだけの考えだったいなほだが、目の前に広がる澄んだ水を見て、感嘆のため息を漏らしていた。

「こいつあスゲエ」

「このくらいの川なら何処にでもありますよ？」

「俺のいた場所だとよ、底の石なんざ見えなくらい汚いのが当たり前だったんだ。その点この川のスゲエのはスゲエってもんよ」

「へえ……そうなんですか」

いなほは道案内のために肩に担いでいたエリスを下ろすと、サンダルを履いたまま川に入った。

肌に鳥肌が立つくらい冷たく、芯に来るほど気持ちいい。熱に浮かされた肉体がつま先から冷却される感覚は言葉にもできない清々しさをいなほに与えた。

「そつえばいなほさんは、何処から来たんですか？」

「あー？ 日本だよ日本」

「ニホン、ですか？ それって何処にある国なんですか？」

「お前、日本語話してるのに日本知らねえのか？」

驚いたとばかりに、水と戯れていたいなほはエリスに振り返った。川辺で適当な石に腰を下ろすエリスは、本当にわからないといった様子だ。

互いに首を傾げる。まあ別にいいやといなほは結論した。面倒なことは考えない、というかだるい。

「まっ、話せるなら別に構わねえか。つかエリス」

「は、はい」

「ここら辺のことについて知ってること教えろや。こちらら来たばっかで何も知らないんでな」

「ここら辺って……ならマルクのことでも話しましょうか？」

「マルクってーと……さっき言ってた町か？」

「はい！ 近隣の村の収穫物は基本的にあそこで売買しているんですよ」

エリスはそう前置きすると、マルクについて語りだした。

そもそもはアードナイ王国の左端にあり、周りを様々なダンジョンや森に囲まれている都市だ。アードナイを含めた四力国の国境に跨っていて、国家間の中立地帯となっている。だがすでに五年前、

アードナイの現国王によって、四力国同盟がなされているため、中立としての立ち位置は形骸化していたが、それでも昔から四力国の交流の場として使われていたため、現在も国同士だけではなく、様々な種族も入り乱れる町として賑わっている。そしてトロールも含めた魔獣の現れる森やダンジョンが複数あることから（マルクの都市内にも地下ダンジョンが存在する）、いくつもの冒険者ギルドの本部や支部が設立されていることでも有名だ。

「他にも魔法学院という魔法を学べる処もあって、マルクに住んでいる子どもから、近隣の村や遠くの国から来た子ども達がそこで魔法を学んでいるみたいなんですよ。そして学びながらギルドに登録して実戦も経験する　　っていなほさん何してるんですか!？」

語るのに熱中していたエリスがいなほを見ると、彼はいつの間にか服を全部脱いで川の水と戯れていた。

聞いてきたのはそっちなのに何で話聞いていないのかという苦情も浮かばない。慌てて顔を背けたエリスは「見ちゃった。見ちゃったよう……」と顔を真っ赤にしてぶつぶつと呟く。

いなほはといえば豪快なセクハラをかましたという自覚もないままに、汚れた服と体をせっせと洗っていた。ちなみにエリスの話など前置きの時点で聞いてはいない。

うーうー呻きつつ、エリスは顔を両手で覆いながらこっさり川へと目を向けては慌てて背けるを繰り返す。純朴で思春期な少女には、大の大人の全裸は刺激的すぎる。

「なんだエリス。さっきからチラチラチラチラとよ。言いてえことがあるならさっさと言いやがれ」

「もう！　いなほさんはそんな、ぜ、全裸で恥ずかしくなんですか!」

「悔るなよエリス。親からもらったこの五体、誇りはあるが恥ずべき点は何処にもねえ！」

「私は恥ずかしいんですよお！」

ちょっと涙声になりながら叫ぶエリスではあるが、その乙女の叫びもヤンキーにはどこ吹く風。軽くシカトして血のこびりついた服を洗う作業を再開する。

初めて会った時のあの神々しい勇者への尊敬の念はすでにエリスにはない。理想の勇者の姿が崩れていくのを感じながら、エリスはさめざめと涙した。

憐れは乙女の妄想か。彼女が大人の女性になる日もそう遠くはないのかもしれない。

「もう！ バカ！ いなほさんのバカあ！」

捨て台詞を吐いて、エリスは這うようにしてその場を後にした。痛む足がもどかしい。でなければこんなセクハラ現場には一秒だっていなかったのに。

でも、とエリスは父以外に初めて見た男の人の裸を思い出して顔をさらに赤らめた。白状すれば、いやらしい意味ではなく、いなほの裸はとて綺麗だった。鍛え抜かれた鋼の肉体は、一重に何かを叩くということに特化しているからこそ『美しい』。恥ずかしさもあつたが、それとは別に悔しい感情がエリスにはあつた。異性で体を比べるのも変な話だが、いなほに比べ、エリスは自分の肉体の貧相に落ち込みを隠せない。

「薪、集めよう……」

足は痛むが、走るといった無理をしなければ大丈夫だ。先程のことを忘れることも兼ねて、エリスは川の近く、あまりいなほのいる場所から離れないように薪になる木を探し始めた。

こうして薪を集めれば、つい昨日まで当たり前だった日々が甦る。涙目になりかけて、エリスは慌てて目元を拭った。思い出したら、辛くなってしまう。でもやっぱり思い出さないようにしても、家族の顔、友人の顔、優しい村の風景が脳裏に浮かび、涙腺を刺激する。でも今は我慢しないといけない。まだ生きている人もいるかもしれない。その希望があるから、あの惨状を見ても、エリスは何とか踏ん張っていられる。普通では考えられない心の強さだ。エリスは確かにただの田舎の村人だが、人一倍優しく、そして人一倍心が強い。

だけどやはりただの少女なのも事実なのだ。うつすら目じりに浮かんでいた涙が、一つ、また一つと、薪を拾う度に零れ落ちる。

「泣いちゃ駄目。泣いちゃ駄目」

自らに言い聞かせるように呟きながら少女は薪を集め続ける。苦しいけど、悲しいけど、そこで泣き崩れたほうが楽なのも知ってるけど、倒れたら前に進めないのがわかるから、エリスは決して膝を折らない。

そうして暫くして、彼女がその手一杯に薪を持って川に戻ると、ちょうどいなほも水浴びを終えたのか、下着一枚で川辺に寝そべっていた。

「いなほさーん！」

危なっかしい足取りでエリスが歩いてくる。いなほは立ち上がりエリスの元に行くと、持つてる薪を半分受け持った。

「ありがとうございます」

「気にすんな」

エリスは花のように微笑むと、手慣れた手つきで川辺の石をどけて、薪を組み立て始めた。

「何するんだ？」

「寒くないですか？ この水、年中冷たすぎるので村の中じゃ常識ですから、今火をつけますので温まってください」

下着一枚とサンダルだけのいなほを見てエリスは言った。実際にはそこまで寒くないいなほだが、好意を無碍にすることもあるまい。「おう」と軽く頷くと、火のつけかたなどわからないいなほは、エリスの作業を興味深く見た。

せつせと積み上がる薪は、いなほにはさっぱりではあるが火が付きやすいように組み立てられている。積み木を見ているかのようで見ても飽きない面白さがあった。

「よし……後は」

エリスは両手を軽くはたくと、静かに目を閉じた。何をするつもりなのか、いなほがその様子を見てみると、エリスの体から蛍の光のような緑色の粒子が溢れだしてきた。エリスはこぼれだす光を集めるように右手を掲げると、人差し指と立てる。光は意思があるかのようにエリスの指先に集まると、淡い輝きを一層強くした。

幻想的な風景にいなほが言葉を失っていると、ゆっくりとエリスが目を開いた。

「『一握りの灯火よ』」

まるで世界中にでも響いたかのような、それでいて何処までも穏やかな声音と共に、エリスの指先の輝きが小さな炎に変貌した。

「おお!?!」

これで何度目の驚きか、突然の怪奇現象に声のないいなほを他所に、エリスは指先の炎を維持しながら、そつと薪に点火した。

ゆつくりと火が燃え広がり、エリスが指先を放して指先の火を消せば、薪の火は暖かい熱を伴ってゆらゆらと空に向かって伸びていく。

「さあ、体、温めてください」

薪を両手に持ちながら笑うエリスを、いなほはしげしげと見つめた。

舐めるような視線に晒されて、エリスはどうしたものかと右に左にと視線をやり、「あのー、いなほさん?」と声をかけた瞬間。

「テメエ! やるじゃねえか!」

その逞しい両手で、がっしりと肩を掴まれたのだった。

「え? ええ?」

混乱するエリスに、いなほは続けて「なんつうかスゲエ」とか「やるじゃねえかスゲエ」とか「全く予想外にスゲエ」等、エリスの体をゆすりながらスゲエスゲエと連呼する。

「あえ！？ あえええ！？」

だがゆすられるエリスとしては堪らない。自分は火をつけただけなのにどうしてこんなに体を滅茶苦茶にされなくちゃいけないんだとか、というかスゲエって一体何が凄いだとか混乱の極みだ。

暫くそこでは下着一枚のマツチヨに両肩を掴まれゆすられる薄幸少女の図が繰り広げられたのだが、いい加減目が回ってやばくなつたエリスが「やーめーてー」となさけなく訴えたことにより、いなほの意図しない危険行為は誰に見られることなく終わるのだった。

「おう、悪いなエリス。いやー、生まれてこの方光る人間も指から火を出す人間も見ただことなくてよ。柄にもなく興奮しちまつたぜ」

「え、と……いなほさんは、もしかして魔法を見たことないんですか？」

「マホウ？ 何だそりゃ、武術かなんかか？」

全く知らないと言ついなほに、今度はエリスが驚く番だ。

「え！？ 魔法を知らないって……いなほさんいつもどんな生活してるんですか？」

「あー……あれだ、ム力つく奴をぶん殴って……つか俺のことは別にどうでもいいだろ！」

「ひい！？ じ、ごめんなさい！」

「わかりやいいんだわかりやよ」

いなほの剣幕に思わず謝ったエリスだが、実際は喧嘩して巻き上げた金で生活してましたなどと言えるわけのない、いなほの見栄のために謝る羽目になったとは露とも思っていないだろう。

ともあれ、魔法を知らないといういなほの言葉はエリスとしても驚きだった。

「この国、いえ、私の知る限りの世界だと、大なり小なり、魔法を使えるのは当たり前なんですよ」

「あ？ じゃあつまり、ここの奴らは誰でも指から火い出したり、体を光らせたりすることができんのか？」

「ええまあ……というか、そもそもいなほさんの言う光は、魔力って言っんですよ」

「魔力？」

「はい、魔力は誰にでも備わっている、魔法の源になるエネルギーです。例えば、この薪を魔力としますね」

エリスは片手に薪を持ち、ぷらぷらと揺らした。

「そして、その魔力に形をもたらすのが『式』です。先程私が詠いた詠唱。あの言葉に魔力を込めることによつて」

手に持った薪をエリスは火の中に投げ込んだ。音をたてて薪が燃え上がる。エネルギーは炎という形を得た。

「このように、魔法としてこの世に顕現します。でもただ詠唱するだけでは駄目なんです。詠唱する言葉に込められた意味を理解する

ことで、適切な形に組んだ式に、魔力という何にでもなりうる力を通して実態となす。普通は私のように火を出す魔法や、水を出す魔法程度なら、駐在してる兵士さんや親に、大きな町に住んでいたら魔法学院で教わるんです。」

「あー……つまり、その魔力つてのがあれば、俺も火を出せたりするのかな？」

「正しくは魔力単体だと意味はないんですが……いなほさん、魔力出せます？」

疑うようなエリスを、いなほは「ハッ」と鼻で笑った。

「んなのやり方わからねえのに出来るわけねえだろ」

「ですよね……」

堂々と言うべきことではないだろう、と内心でエリスはぼやく。

だが正直な話、エリスはいなほが魔法を使えないとは思っていなかった。何せあのトロールの群れを一人で殲滅したのだ。魔法を使った感じはしなかったが、もしかしたら無意識で魔法を使っているのかも知れない。とまで考えて、やっぱしそれはないなとエリスは断じた。

魔法はただ魔力があればいい話ではない。膨大な魔力があれば越したことはないが、魔法には後にも先にも理解が必要不可欠だ。魔力とは、何かの形になる前のエネルギーである。それ単一は外界に光として現れる程度の影響力しかない。だが、魔力を扱う術者がそれに形を与えることで、外界に強い影響を与える力となるのだ。最もポピュラーな魔法は、言語魔法と呼ばれる、先程エリスが使った言葉に魔力を込めて、その言葉の意味に合った何かを顕現するもの

である。日常的に使っていて、最も簡単に理解が可能な言語魔法は、一番使われている魔法でありながら、奥が深い魔法である。ちなみに、強い言葉を顕現させるには強い魔力が必要である。他にも、体や道具に刻んだ刺青を媒体とする魔法等の、言語に頼らない魔法も幾つもある。

魔力を込めるものへの理解と、それらを組み立てて式とする応用力。単純な魔法ならともかく、魔法は優秀なものであればあるほどより深い学びが必要になってくる。それとは別に、ただ魔力を与えただけで効果を発揮する魔法具という物品も存在する。

閑話休題。では魔法を使えないといういなほは、ただ嘘をついているのか。と言えばそれも考えられない。半日程度の付き合いだが、エリスはいなほという男が嘘をついて人を騙すといった男には見えなかった。

「じゃあ何でいなほさんはトロールを倒せたのかしら？」

思わず零れた疑問、慌ててエリスは片手を口に当て言葉を飲み込もうとするが、吐いた言葉は掬えない。いなほはやはり得意げに笑うと、自慢の腕を軽快に叩いた。

肌と肌が弾ける乾いた音。「こいつ一本であいつら何ぞ余裕だったぜ」力瘤の浮き出る腕をこれ見よがしに見せていなほは言う。

それから誰も頼んでいないのに、昔行った喧嘩について語りだすいなほを、エリスは生温かい眼差しで見守りつつ、こう思った。

ああ、この人には魔法なんて必要ないや。

ぶっちゃけ、自分の魔法よりいなほの筋肉のほうがよくばど魔法らしいと、エリスは感じずにはいらなかった。

第六話「まっぴやんキーと説明少女」(後書き)

次回、感傷に浸るヤンキー

第七話【夜のヤンキー】（前書き）

場面ごとに更新してるので今回は短め

## 第七話【夜のヤンキー】

なんやかんやで先延ばしにしていた今後の予定だが、とりあえず今夜はまだ無事だった村の家屋に泊まり、明日マルクへの道を行こうということになった。

トロールの死体は村の端にまとめて積み上げたので、臭いは家屋の中までは来ない。この世界に来て初めての夜、いなほはエリスが寝静まったのを見計らって、外に出ていた。

空には色がそれぞれ違う五つの月以外に星はない。巨大な月のおかげで、電灯がなくても明るさは確保できている。だがいなほは異世界の幻想的な空模様には目もくれず、一人木々のざわめきしか聞こえない村の中央で地べたを見ていた。

「あいつ……手え握ったまんまだったな」

寝静まるまでの間、エリスはベッドの上で頑なにいなほの手を握って離さなかった。だいぶ明るくなっていたと感じたが、やはり心に負った傷は深い。ああやって笑っていただけでも奇跡なのだ。暫く彼女は悪夢にうなされるだろう。

エリスは今心細さに折れてしまいそうになっている。だがそんな彼女を置いて外に出てまで、いなほは今日のことを一人で思い返したかった。

「……強かったよな、あいつら」

巨体の化け物、トロール。感じた嫌悪感は抜きにして考えれば、あれはまさに極上の相手だった。これまで感じたこともない痺れるような闘争。夢のような時間だった。自分の力に対抗できる他者が

嬉しかった。

こんなことを考えてること、エリスには見せられねえな。自嘲して、でも考えずにはいられない。

ああ、殺戮に何も感じなかった。いけないことだというのに後悔は微塵もなかった。改めて自分が最低最悪な、喧嘩しか能のない畜生だと認めざるをえない。

「……ザマあねえ。結局、まともじゃねえのか」

喧嘩、喧嘩、喧嘩。いつでも自分はそれで、それしかなかった。その度、世話になった大人は『喧嘩はよくない』と諭してきて、自分はその大人に反発した。

タバコを取り出し火をつける。わずらわしい思いも全部紫煙に乗せればいい。殺戮に歓喜する自分に、言いようない違和感を感じる。この心ごと吹き飛ばすように。

「折り合いつける早森いなほ。ここで、生きていくんだからよ」

月に向けて拳を突き出す。迷いはないが意味のないこの拳に、いつか答えを掴むことができるのか。そんなことを考えながら、いなほはエリスの待つ家屋に戻るのだった。

第七話「夜のヤンキー」(後書き)

次回、怪奇!肩車ヤンキー

## 第八話【ヤン車、疾走中】

慣れない寝床での就寝だったために、いなほは若干寝不足気味だ。エリスが何度も悲鳴を上げながら飛び起きたのもそれに拍車をかけていた。

互いにうつすらと隈を目じりの下に浮かばせた二人は、まだ残っていた食料で食べれそうなのを適当に選び出し、朝食を取りながら今後のことについて改めて話し始めた。

「んでよ、普通に道進めば半日でマルクってえところには着くんかな？」

「は、はい。私は後から行くので、いなほさんは先に」

「アホ、担いでくに決まってるだろ。ここら辺のことはさっぱりなんだ。テメエは黙って俺の道案内をしやがれ」

照れ隠しに悪態をつきながら、いなほはエリスの足を見た。

エリスの痛めた足首は現在、トロールの腰布を川で洗浄し、適度な形に破いた物を使って固定してある。動かさない分には痛まないだろうが、半日を歩くには心もとない。

なので基本方針は、いなほがエリスを担いでマルクを目指す。こっとう方向で決定した。

「おし、善は急げだな」

「わわっ！」

食べ物を胃に詰め込み終わると、いなほはネコでもつまむような手軽さでエリスを持ち上げ、その両足を自身の首にかけた。所謂、肩車というやつだ。思春期ど真ん中のエリスとしては、大人の男の首を足で挟むというのは抵抗のある行為だったが、そんな気持ちも高くなつた視界から眺める景色を見てすぐに吹き飛んだ。

「わあ！ 高い高い！ すっごい高い！」

「へっ、気に入ったかよ。おら、行くぜ？」

「はい！ ぐーぐー！」

天高く片手を突き上げて、エリスは元気よく声を張り上げた。気合いのこもったいい叫びにいなほもご機嫌だ。「悪くねエ一步だ」と呟くと、村の入り口から遠くに続くろくに舗装されていない、ただ草の生えていない道へと踏み出す。

空は快晴で、雲一つもない。うっすらとだが五つの月の姿も見れるのは異世界ならではだ。視界一杯に広がる広大な草原を眺めながら歩くだけでも飽きが来ない。道を中心に左右百メートルは草ばかりで、その向こうに森が広がっている。時折感じる気配は森のほうからのものだ。

おそらくは魔獣というものだろう。だが襲つて来ないのならばこっちからわざわざ出向く必要もない。左右への警戒は最低限にとどめ、目の前の果ての見えない道を見据える。彼方まで広がる道と、彼方まで続く空。どちらも地平線を超えて続いている。

「まずはこの道を歩いて、癒しの森に入ります。あつ、癒しの森っていうのはここらの人の言っている別名で、本当は第三十二制圧森

林っていうらしいです。なんでも国が森に入る危険な魔物を排除して、魔獣の嫌う匂いを放つ魔法具と、結界を周囲に展開して、いるのはちよつとした動物くらいなんです。資源も豊富ですし皆から重宝されているんですよ」

当然だがエリスの話をいなほは全く聞いてはいない。「ふーん」と投げやりに返事をしつつ、サンダルを脱いだ。そしてエリスを落とさないようにそれを拾うと、よくわかっていないエリスにサンダルを持たせ、

「走るぞ！」

突然走り出した。

「キヤア!？」

「しっかりつかまってる！」

どうでもいい説明を遮るために走り出したが、思いのほか効果はあつたらしい。速度は抑えてはいるものの、馬に乗ったかのように過ぎゆく景色を見てエリスははしゃいだ。

ともすれば、馬の脚力をそのまま維持してしまつたいいなほは日が頂点に登る前に癒しの森へとたどり着いたのだった。

大きく、存在感のある立派な木々が並び立つ森の一部に、ぼつかりと穴が空いたように道が続いている。どうにも甘つたるい匂いがあるので、いなほは不快だと顔をしかめた。この匂いが魔獣の嫌う匂いだというのが。しかし、魔獣の侵入を防ぐという結界は何処にも見当たらない。

「なあ、その結界って奴はどこにあるんだ？」

「結界は目に見えませんが、確かここにある結界は魔獣を弾くとかじゃなくて、何となく行く気を削がせる特殊な術を張っているとか」

「ようは入り口に糞撒いて来させないようにしてるわけだな」

「……最低な例えですけど概ねその通りです」

気落ちした面持ちでエリスは肩を竦めた。下品すぎる。会ったことではないが、盗賊とかつて皆こんな風なのだろうとか考える。

いなほはエリスの表情も心も知らず、彼女が落ちないように、座りやすい位置にしようと体を揺すり、ちようどいい感じに収まっ  
てから森に入った。結界というのがどういったものかわからず緊張したが、特に何も起こらず入れて些か拍子抜け。

「エリス！ 飛ばすから枝には気をつけるよ！」

「わかりました！ ごーですいなほさん！」

「おう！」

再び勢いよくいなほが走り出す。最初、いなほがエリスを担いで走った森と違い、ちゃんとした林道となっているため速度を落とすことはない。はしゃぐエリスは気付かぬが、まさかいなほが現在標準的な馬の速度以上のスピードで走っているなどわかるわけもないだろう。

言うなれば筋肉という鉄壁に覆われた戦車。立ち塞がる物をことごとく排除する無敵の陸上兵器といなほは化していた。

「馬よりもずっと速い！」

「ハッ！ 馬程度に俺が負けるわきゃねえだろうが！」

無敵の人カヤン車が、少女の声をドツプラー効果で響かせながら森に行く。後に様々な場所で『怪奇！ 肩車魔獣』と呼ばれる七不思議となることを、この時の二人は当然知るよしもないのであった。合掌。

第八話【ヤン車、疾走中】（後書き）

次回、新しい現地住民とヤンキーの異文化交流

## 第九話【ヤンキーの威を借る少女と女騎士】

女冒険者、氷結の騎士の二つ名を持つ女性、アイリス・ミラアイスは、長丁場だったゴブリンキング率いるゴブリン軍団の討伐を終えて、マルクにある自宅に帰る途中であった。

Ｆランクの実力者であるアイリスとはいえ、ゴブリン達の拠点の入念な調査に、その間にも村を襲うゴブリンから村を守る警護。一か月もの間それらを行っていたため、ようやく終わって気が抜けたせいか、やや疲労の色が濃かった。

「ふう……さて、この調子なら日が落ちる前にマルクには着くか……時間的にギルドへの報告もできるし、面倒はさっさと片付けるに限る」

着いてからの予定を言うことで、気を引き締める。

とは言っても精神的な疲労は積もっており、少しばかり気を緩ませてしまうのも無理はないだろう。魔獣が出ない森の中というのも緩みに拍車をかけていた。まあ、盗賊に襲われる危険はあるが、ランク持ちの盗賊などそうそう現れるわけもない。油断してても、盗賊程度なら軽くあしらえる自信がアイリスにはあった。

暫くは依頼も受けずのんびり休もう。そうしよう。絶対に一週間は家でごろごろする。脳裏で描くのは自堕落な生活だ。周りからは規律に厳しく、己や他人にも確然とした態度で接しているため、頭の固く凛々しい人間だと思われるが、本人からしてみれば心外である。ただ単に女だからと舐められないように厳しくしているだけで、私生活では自分に甘いアイリスである。

甘い物を一杯食べて、ご飯は出前で適当に頼む。そういえばまだ読みかけの小説があったはずだ。ついでに帰る途中に小説も何冊か

買って帰ろう。浮かれて逸る気持ちを抑えようとはせず、緩んだ笑みで顔に浮かぶ。

「よしよし、俄然やる気が……ん？」

ふと、葉の擦れる音と鳥の囀り以外の何かが耳に響き、アイリスは後ろを振り返った。

地鳴りと、甲高い　笑い声だろうか？　が聞こえてくる。馬車か何かが来ているのだろうか。ならば邪魔にならないように横にどこう。

次第に大きくなる地鳴りのような足音を聞きながら、アイリスは道の端に移動して、馬車が来るのを待つ。

音はどんどん近付き、少女のらしき笑い声も大きくなる。楽しげな声に思わず口元が緩んだアイリスは、途端、笑顔を凍りつかせた。

「な、な……」

「もっともつとー！」

「飛ばすぜえ！」

姿を現したのは馬なんかではない。少女を肩車した見たこともない服を着た長身の男だった。それだけならまだ何とか動揺はしなかったかもしれない。

こちらに向かってくる男は、魔法を使っている様子もないのに、煙りを巻き上げて馬以上の速度でこちらに迫ってきていた。出鱈目だ。あんな身体能力、人類であるはずがない。いや、それでも氷結の騎士と呼ばれているアイリスなら動揺しなかつただろう。だが視力がよく、戦闘経験も豊富なアイリスは、迫る男の顔をはつきりと捉えていた。

まるで獲物を狙う野獣のような獰猛な笑み、細く延ばされた眼は、背筋を凍らせるほどの威圧感を放っていた。怖い、怖すぎる。アイリスは混乱した。しかも見ただけであの魔獣如き男が、アイリス以上の戦闘能力を保有するのがわかってしまった。というか強化の魔法も使ったように見えないのにあの速度を出してる時点で、人間でないのは明らかだ。エルフでもドワーフでもないだろう。あれは鬼とかそういう類の化け物だ。

そう、氷結の騎士、アイリス・ミライスは、楽しそうな笑い声を上げる少女を肩車して物凄い速さで駆ける男、早森いなほの姿を見て、あまりに人間離れした姿に恐怖したのだ。

「な、なんだあれは!?!」

見たこともない物 サンダル を両手で振り回しながら笑う少女を肩車して、加速しながら向かってくる物凄く怖い笑みを浮かべた男。怖い。何が怖いってもうあれだ、怖いのだ。

「た、『戦いの力をこの身に』!」

慌てながらも身体能力を上げる魔法を瞬時に展開すると、青色仄かな光がアイリスの体を包んだ。そしてこっちに来る化け物に向けて剣を抜きはらう。逃げようにも速度からして追いつかれるのは明白だったので、最早迎え撃つしかないと思ったのだ。

「魔物はここに来ないんじゃないのか……!!」

悪態をつくアイリスは恐怖とない交ぜになった敵意を迫る魔獣に向けた。まさか依頼を達成して気が抜けていたこの瞬間に襲撃とは覚悟を決める。すぐにでも切りかかれるように剣を構えるアイリスに対し、魔獣扱いされているいなほはいえ、やはり獣染みた本

能で敵意を察知。アイリスの剣が届く範囲外で急停止した。

「何だデメエ」

未だエリスを肩車しながら威圧してくる姿はシユールだ。だがそんなシユールを感じる余裕のないアイリスは、魔力も伴わないただの眼力に冷や汗をかいた。間近で対峙してみても改めてわかる。醸し出される強者の威圧感。ランクにしたらD、いや、もしかしたらCランク相当だろうか。自分には勝てる要素がほとんどない。ならば狙いは少女を肩車している今だろう。僅かな隙を見つけ出し、一瞬に全力をかけて、一撃でケリをつけるしかない。

覚悟を決めたアイリスの構える姿に隙はない。面白そうな女だ、警戒心剥き出しのアイリスに、凶悪な笑みをいなほは向ける。

一触即発の空気、切っ掛けがあれば即座に戦いが始まる張りつめた空間。だがそんな空気を壊したのは、いなほの怖すぎる顔を見ていないエリスだった。

「こんにちは」

以前までなら、冒険者に簡単に声をかけるなどエリスにはできなかっただろう。だが虎の上にいるハムスターというだろうか、強者に守られ、そして体験したこともない楽しい経験に昂った心が、エリスに見知らぬ冒険者に自分から声をかけるといった行動に移させた。

呆気にとられたのはアイリスといなほだ。互いに臨戦に入ったからこそ、エリスの間の抜けた言葉は、鬪争の秀囲気を盛大にぶち壊しにしていた。

「……………ああ、こんにちは」

返事を返して、何やってんだと脳裏でぼやく。幸いだったのは、依頼後に気が抜けていて、なお且つ馬以上の速度で走る男と担がれて笑う少女というよくわからない光景に出くわしたために、彼女を持ってしても混乱していたことだろう。いなほはと言えばすっかりやる気を削がれて、つまらなそうに欠伸をしていた。

挨拶を返されたエリスは可憐に微笑む。

「今日はいい天気ですね」

「そうだな。まあ、冒険にはもってこいだろう」

「わあ、もしかして冒険者さんですか？」

「ああ、そうだが」

「凄い！ 私、冒険者さんとお話するの初めてです！」

「そ、そうか。いや、そんな尊敬の眼差しを受けるほど、私は大層な人間ではないのだが」

「そんなことないですよ！ 凜々しくてかっこいいです！」

「ハハツ、照れてしまっな」

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。私、エリスって言います。それで、この人は早森いなほさん」

ペチペチといなほの頭をサンダルで叩く。いなほの顔の血管が浮き出たのを見て、エリスは逆に血の気が引いた。止めて、お願いだから私のために彼を叩くのを止めて。

「……私は、アイリス・ミラアイスだ」

「よろしくお願いします！ ほら！ いなほさんも！」

「……おう」

何というか、毒気を抜かれた。ニコニコ笑うエリスをしり目に、アイリスといなほは互いに視線を合わせる。

そういうことだ。

そういうことか。

どっちがどっちというわけではないが、アイコンタクトは成立した。アイリスは魔法を解除し剣を鞘に収める。いなほも改めてアイリスのを見た。

エリスよりも明るい金色の髪は首元で短く揃えられていて、とても柔らかそうだ。目鼻はくつきりとしており、吊り気味の目は深い青色の瞳も相まって冷たい印象を覚える。身長はいなほの肩程度、膝まで覆うマントの下には、要所に鉄の鎧らしきものを付けており、腰にはよく使い込んだ剣が一つ。荷物は肩に担げる程度の荷袋だけか。

そんな美しい女性剣士に対し、喧嘩してえなというのがいなほの感想だ。彼にとつて容姿はさして重要ではないのだ。エリスなんかはカッコいいだの騎士様みたいだの騒いでいる。頭の上で五月蠅い。いなほの苛立ちがさらに膨れ上がった。

不穏な空気を察したアイリスが慌てていなほに声をかける。

「すまない。何せ馬よりも速く走る人間と、それに担がれ笑う女子など見て驚いてしまつてね」

「気いすんな。俺としてはそのまま喧嘩でもよかつたんだがな」

「ハ、ハ……君は怖いことを言うなあ」

アイリスは苦笑した。正直、冒険者としての勘がこの男と真つ向からの戦いをするなと訴えていたから、その冗談は洒落にもならない。

実は本当に喧嘩したかったと知ったら、アイリスは全力でこの場から逃げただろう。

「で、見たとこ君は不思議な格好をしているが、何処から来たんだい？」

「ああ、日本から来た」

「ニホン？ すまない。知らない土地だ」

「仕方ねえよ。ずっと遠くにあるしな」

男くさい笑みを浮かべたいなほは、「それより」と笑顔から一転威圧的な眼差しで肩車したエリスを両手で掴むと、自分の真正面に持ってきた。

よくわからないと言ったエリスの背中の部分の服を掴むと片手でそのまま持って、

「俺の頭を気易く叩くんじゃねえ」

出来るだけ手加減して、その額にデコピンをかました。

「ぎゃひゅー！」

少女にあるまじき悲鳴とともにエリスの顔が勢いよく後ろに仰け反った。手加減しようが筋肉ダルマのデコピン。ただの少女でしかないエリスには強烈すぎたのだろう。そのまま脳震盪を起こして気絶してしまった。

「……………彼女、大丈夫？」

「手加減したから問題ねえよ」

いや、手加減したとかそういうったレベルの問題じゃないだろう。と、喉元まで出てきたがアイリスはその言葉を飲み込んだ。

触らぬヤンキーに祟りなし。変な奴らに会ってしまったなあと、自身の境遇に嘆かずにはいられないアイリスであった。

第九話【ヤンキーの威を借る少女と女騎士】（後書き）

次回、街到着

## 第十話【ヤンキー街に着く】

エリスがデコピン脳震盪という、人間が初めて経験しただろう体験から覚醒すると、ちょうど森から抜けるところだった。

「うーん……」

「ああ、起きたようだねエリス」

「あれ……えと、アイリスさん？」

「そつだ。名前、覚えていてくれたのか」

優しく微笑むアイリスの横顔が近い。というか、これはもしかしなくても、アイリスにおんぶされているようだった。

「わわ！ すみません！」

慌てるエリスに「いいのいいの」と諭しながら、背中から降ろそうとしない。

「何せ彼が君を持つやり方は、まるで荷物か何かを扱つような感じだったからな。あれは 冒険者として見過ごせない」

冷たい視線をアイリスはいなほに向けるが、応じるいなほはどこ吹く風。というか人の荷物を振り回すのは止める。

「あー、さっさと着かないのか？」

「もうすぐ、ほら、森を抜けたらすぐだ」

斜光の射す癒しの森の林道の先、明るい光と草原が広がる道を見てアイリスは行った。

「お！ おいアイリス、エリスは返してもらおうぜ！」

言うが早くアイリスの荷物を手放し、エリスを引っぺがすと、あの化け物染みた速度で森の出口へと走り出した。

「ちよ！？ 乱暴すぎるぞいなほお！」

アイリスの怒声が遠くなる。まだ寝ぼけ眼のエリスはなされるがまま、いなほに担がれ森を抜けて、差し込む光に目を眩ませた。

「スツゲーじゃねえか！」

いなほが興奮したように叫ぶ。森を向けた先、およそ一キロ先に長大かつ巨大な城壁が見えた。石で組まれた壁は、横の長さはどの程度あるのかも検討がつかない。高さも充分にあり、道の先には巨大な門がある。数々の道が門のほうに集まっており、大勢の人が門目指して歩いていた。

「中立都市マルク。別名、冒険者の集う町。四力国同盟以後もこうして交流の場として栄えている。古くからの名所だ」

追いついてきたアイリスが、目を輝かせるいなほを横目にしながら説明をした。しかしこの男、まるで子どものようだとアイリスは内心で思う。凶暴な性格ながら、子どものように純真無垢。てかガ

キだ。こいつはただのガキだ。

「おいエリス！ やつと着いたぞ！」

「は、はい」

再び首の定位置にエリスを乗せる。アイリスの頭に、どうしてか子連れヤンキーなる訳分からん言葉が浮かんだ。駄目だ自分、超疲れてる。

「門では簡単な検問を受けるんだ。と言っても諸国の冒険者も集うからな、正確な身分ではなく、確認するのは犯罪者リストに載ってるか載ってないかの検査くらいだ」

「そうか。じゃあ行こうぜ」

絶対聞いてない。だがもういいかと半ば諦めて、アイリスは先行するいなほに着いていく。

門までたどり着くと、改めてその巨大さにいなほは驚いた。日本の雷門並みにでかい木製の門の前で、門番が手元の手帳と検問する相手を見比べて、何かの確認が終わったら通している。

「何してんだ？」

いなほがアイリスに尋ねる。

「あれが犯罪者リストさ。四力国で指名手配されてるあらゆる事件の犯人の名前、顔が登録されてる。相手を見るだけでリストが自動で検索をして合致するかどうかを見てくれるんだ。しかも幻覚魔法無効のおまけ効果もある魔法のアイテム。ちなみに凄く高いよ」

「うっし、俺らの番だな」

「やっぱ聞かない……」

どうにでもなれと、いつものクールな雰囲気を崩して泣きそうになるアイリスを無視して、いなほはエリスを肩車したまま門番の前に立った。

「へえ、珍しい服着てるな兄ちゃん……その嬢ちゃんは妹かい？」

「そんなとこだ。ここには初めて来るからよ。一つよろしく頼むぜ」

「ハハツ、よろしく頼むのは俺じゃなくてこの手帳のほうさ。あんたが悪さしてなきゃしつかりこいつが許してくれんぜ」

「ならそいつのご機嫌とらなきゃならねえな。キスでもすれば通してくれるかい？」

「そんなことしなくてもあんたがいい男だから通すつてよ。よし、嬢ちゃん共々確認完了。ようこそ色男。中立都市マルクへ」

「ありがとう」

ひらひら手を振ってマルクへと入っていくいなほとエリス。続いてアイリスが門番のほうに行くと、「おう」と門番は親しげにアイリスに声をかけた。

「ようアイリス久しぶりだな。依頼のほうは大丈夫だったよか？」

「この通りな、帰り際に面白い奴らに出会ったがね」

そう言っただけでアイリスはいなほ達を見る。アイリスの視線を追った門番は特に驚いた様子もなく頷いた。

「嬢ちゃんは別として、あの大男はなんだ？ 久しぶりにヤバい匂いがしたぜ」

「私もだ。遭遇したとき殺されなくて本当によかったよ」

「……あんたがその手の冗談を言わないのはわかってる。強いのか？」

「わからん。だが、真つ向からやるのは勘弁したいな」

そのアイリスの言葉に、険しい表情になる門番。「そろそろいいか？」そうアイリスが言うと、慌てて門番は頷いた。

「だがまあ悪い人間ではないらしい。悪いくらいに我がままだがな」

そんなことを去り際に言い残し、アイリスは何食わぬ顔で待っていたいなほ達と合流した。

「スツゲー」

いなほの隣に立ったアイリスは、立ち止まったままの彼が辺りを見ながら興奮しているのを、我がごとのように喜んだ。誰だっ自分分の故郷を喜んでもらえてうれしくならない人間はいない。

門を抜けた先はすぐに様々な露店が立ち並ぶ街道となっている。狭しと並ぶ色とりどりの店と、忙しく動く人々、活気に溢れると

という言葉がまさによく似合う光景だ。

「門の先は商店街となっていてな。この通り露店の他にも、ここの家屋のほとんどは商店か宿屋となっている。冒険者が装備を整えたり休息によく使うんだ」

「美味しい物とかあるのか？」

「そうだな。まあ出ている食べ物のほとんど外れはないだろう。それよりいなほ、君は、君達にはやることがあるんじゃないか？」

アイリスの嗜める言葉に、いなほも喜びを抑え込み、肩車したエリスを見上げた。

エリスの表情は険しい。僅かな希望として、エリスの村の人がいる可能性を信じてはいるが、もし誰もいなかったらと思えば

エリスが気絶している間に事の次第は聞いていたアイリスは、エリスに「大丈夫」と言って安心させるように笑いかけた。

「まずはギルド街に行こう。私のギルドのほうで本部に掛けあってみる」

「お願いします」

エリスが頭を深く下げる。いなほも頷いたので、三人は一路商店街を抜けて、ギルドの立ち並ぶギルド街に向かうのだった。

マルクの町は四つのエリアに分かれている。いなほ達のいる商店街。今から向かうギルド街。総学生三千人以上を誇る魔法学院。そして居住区。この四つからなっている。といってもただ四つに分かれているわけではなく、マルクの四力国のほうに開けられた四つの門があるので、城壁に沿い、円形に商店街が広がっている。言うな

れば商店街というよりは商店道か。そして中央のエリアを三分割してギルド街、魔法学院、居住区に分けられている。さらにその中心に、地下に広がる迷宮があると言った感じだ。

今から行くギルド街は、その名の通りギルドのためのエリアで、現在は三十以上のギルドがあり、それぞれ下は十人前後から、多いギルドでは数百人規模で成り立っている。熟練の冒険者もいるが、周囲の森やダンジョン、地下迷宮には、トロール等のランク持ちの魔獣はそこまで存在しないので、初心者の冒険者も多数存在している、そのために冒険者間では、冒険者の集う町と呼ばれているのだ。

(……しかし、トロールが群れて現れるなど本当にあるのか?)

だからこそ、アイリスはいなほから聞いたことに疑問を感じずにはいられなかった。一番下のHランクとはいえ、トロールは単体でランクを付けられるほどの凶悪な魔獣だ。それに、基本群れても二、三体程度で、ゴブリンやオークを配下に行っているのが普通である。

この豪快な男であるいなほと、純朴で優しい少女のアイリスが嘘をついてるとは思いたくないが、常識的にはあまり考えられない。

まずはギルドにそういつた依頼が来てないか確認すべきだろう。等と考えながら歩いていけば、三人は商店街を抜けてギルド街に来ていた。

商店街と違い、武装した人間ばかりがいる。大通りに並び立つ建物は、全てがギルドによって使われているものだ。周りを無数のダンジョンや魔獣の出る森に囲まれているため、多数の依頼が来るマルクでは、大小様々なギルドが並んでいる。大手のギルドは幾つもの建物を使用しているところもある。賑わいは商店街程ではないが盛況で活気がある。彼らは全員が冒険者なのだろう。中には結構強そうな奴もいて、いなほの嗅覚を刺激した。何処となくかつての不良の溜まり場に近い雰囲気を感じるが、あそこと違ってここは穏やかだ。きつと戦闘者の持つ気負いがいなほにかつての居場所を彷彿

とさせたのだろう。

まあエリスはといえば、普段は商店街までしか行かないので、初めて来たギルド街に興味津津といった様子である。もう慣れたのか、肩車されているという彼女を見てくる人の視線も気にしてはいない。

「ふわぁ……いなほさん、凄いですねえ」

「ああ、さっきのともよかったが、ここも中々気に入ったぜ」

「気に入ってくれたのなら幸いだ。さて、行くのは私の所属するギルドになるが、それは構わないかい？」

アイリスがそう尋ねると、いなほとエリスは同時に頷き了承した。「そうか」と言うと、アイリスが先頭に立ち歩きだす。そして少し大通りを歩くと、アイリスはギルド街に並ぶ木製の建物の一つの前で止まった。

「ここが私の所属ギルド。『火蜥蜴の爪先』だ」

建物の入り口の上部分には、サラマンダーと呼ばれる魔獣のイラストと、ギルド名が書かれた看板が立てかけられている。生憎と言葉はわかってても字が読めないいなほに名前の理解はできなかったが、センスのいい看板だなとは思った。

「では、入ろう。ようこそ御客人」

第十話【ヤンキー街に着く】（後書き）

次回、不器用ヤンキー

## 第十一話【ヤンキーやけ酒】

アイリスが気付った風に一礼すると、ゆっくりとドアを開いて入るように促した。

ギルド、火蜥蜴の爪先の建物の中は、ちょっとした酒場のような感じだった。全てが木製の壁やカウンターにテーブルと椅子、ここでは珍しくもないのだろうが、いなほとしては新鮮な感じだ。いなほ達が入ったことで入り口の鈴がなり、珍妙な客を見て飲食等をしていたギルド員達が興味深そうに彼らを見た。

慣れたとはいえ、狭い室内で幾人もの屈強な人に見られるのは恥ずかしいのか、アイリスは四方に目線を泳がせる。一方いなほはこういう雰囲気慣れてるのか、堂々とした態度で進むと、適当に空いているテーブルの椅子に腰かけた。

ついでに肩車したアイリスを下ろして隣の席に座らせる。アイリスはといえば、カウンターで老いを感じさせながらも屈強な老人と話していた。

「……」

「どうしたアイリス？」

待っている間手持無沙汰のいなほは、何処か緊張した様子のエリスに声をかけて、無理もないかと頭を振った。

「皆、来てるんですかね……」

エリスの不安にどう答えればいいかわからず、いなほは虚空を仰いだ。店内を照らすランプの火を目で追う。

大丈夫と楽観的に言うこともできた。だがいなほは下手な希望を与えるのは逆効果であるだろうと思ったため、エリスの望む言葉を言うことができなかった。

多分、全員死んだだろう。いなほは可能な限りトロールを殺したが、森のほうまで人を追ったトロールがまさか自分の所に全員集中したとは考えづらい。村人もばらばらに逃げただろうし、トロールもばらばらに追っただろう。そして襲撃があつたのはいなほがこの世界にくるより前の話で、村の惨状を見る限り襲撃から随分経過した後のはずだ。

あえてあの日、トロール殲滅後、周りを探索するという選択をいなほは取らなかつた。もし他の死体を見て、エリスにそれを隠し通せるとは思えなかつたからだ。

「待たせたな」

痛い沈黙の空気を裂くように、アイリスが席に座った。エリスがすぐるような眼差しでアイリスを見る。

アイリスは、ただ申し訳なさそうに目を伏せた。

「君の村からの依頼所への依頼はなかつた。事が事なら緊急を要する事態だ、ここまで逃げのびたなら、即座に報告していただろう。つまり、残念なことだが……」

「……そう、ですか」

エリスはどうか口を笑みの形にしつつ、顔を伏せ、肩を震わせる。

声を漏らさずエリスは泣いていた。唯一の希望は容易く奪われ、冷たい井戸の底に落とされたような絶望感が彼女を包む。

「……エリス、二階にプライベートルームがある。防音もしてあるから、そこに行こう」

アイリスは、静かに泣くエリスの肩を掴むとそつと立ち上がらせた。言われるがまま、促されるまま、エリスはアイリスに引かれて二階へと上っていく。いなほは追わなかった。いや、追えなかった。

「ケツ、ザマあねえ」

鼻を鳴らして自嘲する。自分は、全く持って無力だ。現実を叩きつけられていなほは無性に悲しくなり、酒が欲しくなった。

すぐにアイリスが二階から下りてくる。そしてカウンターの老人に一言話すと、黄金に透き通った色の飲み物の入ったグラスを二つ持っていないほの対面に腰かけた。

「エリスには暫く一人にしてくれということ、そのままにしておいた」

グラスの一つをいなほの手前に置く。グラスを手に持ち、仄かに香るアルコールの匂いを感じて、躊躇いなく一気に口に流し込んだ。強めのアルコールが喉を焼く。通った個所がわかるくらいに酒の通った場所が熱を帯びた。胃にまでたどり着いた酒がわかる。だが熱い体と裏腹に、心は未だ冷めきつたままだ。

「随分いける口じゃないか。というか、乾杯もなしなのはいただけないな」

「そういう気分でもないし、これはそういう酒じゃないだろ」

「そうだな。これはやけ酒だよ」

アイリスも一息でグラスの中を空にする。そして老人に「ボトル一つ。丸ごといただく」と言った。

無言で先程の黄金がなみなみと入ったままのボトルを老人がテーブルまで持つてくる。いなほはボトルを掴むと、アイリスのほうに注ぎ、続いて自分のに注いだ。

「エリスみたいな人は、こんな稼業だ、たまに出くわすよ。そんな無力に泣く彼らを見る度、知らない他人は救えなくても、せめて自分の周りでは、この町にいる者にはそんなことが起きないようにと、鍛錬に励んだ」

口を付けて、アイリスはグラスを弄んだ。ほのかに赤い頬とグラスを見ているようで、遠くを見ている眼差しは、どこか扇情的だ。

「だが、どうしてかな。ついさっきまで私の周りではなかったエリスの涙が、こんなにも苦しい。その他大勢を助けることが出来ないのはわかっていて、割り切ろうとしたのに……いいような無力感に自分が情けなく思えてしまうよ」

アイリスの無力感は、いなほとは少し違うかもしれない。だが、その気持ちだけは共感できた。いなほは再び酒を一気に飲み干す。冷たい心を少しでも熱くする熱が今は欲しかった。

「ところでいなほ。君は……何であの場所に居たんだ？」

互いにグラスを再び空けると、新たに杯を自分と相手の分を注ぎながら、アイリスがいなほに尋ねた。

質問の意図がわからないといなほは目を細くして、無言で続きを促す。先程とは違い、彼を警戒しているかのようにアイリスの声は

固い。

「トロールは本来、数十体の群れになることはほとんどありえない。何せ奴ら自身が群れの中心となる存在だからだ。多くて三体程度、配下はゴブリンやオークといったランク無しの魔獣なのがほとんどだ。さていなほ、ここで不思議なのは、君達の話が本当だとしたら、あり得ない程の群れで行動するトロール達が襲撃した村の傍に、『偶然』君がいたということだ」

「そりやつまり……」

「重なり合った偶然は必然とも言つ。さて、もう一度聞こうかいなほ。何である場所に君は居たんだ？」

氷のように冷たいアイリスの視線がいなほに突き刺さった。肌が沸きたつような感覚とは別に、否応なしに燃え上がる闘争心。

いなほは再び杯を一飲みした。吐きだす息はアルコールの匂いを放つ。あるいはそれは、内の熱気なのかもしれない。

「気付いたら村の近くの森に居た。陰気臭え野郎に飛ばされてあそこに来たんだ……止めようぜアイリス。俺はそういう面倒臭いのが大っ嫌いなんだ」

常人なら思わず目を逸らしてしまうようなアイリスのプレッシャーを真正面から受け止めていなほは答えた。

偽りを感じない強い眼。アイリスは観念したようにため息を吐きだした。

「……ハア。まあ君が裏で何か企んでるような人ではないのはわかってるからな。すまない、試すような真似をしたね」

「氣いすんな。そういうのは嫌いじゃねえよ」

体を弛緩させ、苦笑する。試されるような立ち位置にいるということぐらいいなほだってわかってはいる。

アイリスもいなほの理解を得られて安堵していた。正直必要な行動だったが、一瞬漏れた殺気は、間違いなく自分を狙っていた。冷たくなったのは自分のほうだ。アイリスは冷えた肝を温め直すために酒を飲んだ。

「とりあえず村のことについては、私が個人的に調べに行こう。正直、トロールの大量発生で村が滅んだなどという話を信じてくれる者などいないだろうからな」

「テメエは信じたじゃねえか」

「私はどうにも人を信じやすいタチでね」

「さつきは俺を疑ったろ？」

「君はまず、信用されたいなら見た目をどうにかしたほうがいい」

「俺の顔は悪党以外に見えはしねえからな」

いなほの自虐がツボにハマったのか、二人は同時に笑った。

「自覚があるとは思わなかったよ」

「これでも根っからヤンキーだからな」

「ヤンキー？」

「喧嘩しか能のねえ糞ったれのことさ」

「でも、君は彼女を助けた」

「あんなのはただの気まぐれにすぎねえ」

「それで、気まぐれが終わった今、君はこれからどうするんだい？」

会話が途絶えた。エリスを安全圏に届けたことで、もうこれ以上いなほが関わる必要はない。トロールの件もアイリスがどうにかするだろう。

ならばいなほがこれ以上エリスに関わる必要はない。冷たい話かもしれないが、エリスは所詮、どこにでもいる村娘なのだ。エリスとこれからも一緒に居ても、メリットはない。

「エリスはいい女だ」

いなほはアイリスの質問に答えずに、そんなことを口走った。

「あんな小さいなりの癖に、親やダチがいねえのによく踏ん張ったよ。だから俺は……」

一度言葉を止めてグラスの底を覗く。黄金の液体の表層は光を反射し、僅かに揺れた。いなほの心もまた、あの少女が見せてくれた強さに揺れ、何もしてやれない無力を恥じた。

「目的がねえんだ。だったら折角知り合えた奴とわざわざ別れる必要もないだろ？ それに、知り合いは大切にするほうでな」

俺は、の後に続く言葉は呑み込み、腹の底に沈める。いなほはわざと明るい素振りで言った。

「だったら、さっさと行ってやれ」

アイリスがエリスのいる二階のほうを見る。

「大切にするんだろ？ だったら早く泣きやませるんだな。私は吐いた言葉を撤回するような奴は嫌いだね」

「言ってるアホが」

いなほは席を立つと、その足で二階へと向かう。

「全く、普通は泣いた時点で慰めるのが男の甲斐性だろうに」

グラスを傾けるアイリスは、まるで女心をわかっているいなほを思っ、なんととも言えないため息を漏らすのだった。

**第十一話【ヤンキーやけ酒】（後書き）**

次回、ヤンキーと約束

## 第十二話【ヤンキーの約束】

わかってはいた。自分が生き残ったのはただの奇跡でしかなく、トロールの群れという絶望的な状況で生き残れる人などいないのだと。もしかしたらいなほが早すぎて先に着いてしまっただけかもしれない。と思えるほどエリスは楽観を貫ける心境ではなかった。

僅かな希望を砕かれ、エリスは一人案内された部屋の隅っこに蹲り涙する。ずっと一緒にいた皆がいない。悲しくて辛くて、全部がもうどうでもよくなった。

「……何、で、私だけ、生き残ったの、かな」

痙攣する喉で絞り出した声は、自分だけ残ったことに対する怨嗟だ。こんなに辛くて苦しいなら、自分はその時助からなければよかった。

「どうして、私だけ……！」

膝に顔を埋めて涙で服を濡らす。このまま何もかも投げ出して、絶望に身を任せたかった。

全部嫌だ。全てが嫌だ。自由落下に似た浮遊感を味わいながら、膝に埋まる瞳は次第に感情の火を失っていき、最早何も映さなくなるうとして、

でも、私はそれでも生かされた。

「……」

その最後の最後で、エリスの瞳は生気を手放さなかった。

わかっている。わかっている。自分が生きたのが奇跡なら、自分がこのまま絶望に沈むのは、親や友人を含めた人々の中から奇跡の対象に選ばれたことを冒瀆する行為だ。あの状況で、母親が逃がしてくれた。父親が生かしてくれた。友人たちが代わりに生贄となった。

犠牲の上に立つ命。ならばエリスは、生き残った事実を受け入れなければならぬ。

普通なら誰でも、絶望に沈むのは無理もないというだろう。普通なら誰でも絶望に染まるだろう。でもエリスは、いなほが思った通り強い心を持っていた。希望を砕かれても踏みとどまる強さを『持つてしまった』。

弱い少女の体にはあまりにもこの奇跡は重い。今はぎりぎりですどまることしかできなくて、ふとした拍子に忽ち崩れてしまうだろう。そしてこのまま一人で生きていくなら、明日にでもエリスは現実に潰されてしまうのは見て取れた。

そう、少女一人なら無理だろう。だが少女には、支えてくれる屈強が傍にいる。

「邪魔するぜ」

ノックもせずに入りこむのは、無礼を無礼とも思わぬ男、早森いなほだ。いなほは、隅っこからこちらを見上げる涙を流すエリスを見つけ、困ったように頭を掻いた。

「……こういう時、俺はなんて言ったらいいのかわからねえ」

一言一言、言葉を選びながらいなほは語る。何も考えずにここまで来たために、エリスに会って何を話そうかなどまるで考えていなかったのだ。目線を辺りにさ迷わせ、それでもそんなのは男らしく

ないとエリスに目線を戻し、やはり何を言うべきか分からなくなつて目線をずらす。

己が無敵だと豪語しかねない男も、過酷な状況に叩きこまれた少女を励ますのは難しい。これまで行ってきたどんな喧嘩よりも苦しげに唸り、悩み、窮地に立たされている姿は、いなほという男を知る者がここにいたら驚きを隠せないだろう。

現にエリスだっていなほの慌てている姿を見て、涙を流すことすら忘れてその姿を見上げていた。

「だからよ。その、あれだ。ケツは持つてやる……っての？ あー、つまりだな」

不器用ながらも、いなほが自分を励まそうとしているのがわかつて、エリスは目をまん丸に見開き、しどろもどろとあーでもないこーでもないといういなほが次第に可笑しく感じて、小さく笑い声を漏らした。

だが焦るいなほはそんなエリスの様子にも気付かず、励ましにもならない意味不明な単語を言い続ける。それが可笑しくて可笑しくて、エリスはとうとう我慢できずに声を張り上げ笑い出した。

「も、もう！ いなほさんは！ いなほさんってば！」

「お？ おお？ 何だ、楽しいのか？」

笑い声が止まらない。同時に涙がさつきよりもっと流れた。

泣き笑いするエリスに、やっぱりしいなほはどうしてかいいかわからず右往左往する。トロールを容易く葬る鋼の男が、今は少女一人に振り回されてこの様だ。

「ね、ねえ、いなほさん」

「おう。何だ？」

「どうして、私を助けてくれたんですか？」

唐突に、エリスはそんなことをいなほに聞いた。何故自分なのか、そんなこと、ただの偶然以外あり得ないのに、でもエリスは聞かすにはいられなかった。

いなほは笑うのを止め、今にも何処かに飛んで行ってしまいそうなほど儂げな表情のエリスに何かを感じたのか。手拍子に応えず、一呼吸置くと言った。

「助けてえから助けた。だからなエリス」

隅に座ったままのエリスの前まで行き、いなほはしゃがむと、恐る恐るその手をエリスの頭の上に乗せた。

「心に刻んだこいつを、俺は必ず押し通す。エリス、テメエを助ける。改めて俺のここに刻むぜ」

トントンといなほは自身の胸を叩いた。心に刻む、エリスを助けるという誓い。

理由は充分だ。エリスは頭を撫でる無骨な掌の感触に身を委ね、気持ち良さそうに目を閉じる。

「いなほさん」

「あつ？」

「助けて』くれていて』ありがとうございます」

今も自分を助けていることに感謝する。眼を閉じているためエリ  
スは感謝を告げられたいなほの表情を確認することはできないが、

「……言つたる。痒いんだよ、そついうの」

きつと優しく微笑んでいるに違いない。

第十二話【ヤンキーの約束】（後書き）

次回、ヤンキー、危険生物認定を受ける

**第十三話【ヤンキーとギルドと水晶玉】（前書き）**

感想など、応援していただきありがとうございます。

### 第十三話【ヤンキーとギルドと水晶玉】

翌日、とりあえずはそのまま部屋を借りて夜を過ごしたいなほどエリスの元をアイリスが訪ねてきた。

「失礼するよ」

ノックをして、エリスの声を聞いてから入室してきたアイリスは、先日の鎧をまもつてはおらず、シャツとズボンのみのラフな格好だ。そのため、白磁のような綺麗な色をした細い手足。服を持ち上げる豊かで動けば弾む大きな胸。その胸をひと際強調する高価な調度品の描くラインのごとくくびれた腰。そしてキュツと引きしまったお尻など、男性の欲情を促すような刺激的な肢体がはっきりと見て取れた。

現に彼女がここに来る道中の最中にも、何人者男がその姿に振り向いたりしたほどだ。だがいなほはそんな彼女の扇情的、ぶっちゃけエロい体をじろじろ見るようなことはせず、本当に気にした素振りもなく手を上げて挨拶した。

「よう。何だ、今日は鎧とか剣は付けてねえのかよ」

「町中でも付けてたら体が固まってしまふよ。ただでさえ最近はお胸が重くて肩が凝って困っているしな」

「んなのぶらさげてるなんざ女は大変だねえ」

「ホント面倒だよ。周りからはいやらしい目で見られるしね」

困った困ったため息。いなほは「ふーん」と本当にどうでもよさそうに空返事するが、アイリスに比べ女性的な魅力にやや劣らざるを得ないアイリスとしては、アイリスのその発言が許せないのか不満げに口を尖らせている。

「で？ テメエの乳の話をしに来たわけじゃねえんだろ？」

「私にも少モガツ……！」

何か叫ぼうとするアイリスの口をいなほは押さえつつ言う。

「そうだ。とりあえず君達の今後の身の振り方について相談しようと思っただね。いなほ、アイリス、私達のギルドに入る気はないか？」

「ギルドってえと……何だ？」

知らないと言を傾げるいなほ。アイリスは説明をしようと口を開いてから、釘をさすようにいなほを睨んだ。

「話は、ちゃんと、聞くんだぞ？」

「大丈夫だつての」

「それが信用ならないのだが……要するに様々な人からくる依頼を受け持ち、解決していくところだ」

「つまり何でも屋ってことか？」

「認識としては正しい。主にちよつとした雑用から、護衛、探索、そして討伐。多種多様な問題を解決して見合つた報酬を貰う。いなほ、あの森で見せた君の身体能力なら、こちら一帯の討伐や護衛依頼は簡単にこなせるはずだ。ここに来て日が浅いならなおのこと、色んなことを知ることができる」

「そうか。じゃあギルドに入るわ」

いなほは一瞬も考えずに即答した。さらに口を押さえたままのエリスも指差し、「勿論こいつもオツケーだからな」と返事もしていないのに無理矢理決めつける。「むー！」と何かを訴えるエリスだがいなほはシカトした。

あまりにも呆気なくギルド入りを認めたいなほに対してアイリスは驚きを隠せない。

「君のことだから、てつきり組織なんざに入る気はねえとか言うかと思つたが」

「そこまでツつぱつちゃいねえよ。俺は冷静さを一番の武器にしてるんだ。で？俺は何からしたらいい？」

エリスの口から手を放し立ち上がる。「勝手に決めないで下さいよ！」エリスが小さな体を目一杯広げて怒りを露わにする。

「あ？入りたくなかつたのかよエリス」

「いや、私はその、危ないことをしないんだつたら……」

「おいアイリス。エリスは大丈夫だよな？」

「勿論。彼女には主にここの受付をしてもらう予定だったが」

「なら決定だ。文句ねえなエリス」

納得はいかないが、実際問題ないなら仕方ない。エリスは渋々了承の意を伝えた。

「うし、アイリス、どうするんだ？」

改めていなほが尋ねてきた。

「そうだな。まずはギルドに登録手続きを行ってから、ついでにランク認定もしておこう」

「ランク認定？」

また知らない単語だ。アイリスはそんなことも知らないのかと笑ってから再び説明を始めた。

「ランクとは、極端な話、その生物の危険度を表している。A+からH-までのランクがあるが、一番低いHランクでも、一般人にとってはかなりの危険度だ」

ランクは魔獣も含めた全ての種族に適応されている。魔獣ならば単純な危険度を示し、知恵のある人やその他の種族においては、生物としての危険度のほかに、その者がどの程度優秀なのかという意味合いも含まれている。幾人もの武装したランク無しの兵士を容易く殺すトロールでようやくHランクであることから、ランク持ちはそれだけで畏怖と尊敬の対象となるのだ。

ちなみに最上位のAランクは、伝説上の魔神や魔王、世界を救っ

た勇者や破壊の限りを尽くした最強のドラゴンとかの、神話級の実力がなければ至ることができない。精々、才能に満ち溢れた者が死ぬ気で努力してようやくDランクになるかどうかと言ったほどだ。

「だから我々冒険者は、ランク認定を受けるほどの実力を得られるように、日夜鍛錬に励んでいるのだ」

「なるほど。通りで強そうな感じがしたわけだぜテメエは」

闘志を湧き立たせるいなほにアイリスの本能が危険を訴える。Fランクになって、周りから畏敬の念を送られるようになったアイリスを持ってして、敗北を予感せざるをえない威圧感。

「ギルドに登録すれば私なんかより楽しい敵と戦えるさ」

果たしてこの男のランクは一体どれほどのものなのか。恐れが積もる一方、興味が尽きないアイリスは、二人を先導して一階に降りるのだった。

朝方だというのに、一階の酒場件依頼の受付を兼ねた集会所には、ちらほらと火蜥蜴の爪先のメンバーがそれぞれ慣れ親しんだメンバーごとに集まって、テーブルの席に腰かけていた。

そしてカウンターでは、グラスを磨く昨日と同じ老人が立っていた。アイリスはカウンターに近づくと老人に声を掛けた。

「ゴドー爺。先日話した者達だ」

「む……あんたらがアイリスの連れてきた奴か」

老人とはいえ、服の下の逞しい腕や、未だ衰えを見せない鋭い眼光は熟練の強さを発していた。二人を見るその眼差しに、エリスが

怖がっているなほの背中に隠れた。

「爺。そんな態度だから雇う受付嬢がどんどん辞めてくのぞ」

「むう……」

ゴドーはアイリスの言葉に心なしか落ち込んだように肩を落とした。彼自身には別段誰か怖がらせるつもりはないのだが、持って生まれた顔ばかりはどうしようもない。

何となく怖い顔同士シンパシーを感じたのか、いなほはカウンタ―越しにゴドーの肩を叩いた。わかるぜその気持ち。怖面同盟ここに結成。という程ではないが、二人に不思議な絆が生まれた。

「それより、早速いなほにはギルド登録を済ませてもらう」

「どうすんだ？」

いなほの質問に答えず、アイリスはゴドーに目配せした。わかつたとばかりに頷いたゴドーがカウンターの下に潜ると、黒い箱を持つて立ちあがった。

ゴドーが黒い箱を開けた。中に入っていた炎をそのまま詰め込んだかのように赤い揺らめきを内包した、親指大のクリスタルが付いたペンダントと、墨汁に漬けたかのように真黒な小さい水晶玉をアイリスはゴドーから受け取る。

「これが私達のギルドの証だ。ランクギルドの証明である赤色、これを見せれば大抵の場所や国家間移動もできる。要は通行証だな」

そう言ってアイリスは、首に掛けていた同じ形のペンダントを取り出すと、クリスタル同士を合わせた。

「いなほ、クリスタルに触れてくれないか？」

「おう」

いなほが合わせたクリスタルに指を添えると、アイリスは目を閉じてその魔力を介抱した。

「『契りの証よ。この者を新たなる同胞に迎え入れる』」

アイリスから溢れた青色の魔力がクリスタルに吸い込まれる。内包した炎は輝きをさらに増した。業火に震えるペンダント。だが揺らめきはすぐに収まった。見た目は何の変化もないペンダントをアイリスはいなほに渡す。

いなほは受け取るとともにすぐに首にペンダントをぶら下げた。

「火蜥蜴の証よ」

アイリスが言う。同時、彼女のペンダントが輝き、何もない虚空に赤い文字を浮かび上がらせた。

「覚えておいてくれよ？ 同じキーワードを言うことで、魔力を伴わずペンダントの前にギルドの名前が浮かび上がる。勿論さっきの契約をしたものがキーワードを言わない限り、ペンダントは起動しないので、なくしても悪用はされない。ただなくしたら銀貨一枚受け取るからな」

どうやら永続的に文字が浮かぶわけではなく、虚空の文字は十秒ほどで蜃気楼のようにあっという間に消えてしまった。

試してみると促すアイリス。いなほは柄にもなく緊張してるのか、

小さく呼吸を一つしてから、アイリスを見た。

「で、なんて言うんだ？」

「火蜥蜴の証よ、だ！」

「サンキュ……火蜥蜴の証よ！」

アイリスといなほ、二人のペンダントが光文字が浮かび出る。お  
お、といなほは感嘆の声を漏らした。

「これでギルド登録するのは終わりか？」

買ったばかりの玩具で遊ぶ子どものようにペンダントを弄りなが  
らいなほは言う。その隣でエリスが「ペンダントのお金……」と、  
先程の銀貨一枚を聞いたためにか、不安げな表情をしているが、い  
なほはそのことには全く気付いている様子はない。

勿論アイリスもただでペンダントを上げたわけではない。普通な  
らペンダントに銀貨一枚、それ以外の諸々の手続きでさらにもう一  
枚銀貨を貰うのだが、例外はどこにでもある。

「後一つある。これが終われば君も晴れて私達の仲間さ」

そう言ってアイリスは、箱に入っていた黒い水晶玉を取り出した。

「これに触れると、触れた対象のランクがどの程度なのかを確認す  
ることができるんだ」

掲げた水晶玉は、みるみる内に色を失っていき、数秒すると青色  
に変色を果たした。

「青色はFランク。私のは色も薄くも濃くもないのでただのFだ。Aなら黄金。Bなら銀。Cなら赤。Dなら橙色。Eなら緑色。Fなら青色。Gなら水色。Hなら茶色といった感じで、ランク外は黒から変色しないようになっていて。ここに+や-がつくのだが、これは色が濃ければ+、薄ければ-、どっちともつかないなら+-はつかないといった風だな」

「綺麗な色してんな」

「無視か。そうか」

説明など聞かず、青く光る水晶の美しさにいなほは目を奪われていた。怒る気にもなれず、アイリスは頭を振ると、箱に水晶を収めた。

再び闇のような黒に戻る水晶。

「さあ。持つんだ」

アイリスが箱をいなほに差し出すと、いなほは興味津津といった感じで水晶を手にとった。

アイリス、エリス、ゴドー、そしていなほが、彼の手に収まった水晶を見つめる。はたして水晶は、白くなったと思っただら、その中心が太陽のように眩いオレンジ色の光を放ち始めた。

「まさか、D+……!？」

「こいつはスゲェ……」

「凄い……いなほさん」

いなほを除いた三人が驚嘆に声を失う。いや、ギルド内に居た者が全員、その眩いオレンジの光を目にして言葉を失っていた。

Dランク、上から数えて三つ。いなほは納得いかねえと眉を顰めた。話を聞いていないようでちゃっかり聞いていたこの男は、自分なら金色になるだろうという根拠のない確信を持っていた。なので期待外れのオレンジの輝きには不満だ。

同時に歓喜する。極限まで鍛えた。周りには敵などいないと思っただ。だがもしこの光とランクが正しいのなら、いなほ以上の実力を持つ者がこの世界にはごろごろ存在するということになる。未だ出会ってはいない敵を思い描き、体を震わした。

「私も驚きだ。よもや君がここまでの逸材だったとは……」

いなほの震えを高いランクに驚いたことへの震えと勘違いしたアイリスがそんなことを言った。

いなほは答えずに、水晶を箱に戻した。たちまち輝きは黒い闇に飲み込まれ消失する。

「これで満足か？」

「おう。ギルドマスターには俺から伝えておく」

答えたのはアイリスではなくゴドーだった。その目には信じられない物を見たといった感情がありありと浮かんではいるが、そこはプロ、いなほのことを問いただしはせず、店の奥に引っ込んでいった。

「……ともあれよかったよ。大丈夫だとは思ったが、これで各種登録料は免除になる。Gランク以上はどのギルドでも重宝されるから

ね。一人で大抵の依頼を問題なくこなせるG - 以上の人材からはお金を取らないのがギルドのルールなんだ」

まだ興奮冷めやらないのか、目を輝かせるアイリスと、いなほの背中に隠れたままのエリス。いなほは何ともなしに尊敬の眼差しで自分を見上げるエリスの頭を撫でながら、アイリスの話聞いた。

思いのほかスムーズにいなほのギルドへの入会は成立した。エリスについては、今のところランク持ちではないのでペンダントを上げることはできないが、ゴドーのいかつい顔によって辞める者が続出した受付嬢の位置に落ち着くことになった。

そして、それから暫くして、いなほのギルド初仕事が行われることになる。

### 第十三話【ヤンキーとギルドと水晶玉】（後書き）

次回、ヤンキーの初仕事

ランクについては今後もっとわかりやすい形に修正しようと思います。

## 第十四話【ヤンキーのお仕事】

ランク持ちが強いとは言え、それだけが全てではない。黒水晶で確認できるランクは、あくまで表面的なもの、身体能力と魔力の合計値で算出されるため、そこには個人が積み上げてきた技術や経験や知識は反映されない。事実、ランク無しの人間がトロールを一对一で倒したという話もある。それに基本数年ギルドに入り様々な魔獣と戦ってきた冒険者や、鍛錬と国直々の魔獣討伐をこなした兵士等はHランク程度にまでは到達することができる。

だがそこまではあくまで常人の至れる平均的な到達点だ。Gランク以上の者は常人の域を超えた者、これらは総じて畏怖と畏敬の対象だ。

とはいえここら辺の線引きは種族間で大きく異なる。基本数は多いがそもそもがその好戦的気質以外、戦いには向かない人間は大体ランクを持たないのでランク持ちを恐怖する。

他にも武器等の何かを鍛えるのに特化したドワーフや、身体能力の代わりに魔力を失った獣人も大体人間と同じ考えだ。

一方で、エルフや竜人や鬼人、そして人間でも一部の貴族階級等はランク持ちが当たり前なので、この括りには当てはまらない。最も後者の彼らは個体数が圧倒的に少ないので、相対的に人間達等とランク持ちの数はそこまで変わらないのだが。

「つまり話をまとめると、人間で、しかも初めてランク認定を受けた者がD+ランクというのは、エルフ、竜人、鬼人、貴族階級の中でも珍しい話だということだ。聞けえ！」

アイリスの拳が欠伸するいなほ目がけて飛んだ。だが拳は軽く見

切られ空を切る。ちなみにエリスはギルドでせつせと仕事を頑張っている。

現在二人がいるのは、ギルド街の中心にある依頼幹旋所だ。近隣に無数のダンジョンと森があるここでは、採取、護衛、討伐、探索といったあらゆる依頼が毎日殺到している。それを一か所にまとめて、ギルドが個々で受注するという形で依頼はなっている。

とりあえず、あの登録の日から二日が経過した。この二日、エリスはゴドーから受付の仕事について学び、アイリスはそんなエリスの様子を逐一見に来るついでに、ギルドにトロールの群れについての調査を打診しながら、いなほに依頼を受けさせようとしていた。

だが肝心のいなほはと言えば、アイリスが探すにも関わらず、町のどっかにフラッと出掛けては、夕方近くに帰ってくるを繰り返していた。

そして今日、朝一で来たアイリスにととうと捕まっていたいなほは、依頼幹旋所に来て依頼を見ることになった。

だがまるでやる気のないいなほに代わり、アイリスが依頼の難易度を言いながらどれが良いか聞いてきたものの、いなほはあまりにも低い難易度の依頼に難癖をつけ、アイリスがいなほに君がどれだけ異常でこの依頼が普通であることを説明するうんぬんで今に至る。

「しかし湿気た依頼ばっかだぜ。糞の足しにもなりやしねえんじやねえか？」

巨大な掲示板に狭しと張られた依頼は、ほとんどがHランク程度の依頼の上、あっても最大がH+程度だ。ともすればいなほのテンションは下がる一方である。ちなみにいなほが戦ったトロールの群れの討伐は、ランクに換算してF相当の討伐隊が組まれる程の危険な依頼だ。

「とは言ってもだな。少し前は魔獣の活発な時期でもっと難しい依

頼はあったが、現在はダンジョンや森からあぶれる魔獣などそうそう現れるわけでもない。いても村に駐在する兵士で事足りるだろう」

アイリスが最近受けた依頼はGクラスで、ここら辺ではかなり難しい依頼である。

だがそうはいはいGランククラスの依頼があるわけでもない。いなほはめんどくさそうに上の方に張り付けられていた紙をむしり取るとアイリスに手渡した。

「ほら」

「むっ、これは……ムガラツパ村までの護送依頼と、村の周りにいる魔獣の間引きか。Hランクだがいいのか？ しかも拘束期間は最長で一週間だぞ？」

「おう。結局金が必要なのは事実だしよ。いい加減テメエに奢ってもらうのも癪だしな」

「私としては貸しのつもりだったんだけどね」

「細かいとこ気いすんと禿げるぜ？」

「禿げないよ！」

いなほに向かって怒鳴り、頬を膨らませたまま受付の目の前に紙を叩きつける。テーブルを凹ませる勢いで置かれたときに響いた音に受付が「ひい」と情けない声を上げたが無視。

「え、と……この依頼は、お二方で？」

「ああ。火蜥蜴の証よ」

アイリスのペンダントが文字を放つ。いなほもアイリスに目線で促されペンダントの起動キーを口にした。

「火蜥蜴の爪先、二名様ですね。しかしミラアイス様がパーティーとは珍しい。そちらは、新人のかたですか？」

書類に何かを書きながら受付が物珍しげにいなほを見た。

「ん。まあね」

何処か居づらそうに頷くアイリス。同時に、受付が書類を書き終わり、それをアイリスに渡した。

「いずれにせよよかったです。規定人数は集まっていたのですが、H相当の依頼なので万全のために、ちょうどもう数人は欲しかったところだったんですよ。依頼主にはこちらから増員の方を伝えます。早速今日の正午に商店街の北東地区にある穴掘り亭で集合らしいので、この書類を持って行ってください」

「わかった。依頼完了はいつもの通りギルド経由で伝える」

「かしこまりました。お気をつけてくださいね」

受付が深々と頭を下げるのに見送られ、いなほとアイリスは幹旋所を出ていった。

と、朝の活動する時間帯、人ごみで騒がしい中を何かを探すように辺りを見渡すエリスがいた。

「あつ！」

その視線がいなほ達を見つけると、目を光らせて近寄ってくる。

「いなほさーん！」

エリスはいなほの名前を呼びながらその腕に抱きついた。手なれた様でいなほは勢いのままエリスを肩車する。まるで猫か何かだ。一連の動きを見ながらアイリスは思った。

「エリス。君、仕事はどうしたんだい？」

「休憩をいただきました。ここ数日は朝に人が沢山集まることはないので、町を見てきなさいってゴドーさんが」

「それで私達を探していたと」

「はい。ところで二人は何してたんですか？」

上から覗き込むエリスに、アイリスは手に持った書類を見せた。

「依頼だよ。君が乗っかってる奴がようやく働く気になったらしくてね」

「ありがたく思えよアイリス。まっ、足引っ張るんじゃねえぞ」

「君って奴は……！」

ピクピクと眉を揺らすアイリス。いなほはその様が可笑しかったのかゲラゲラと笑いだした。

「まあそりゃ冗談としてもよ。エリス、俺ら一週間位ここ空けることになった」

「え？ そんなに長い間いないんですか？」

途端、不安げに表情を曇らせるエリス。今、最も信頼を置けるいなほがいなくなるのは精神的にも辛いのだろう。先程、いなほ達を探していた姿からもそれは明白だ。

だがアイリスはエリスが一人で何かを考えるいい機会だと考えた。

「大丈夫。幸い、他にもメンバーは居る。そもそも私が付いて行くんだ、余程のことがないかぎり大丈夫だよ」

「デメエ。それじゃまるで俺がおんぶに抱っこじゃねえか」

「何を今更、この数日の宿と飯代、出したのは誰だい？」

「ケツ、胸はデケエ癖に器は小さい女だぜ」

「胸は余計だる胸は！」

歩きながら二人は口論を続ける。その頭上でエリスはいなほの痛んだ髪を心なし強く握って顔を伏せた。

あの悲劇からまだ一週間も経過していない。夜な夜な見る悪夢はエリスを苛むし、その度いなほを起こしては頭を撫でられて寝付く日々。もしいなほがいなかったら気が狂っていたかもしれない。そのせいか、今はいなほが隣で寝ていてくれないと不安で寝れなくなってしまった。

これではいけないとわかっているても恐怖は離れない。それに何よ

り、いなほまでもが自分の元からいなくなってしまうのではないか  
と思ってしまうのだ。

そんな彼女の不安を察してか、いなほはエリスの両足を軽く小突  
いた。

ハツと起き上がる顔の下、不敵に笑うは無敵のヤンキー。

「任せろよエリス。何、帰ってきて金貰ったら俺の奢りで飯食わせ  
てやんよ」

「当然私も奢ってもらえるのだろうな？」

「知るかボケ。テメエは勝手に隅っこいって飯でも食ってる」

「うん。私はそろそろ君を殺してもいいような気がする」

「おうおう。これだから女はウゼえのなんの。エリス、テメエはこ  
んなデカ乳になるんじゃないやねえぞ」

「ハハハ、エリス。申し訳ないが彼の無事は諦めてくれ」

爽やかに笑いながら殺意を漲らせるアイリスと、そんなアイリス  
を見て爆笑するいなほ。

「……でも、出来たら助けてあげてくださいね」

大丈夫だと、根拠がなくても信じられる。不安は残るが、それで  
もエリスは出来る限りの笑顔を浮かべて見せたのだった。



**第十四話【ヤンキーのお仕事】（後書き）**

次回、新キャラ続々

## 第十五話【ヤンキーと不揃いな仲間達】

エリスの見送りを背中に、いなほとアイリスの二人は集合場所へと向かっていた。

アイリスの服装は、いつものラフな物ではなく、要所をカバーした軽装備の鎧と水色鮮やかにたなびくマント、腰には愛用している片手剣を携えて、如何にも騎士といった出で立ちである。

だが今回の依頼は、食料もあちら持ちなので余分な荷物は他にはない。護送する街道は、最近、季節外れの魔獣の氾濫があったものの、ランク持ちの魔獣は出ないミヒル街道だ。

途中鬱蒼とした林を向けるが、そこでも強くてトロールクラスの敵が一体でるかでないか。本来アイリスの実力なら、完全装備せずに護送できる程度である。勿論、村周りの魔獣の間引きもあるが、これについても問題はあまい。

「初依頼とはいえD+ランクの君なら何も持っていなくても大丈夫ではあるが、本当にその服装でいいのか？」

アイリスの隣を歩きなほは、いつものタンクトップに短パン、そしてここに来てアイリスに譲ってもらった皮の靴という、防御能力皆無の服装だ。

幾らランクが高く、あの森で規格外の身体能力を見せつけられたとはいえ、物事には万全を期して当たるのがモットーのアイリス的  
に言えば不安を感じずにはられない。

だがいなほは問題ないとばかりに頷くだけだ。アイリスはいつそ

君の態度次第ではギルドの信頼も落ちるかもしれないんだぞとも言  
ってやりたかったが、この男に限ってギルドのことなど気にもしな  
いだろうと諦めていた。

「……まあ君がそれで依頼をこなせるといふならいいが。くれぐれ  
も足を引つ張つてくれるなよ？」

挑発的な一言をいなほは鼻で笑つて見せる。

「笑えるぜアイリス。とどのつまりは近づいてきた雑魚を蹴散らす  
だけの仕事だろ？ そんなんで俺がしくじるはずねえ」

「君のその確固たる自信が何処から来るか知りたいものだよ」

「腹の底からだよ」

「私のお腹は今にも痛みだしそうだがね」

不安げにぼやくアイリス。だがこの数日間、このゆるぎない己  
自身への信頼こそが、いなほの強さの源なのだろうとも彼女は思っ  
ていた。

傍から見れば自信過剰の命知らず。だが実際は本当にその自信に  
見合つた能力があるのだから達が悪い。

「と、ここだな」

アイリスが立ち止まって見上げた建物の看板には、穴掘り亭の名  
前が大きく刻まれていた。

アイリスが先に入り、いなほが続いて店のドアを潜る。鈴の音が  
響き渡る店内。ドアが閉まると、外の喧騒が遠く、静かな雰囲気

流れていた。依頼書を片手に辺りを見渡す。のんびりと飲食を楽しむ人々の中、目的の集団を見つけた。

「君達が今回の依頼のメンバーでいいのかい？」

その声をかけた相手は、アイリスの持つ依頼書と同じものを持つ三人の男女だ。

一人はいなほと同じくらいの巨体と、暑苦しいまでに盛り上がった筋肉を鉄製の鎧で包んだ威つい顔の男。テーブルには分厚く長い刀身の両手剣が立てかけてある。見た通りのパワータイプなのだろう。いなほ的には好きなタイプのおっさんである。

もう一人の男は対照的に、ゆったりとしたローブを纏った顔が整った少年だ。幼さの残ったへらへらした顔つきで、これから遊びに行くかのような気軽い雰囲気を出している。アイリス的には嫌いなタイプのナンパ野郎である。

そして唯一の女性は、まだ発展途上の肢体に、赤のラインが入った黒い制服を着ている少女だ。ピンク色の派手な髪を腰まで伸ばし、瑠璃色の大きな瞳がいかついいなほの顔を見て潤んでいる。髪色に反して気弱な少女だが、その両手には、少女の雰囲気にはまるで似合わない全体に棘のようなものがついたごついガントレットを装着している。いなほとアイリス的にはどうでもいいタイプである。

少年と少女はその胸元に獅子をあしらったエンブレムを付けていた。「魔法学院の生徒だ」知らないだろういなほに小声で教えるアイリスだが、やっぱりしいなほは聞かず、こちらを観察する三つの視線にあえて飛び込むように一歩前に出た。

「おう、待たせたな。俺はいなほ、早森いなほ。んでこつちがアイリスだ」

三人の座るテーブル席の空いてる椅子に大股開きで座る。「まっ、

よろしく頼むぜ」と、明らかに馬鹿にした態度で、思ってもいないことをいなほは言った。

その無礼な態度に一層ビビる少女、寡黙を崩さぬ男、そして少年はいなほの態度にイラついた。

「全く、どんな奴が来るかと思えばなんだよその態度。てか何その格好？ あんた依頼を舐めてるわけ？ おっさん、悪いこと言わないから帰りな。調子乗ってる痛い目見るよ？」

少年が盛大に毒を吐く。一瞬、誰にも気付かない程度の殺気をいなしは発したが、どうにかガキの戯言ということでないほは殺気を押さえつけた。

「あつ、勿論アイリスさんは残ってください。噂はかねがね、氷結の騎士と言えば魔法学院の元生徒会長としても、この町では期待の冒険者として有名な冒険者としても、どちらの意味でも噂になっています。氷結の騎士は氷の冷たさと花の美しさを併せ持つってね。ああ失礼、自己紹介がまだでした。俺の名前はキース・アズウェルド。魔法学院入学して一年ですが、ランクはH+なんで、そのこのヘンテコな格好の奴より遥かに役に立ちますよ」

とも思えば一転。いなほに向けていた嫌悪の表情を爽やかな笑顔に変えて、いなほを無視してアイリスに近寄ると、その手を取って握手した。

「ああ、よろしく頼む」

アイリスは手を握られながら無表情で事務的に返事をした。

まるつきり相手にされていないことに気づいていないのか、キースは笑みを深くして手を放すと、芝居臭く一礼して席についた。

「わ、私は、ネムネ・スラップといますデス。アズウェルドくんと一緒に入学一年デス。え、えと、ランクは……無し、デス」

後半は尻つぼみになりながら、顔を赤らめネムネは自己紹介を終える。

「ガント。H - だ」

巨漢の男、ガントの自己紹介は簡潔だ。隣のキースが自分よりも低いランクの二人を見て笑う。どうやら自分よりも弱い奴には徹底して強気らしい。

「先程紹介を受けたが、私はアイリス・ミラアイス、Fランクだ」

全員の自己紹介が終わったところで、改めてアイリスが言う。やはりというか、アイリスの名前は有名であり、全員の表情が変わる。変わらないのはいなほ位だ。

「それで、依頼主のほうだが……」

「おお、皆様ようこそ集まっていたいただき誠に感謝いたします」

腰の低い態度で現れたのは、丸々と太ったひげ面の男だ。着る服もゆったりとしていて貴金屬類も付けており、如何にも成金といった形である。

「私、ルドルフ・ビツヒマンと申します。本日より一週間、皆様には護衛の方を何とぞよろしくお願いいたします」

男、ルドルフはそう言いながらぺこぺこ何度も頭を下げた。柔らかな面持ちと腰の低い態度に学生の二人は気を良くして握手までするが、他の三人は別段思うところもないのか、いなほを除いて軽く会釈するだけにとどまった。

「しかしほぼ全員がランク持ちの上、今巷で噂の氷結の騎士までご同伴願えるとは、いやはや、これは報酬のほうを上乗せせねばなりませんな」

「いやビツヒマン殿、そこまで買いつけてもらっても困ります。私も未だ修行中の身、過分な期待は気苦労となり剣を惑わせます。ですが、道中の安全だけは私の剣とギルドの誇りに誓いましょう」

「ほぼ、謙虚だと思えば随分と頼もしい。噂に違わぬ騎士ぶりですが。では改めてよろしくお願いいたしますよ皆さん」

再び全員を見渡してからルドルフは一礼する。

なんとも珍妙な組み合わせではあるが、こうしていなほの初依頼が始まるのであった。

第十五話【ヤンキーと不揃いな仲間達】（後書き）

次回、ヤンキー流火消し術（物理）

## 第十六話【ヤンキーの価値観は？】

いなほ達がこれから向かうムガラツパ村は、四方国同盟の一つである、メレクル王国側にあるそこそこに栄えた村だ。

土地が痩せているため田畑を耕すのには向いてはいないが、近くに豊富な鉱物資源に溢れた鉱山があり、そこで取れた鉱石を取引材料にして、金銭の調達を行っている。

ルドルフは、この村との契約を結んでおり、今回は定期交渉のためムガラツパに向かうということであった。

なので六つもの馬車があるものの、そのほとんどは空きであり、移動中の食料と交渉に使う金銭、そして野営用の物品以外には積まれているので、いなほ達は道中馬車を二つ貸してもらい、一方には男組で、一方には女性組に分かれて乗り込んでいた。

「……しかし暇だねえ」

昼下がりの道中、揺れる馬車の中で欠伸をしながら退屈そうにしているのはキースだ。馬車の中で寝ころぶ姿にはやはり緊張感はない。いなほはそんなキースを一瞥するだけにして、真正面に座る、両手剣を抱きながら片膝を立てて目を閉じているガントの方を見た。

「ようおっさん。いいモン持ってるじゃねえか」

「……お前には、必要ないだろう」

ゆっくりと目を開けてガントはいなほの拳を見た。彼もまたアイリスと同じくいなほの力量を見極めていたようで、その眼光には珍

妙な格好をしているいなほを侮るような色はない。

いなほは嬉しそうに喉を鳴らした。トロールよりも低いH・らしいが、間違いなくこの男はトロールなどよりも強い。確か経験や知識はランクに反映されるわけではなかったなと、いなほはアイリスの言葉を思い出していた。

その点こいつは駄目だな。

いなほは本当に昼寝を始めたキースを横目にしてつまらなそうに肩を竦めた。能力的にはガントを超えるキースだが、如何せんその能力を最大限に使えているようには見えなかった。この感じだとトロールとタイマンを張るのが精いっぱいだろう。

「それよか悪いなおっさん。俺は実はギルドに入ったばかりのウブだよ。ここらの流儀がわからねえんで迷惑かけるぜ」

「そうか……なら先輩として教えよう。走行を邪魔する魔獣を片っ端から殺せ。それでいい」

「流石先輩。適切なアドバイスが泣けるぜ」

いなほは豪快に、ガントは静かに笑った。世界は違えど、荒くれ者の感性は変わらないらしい。互いに共感する部分があるのだろう。酒があつたらここで一杯やりたいところだといなほは思った。

「だがお前程の気配を持つ者がこれまでギルドに入っていないなかったというのは奇妙な話だ。以前は何を？」

「変わらねえよ。ぶん殴るのが仕事みたいなもんさ」

片手を掲げていなほは気軽に応える。

「そうか。俺も同じだ。昔からこいつしか知らん」

ガントも両手剣を持ち上げて応じた。刀身を鞘から出していなほに見せる。

よく磨かれているが、よく見ると至る所に小さな傷が刻まれている。そのどれもがガントがこの両手剣と共に歩んできた誇りの証だ。

「やっぱりいいモンだよこいつは」

いなほは感嘆しながら、無数の傷が残る両手剣の美しさに見入った。芸術品のような美ではない。売ればそこまで高く売れるような一品ではないだろう。だが、繰り返し返してきた年月の育んだ戦いの歴史は、いなほにとってどんな調度品よりも勝る価値がある。

だからこの男はきつと強い。いなほがその拳に無数の傷を刻んだように、ガントもまた剣に己を刻んできた。きつとこの男と喧嘩したら素晴らしいものになるに違いない。

ガントもいなほの内心を感じたのか、小さくも深い笑みを浮かべた。わかっている。どちらも糞つたれの馬鹿野郎だ。

「うわー、おっさん達何笑いあつてんのさ。気持ち悪」

だがそんな楽しい空気をぶち壊す、間延びした軟派な声。

起き上がったキースが侮蔑をふんだんに含んだ眼差しで二人を見下していた。

「……………」

「……………」

ガントはおろか、いなほすらも反応しない。侮蔑の態度はいなほ

にとって苛立ちの対象だが、『子どもの駄々に』キレルほど器量がないわけではない（だがエリスにキレたことを本人はすっかり忘れてる）。むしろアホらしいと憐れむような眼差しをいなほはキースに向けた。

「あつ？ 何さその目。その態度気にいらないんだけど」

食いかかるようなキースの態度。

うぜえ奴だ。我慢をしようにも限界はある。いなほはガキに怒鳴るのも大人げないので、溢れそうな殺気をため息とともに吐き出した。

「気に入らないならさっさと失せな。テメエが近付くとテメエのママのおっぱいの臭いがそのしょうもない口から臭ってきてやる気がなくなっちまうんだよ」

とは言っても出る言葉は呼吸するがごとく罵詈雑言。いなほ的にはとても優しく言っただけだが、あんまりすぎる挑発の言葉に、キースの顔が一瞬で赤に染まった。

「俺を舐めてるのアンタ……？」

「ケケケ、舐めさせたいならもつと美味そうになってから出直しな。乳臭えガキを舐める程モノ好きじゃねえんだよ俺あ」

「っ！」

狭い場所で立ち上がり憤りをまき散らすキースは、怒りのままにロープの下に手を入れると、先端に赤い宝石のようなものが付けられた木の杖を取りだした。

その先をいなほに向ける。ガントが静かに射線上から離れ、両手

剣を持つ手に力を込める。仮にも相手はH＋ランク、油断のない動きはプロらしい洗練されたものだ。

「へっ、どうしたよキースちゃん。腕がふるふる震えてるぜ？」

だがいなほはあえて逃げ出さずに、むしろ進んで杖の目に体を差し出すように前に出た。

赤い宝石にいなほの厚い胸板がぶつかると、一触即発の危険な空気、何かのきっかけがあれば即座に死地へと変わるだろうと緊迫。

その時、突如馬車が動きを止めた。

「魔獣だ！」

一番先頭を走っていた馬車の従者が叫ぶ。いなほとガントの動きは速かった。一人怒りのあまり状況を理解していないキースを無視して馬車を飛び出す。

「おでましたな！」

「ああ……心配はせん。だが獲物は残せよ？」

「そりゃ俺のセリフだったの！」

馬車を飛び出し瞬間に駆けていく。後ろでようやく事態を理解したキースも慌てて馬車から下りた。「俺を無視するなあ！」情けない怒声を背中に、いなほとガントが先頭に躍り出る。

「来たか」

そこではすでにアイリスが抜刀をしていた。敵は十体のゴブリン

の群れ。トロールのように緑色の肌だが、その全長はエリスよりも低い程度か。お粗末な棍棒と簡素な鎧を装備して、先頭に立つアイリスを囲むように布陣している。

ネムネはアイリスの影に隠れるように、へっぴり腰で立っていた。ありや喧嘩慣れしてねえな。といなほが結論する。同時、合流もつかの間、いなほとガントはアイリスの横を抜けてゴブリン達の真つただ中へ躍りかかった。

「うおらあー！」

「ぬうん！」

剛腕と剛剣が一閃の元ゴブリンの命を刈り取る。そして二人は背中合わせに構えた。

完全にゴブリンに囲まれる形になるが問題ない。いなほとガントの二人は、自分達が錨のように食いこむことだけが目的なのだ割り切っている。

「『凍てつく風、凍てつく大地、凍てつく歩み、迫りくる者をことごとく凍り尽くせ！』」

直後、アイリスの青色の魔力が詠唱に吸い込まれ、ゴブリン達の足元を凍らせる形で顕現する。お得意の氷結魔法で、敵の足を止める集団相手に適した魔法だ。

「これでゴブリンは動けない。ネムネ！ この初陣、一匹は狩れ！」

「は、はいー！」

アイリスの激励に何度も頷いて、ネムネはガントレットを締め直

すと強化魔法で光る体で駆けだした。充分な速さを伴い、足もとの氷の除去に苦戦する一匹のゴブリンの前に出る。

「伸びて！」

「グギ!?」

髪と同じピンクの光を揺らめかせ、ネムネの右拳が走る。その先に魔力が集中したと思えば、三つ又の刃が拳より現れ、応じようとしたゴブリンの棍棒と拮抗した。詠唱を使わない、魔力を通すだけで単一の魔法が使える魔法具の刃、これがネムネの主兵装だ。

抵抗は一瞬。魔獣とはいえ所詮はゴブリンの膂力で、強化した肉体と、魔法により作られし鋭利な刃には敵わない。哀れ両断された棍棒を抜けて、ネムネの牙はゴブリンの喉元に突き刺さった。

「捻じりながら引き抜いて離脱！」

アイリスの澄んだ声がネムネにその通りの行動を行わせる。傷口を広げるように拳を捻りながら、引き抜く勢いで後ろに下がると、ゴブリンの喉から鮮血が吹き出してそのまま大地に伏した。

「や、やった！」

「よくやったが五十点。敵がいるのにぬか喜びは」

魔獣討伐に喜ぶネムネの背中にアイリスが回り込むと、氷の束縛を抜け、ネムネの背後から襲いかかってきたゴブリンを一刀で両断する。

「このようになる。ダンジョンのような狭い空間と違って、平野は

集団戦ではバツクアタックの危険が常にある。敵が全員いなくなるまで油断するな」

強化の魔法も使わずゴブリンの首をはね飛ばしたアイリスは、驚くネムネの目を見て冷徹に呟いた。かくかくと首振り人形のように動くネムネが了承したと見たか、アイリスはネムネから視線を切ると、氷の束縛を抜けようとするゴブリン達に、改めて氷の束縛を掛け直す。

「で、俺らはいつまでじゃれてりゃいいんだかね」

「知らん。次はキースの実力でも見るつもりなのだろう」

いなほとガントはすっかり観戦モードである。実はこの二人とドルフは、町を出る前にアイリスに一つお願いをされていたのだ。

『彼らの実力を試させてくれ』そう言った提案であった。この時期は、アイリス曰く在籍一年程度の魔法学院の生徒がそれぞれ依頼を受け始める時期らしい。自己紹介のときにアイリスが感じたのは、おそらくあの二人は初依頼を受ける新米だということだ。

なのでよければ彼らの実力をしるついでに、依頼の空気を感じさせたいので、一戦目はサポートに徹してくれと願い出た。だったら俺もまだテメエに実力見せてねえだろと食い下がってきたいなほだが、アイリスは呆れた風に「お前は闘わなくてもわかるくらい強い」とのこと。それにはガントもまた深く頷いたので、渋々いなほは引き下がったのであった。

余談はあったが、そういうことでもし比較的楽な魔獣が出た場合、アイリス曰く初めての依頼だろう二人がどの程度活躍できるか確認することになっていたのだ。

なので二人は突出して数匹殺して後は牽制、アイリスは足元を凍らせるだけの、本人にとっては簡単な魔法を使うに留めていた。

いなほから見た見たネムネは、戦いを見た後でもどうでもいい存在だ。ビビってるのか腰が引いてる。あれでは折角強化して強くなった体の意味がない。一応基本的な体の使い方は出来てはいるが、それゆえに目立つ幼稚な部分。

「ケツが緩いんだ。あの女」

呟いた一言は新たな登場人物の出現によって消された。

「ハッ！ なんだよおっさん達！ 折角アイリスさんがゴブリンを足止めしてるのにばーっと立ってるだけなんてさ！」

キースはそう悪態を叫びながら、全身から魔力を放出する。黄色の魔力は、まるで炎のように揺らめいていた。

「うるせえ！ 遅れてきた奴が吠えてるんじゃない！」

「うるさいのはそっちだよ！ 丁度いい。さっきはうやむやになっただけど、ここでまとめてあんたも吹っ飛ばしてやる！」

そう言うと、キースは手に持った杖を掲げた。魔力増幅炉でもある杖を媒介にして、より膨大な魔力が杖の先端に集まっていく。

「『燃やし尽くせ、紅蓮の腕よ』！」

昂った気持ちを表すかのように、怒りの形相のキースが合流したと同時に、一抱えはあるだろう炎の球体を杖の先端に具現化させた。魔力を元に作られた火球を前に、ゴブリン達の動物としての本能が刺激される。

キィキィと甲高い悲鳴をあげるゴブリンを前に溜飲を下ろしたのか、

下衆な笑みを浮かべたキースが、いなほ達がいるのも構わず、ゴブリンの群れの中に火球を放った。

流石のガントも、H+の能力を持つキースの火球が迫るとなれば慌てるのは道理。攻撃の気配を感じた瞬間には、両手剣を前面に構えて離脱する。いなほもガントに僅かに遅れて、襲いかかる火球から逃れる。ではなく、『飛び込んだ』。

「馬鹿が……！」

低く唸り、いなほは拳を握りこむ。そこにいる誰もがいなほの行動に目を疑った。生身の体で、ゴブリンなら焼きつくせる火力の炎に飛び込む暴拳、アイリスもいなほのランクは知ってはいるが、直撃を受けて無事でいられるとは思えない。

火の軌跡を後ろに伸ばしながら、人魂のように揺れて走る火球。いなほは周りの驚愕の視線を浴びながら、ただ不愉快そうに目を細め、火球に向けて拳を突き出した。

激突の瞬間、アイリスだけはその絶技を見ていた。触れると思っただ火球といなほの拳だが、いなほの拳が纏う風圧に火球が押し負け、遂にはかき消える異常。傍から見たらいなほの拳が火球を貫いたようにしか見えない暴拳。だが火球はいなほの誇る筋肉ではなく、その余波で容易く葬られたのだ。

「あつ……え？」

誰よりも驚いたのは火球を放ったキースだろう。怒りを伴って撃った火球は、避けられるように速度は押さえたが、威力に関しては手加減をしていなかった。

炎はキースがもつとも得意とする魔法である。それが消される、ということとはキースのプライドがへし折れたのと同義である。易々と蹂躪された己のプライドの末路を見て、キースは自分の目を疑った。

「……だからガキは嫌いなんだ」

唾を吐き捨てながら、いなほはゴブリン達に振り返る。足元は氷で捕らわれ動けず、目の前には不愉快そうに指の骨を鳴らす、炎をかき消した異常の化け物。

「おいテメエら。今の俺は随分ゴキゲンだからよ、来てえなら相手になるぜ？」

戦いになるはずがない。ゴブリン達は持てる力の全てを振り絞り氷の拘束から逃れると、我先にといった感じで森のほうへと逃げていくのだった。

「……つたく」

いなほは髪を掻きあげながら逃げていくゴブリンを見送ると、全員が森に消えていったところでキースに向き直った。

「ひっ……」

冷たい視線に晒されたキースが小さく悲鳴をあげ、腰を抜かして尻をついた。

殺される。そんな予感がキースの体を縛った。震える体、焦点の定まらない視線。たかが一撃魔法を消された程度でと笑うことなかれ。温室育ちのキースには自分の魔法をたかが拳の一薙ぎで消されるのも衝撃だったが、何より敵わないと分かっている人間に襲いかかる魔獣を、たかが一睨みで追い払いたいいなほの視線に晒されているのだ。

その恐怖と言えば筆舌し難い。言うなれば蛇に睨まれた蛙、まな

板の上の鯉。プライドという鎧を剥がされたキースに、野獣に人の皮を被せたような男の殺気に抗う術はないのだ。

「くっただらねえ」

そんなキースの様子を見て、いなほはさらに落胆の色を濃くした。いなほはと言えば、キースに殺意を向けたわけではない。言うなれば幼子を叱る大人の如き僅かな怒りの念を向けた程度のことだが、それだけで悲鳴すらあげるような奴に、いなほはこれ以上構う気力は沸かなくなつたのだ。

最早キース等眼中に入れず、いなほはその横を抜けて馬車へと戻っていく。

「つまらないんだよ、テメエは。まだあのへっぴり女のほうがマシつてもんだ」

責めるでもなく、本当に興味が失せたといった言葉をいなほは残して去っていく。

そしてそれは他の者も一緒だった。唯一ネムネだけが去り際に「大丈夫デス。次頑張るデスよ」と励ましの言葉をよこしてくれたが、醜態をさらしたキースには届かない。

そしてふらふらと元の馬車に戻ると、そこには二人の姿はなかった。問いただそうと従者の人に目を向けると、ただ一言「言いにくいのですが、貴方と一緒にの所にいたくないのだと……」そう申し訳なさそうに言われ、キースは呆然と腰を下ろした。

「クソっ……」

呟く言葉は無力の証。手に持っていた杖をキースは投げ出して、顔を覆い頂垂れるのだった。



第十六話【ヤンキーの価値観は？】（後書き）

次回、ヤンキーと小休憩

## 第十七話【ヤンキー小休憩】

「でいでいでいでいでDランクなんデスカあああああ!？」

狭い馬車の中にネムネの悲鳴染みた声が鳴り響いた。「あっ、勿論ミライアイスさんのFランクも凄いですよ!」続きの言葉は、たまらず耳を押さえたアイリスといなほには届かない。

キツと目を細めて、騒音が終わると今度はいなほが怒鳴りつける。

「るっせえ! んなことで一タビビってたら寿命すぐなくなんぞ!」

「で、でも、Dランク、しかもC手前の+付きなんて……普通そういう人って貴族の人や王族の人ばかりデス」

ネムネは興奮冷めないといった様子で鼻息を荒くした。

無理もないだろう。いなほは知らないが、D+というランクは、国の上流階級である貴族級の中級以上や王族、そして魔獣を超えた化け物である魔族といった者達が持つランクである。種族として強いとされている鬼人や竜人やエルフとすら互角以上に渡り合うことが出来る。

ただの人間が持つランクとしては規格外の代物なのだ。アイリス程の才気溢れた人間でも、修練の末に届くか否かといったレベルである。だがそのところをイマイチ理解していないいなほは、むしろ最強ランクであるA+でないことに不満を覚えていた。

「ランクなんかで決められるのは糞だがよ。どうせならAランクって奴にいつかはなつてやるつもりだ。だからビビるんじゃねえよへッピリ」

「私の名前はヘッピーではなくてネムネ、デス！ それはともかく、いなほさんなら本当にいつかAランクとか行きそうで怖いデスよね」

「それには私も同感だ」

アイリスが同意し、ガントも首肯する。「だろ？ やっぱそう思うだろ？」いなほは褒められて満足げにふんぞり返った。

最も、こんなのがAランクになったら世も末だがな、内心の気持ちには出さない空気の読めるアイリスであった。

「ホホ、随分仲がよろしくなったようですね」

朗らかに笑いながらルドルフが言った。何故か真ん中を走る豪華な馬車ではなく、こちらの狭い馬車に乗ってきたのだ。曰く「冒険者の皆様がいるここが一番安全ですから」とのこと。

「仲が良いとは……まあこのしょうもない男を除いた私達三人は随分と仲が良くなりましたが」

アイリスが皮肉たつぷりにいなほを指差しつつ言った。「おいおい、おっさんはこっち側だろ？」と冗談交じりにいなほはガントの肩を小突いた。反応はないが、それで充分。

「嫌われ者には肩身が狭いぜ」

「そう言いながら大股開きで座ってるのは何処のどいつだかな」

「んだよアイリス。女が股広げて座るなんざ下品だぜ？」

「君のことだ！」

ひと際大きくいなほが笑うと、釣られるようにネムネとルドルフも笑い声を上げた。見ればガントの口も僅かに綻んでいる。納得いかないのはアイリスだ。全く、この男といると調子がいつも狂わせられる。

「それにしても、キースくん大丈夫デスでしょうか？」

ふと心配そうに後方の馬車に乗っているのであろうキースの方に視線を向けるネムネ。

「知らねえよあんなガキは。それにただの喧嘩だったらまだいいが、あの状況で自己中發揮して仲間もろとも攻撃する奴なんざに、背中預けようとは思わねえしな」

「ガントから聞いた話だと、君の方も彼をあおったのだろうか？ だったらあの最悪な攻撃は、君に原因の一端があると私は思うのだが」

「正論だなアイリス。だけどあのガキ。俺があおらなくても、いずれは誰かとソリがずれて喧嘩してただろうよ。しかも、決定的に最悪な場面でだ」

言われればそうだなとアイリスも肯定した。ランクという明確な強弱の優劣があるが故、よくキースのように自分より下の人間を見下す者をアイリスは随分と見てきた。しかも多感な十代の半ばである少年だ。分かりやすく自分が力を持っているという事実が、彼を増長させたのだろう。

ともすればこれは良い機会だったのかもしれない。自己紹介からの態度のままだったならば、いずれキースは何処かで命を落として

いただろう。

自分より下の者を見下し、蔑み、結果として破碎した人間関係は、キースに決定的な終わりを与える。

そこまで考えていなほがキースにあのような態度をとったのだとすれば驚きだが、絶対この男はあの場のノリでああいったことをしたに違いない。

だがそれでもいなほの行動がある意味正しかったので、アイリスは黙ってしまった。

それにあの少年、私的にも気に食わなかったし。だが、である。

「だからと言って滅茶苦茶な態度をとってる君がそんなことを言っても説得力に欠けるが」

「俺はいいんだよ。あのガキと違って『分別』がついてる」

「その言葉がどれほど信用ないかわかってないんだらうね君は……」

頭を抱えるが、この件については本当に今更だらう。現にいなほはキースのように仲間もろとも攻撃しようとはしなかったが、キースはその愚かを行った。

だが性格的にはキースもいなほもどっこいどっこいがいい所だ。むしろ力がある分いなほの方が悪いだらうアイリスは思う。

「まあ彼については気にしなくてもいいだらう。いずれは時間が解決するさ」

我ながら無責任な言葉だなと自嘲しながら、アイリスは不安げなネムネの頭を優しく撫でた。

「ミラアイスさん……」

「他人行儀はくすぐつたいな。アイリスと気兼ねなく呼んでくれ」

「わかりましたデス。アイリスさん」

まだどこかきこちなくではあるが笑い返すネムネ。

「そついやよルドルフ。村のほうにはどの程度で着くんだ？」

「魔獣の襲撃がなければですが、明日の正午には着くはずです。途中野営をいたしますので、皆様には夜の番をしていただく予定です」

いなほの質問にルドルフはそう返した。

「FランクとDランク、そして熟練のHランク冒険者と頼りがいのある学生様がいたので、私どもは安心して眠らせていただきます」

「おう。全部俺に任せとけ」

「君に任せたら逆に不安だよ」

ルドルフの信頼に自信たっぷりに応えるいなほと、諫めるアイリス。

そついえばと切りだしたのはネムネだ。

「いなほさんってどういった魔法を使うんデスか？ Dランクの人が使う魔法って私見たことないので、よければ教えてくださいデス」

「おお。それは私も知りたかったことです」

「……………」

アイリスを除いた三人が興味津津といった風にいなほを見た。「フツ」と得意げにいなほが笑う。自信ありげな表情にネムネの瞳が輝き、対照的にアイリスは嫌な予感がして額を手で押さえ頂垂れた。

「魔法なんざ産まれてこの方使ったことがねえ！」

堂々とそう告げたいなほに、一同が声を失った。静寂というか沈黙。数秒ほど、馬車が鳴らすリズムカルな音以外に何も聞こえなくなる。

「え。や、いやデスねーいなほさん。冗談デスよね？」

ネムネがわざと明るい口調で言うが、いなほはただ「こんなことで冗談言わねえよ」と大真面目に言うのだから、今度こそネムネはおろか、ルドルフの表情すら凍りつく。

最初に覚醒したのはネムネだった。いなほがDランクだと知った時以上の大声を張り上げる。

「ええええ！？　じゃあDランクってというのは嘘なんデスかデスのデスでしょうか！？」

「なわけねえだろ！　文句があるならそういう風に俺をランクした黒水晶に言いやがれ！」

「……………いやはや、本当だとしたら、これはまさに驚きというか、いやはや本当にいやはや……………」

ひえええと叫ぶネムネの隣で、ルドルフも驚きで流れ出した額の

汗をハンカチで拭った。

そこまで驚かれることなのだろうか。いなほがアイリスを見れば、アイリスは肩を竦めて苦笑してみせた。

「残念だが彼の言うことはおそらく事実だ。私と最初に会ったときなんて強化魔法も使わずに馬よりも速く走っていたしね。それに君達もアズウェルドの炎を何の魔法も使わず消したのは見たはずだ。少なくともランクのことについては、私の二つ名に賭けて偽りではないことを誓おう」

「でもデスでもデス。いなほさんがDランクなのはわかったとしても、魔法が使えないというのは些か信じられないデスよ」

うんうんとルドルフも同じ気持ちなのか頷いた。これについては僅かばかり同じ気持ちを抱いてるといってもいいアイリスには弁解のしようがない。

そもそも何で私が弁解してるんだという気持ちの混ざった視線をアイリスはいなほに送った。だがいなほも、説明のしようがないため、むうと声を詰まらせてしまった。

「……確かこの辺りに魔性の花が咲いていたはずだ」

と、そこでガントが割り込んできた。

魔性の花とは、一年中咲いているタンポポに似た花だ。花卉の色が紫色と毒々しいが、これを軽く煎じて飲むことで、体内にある魔力の栓とでもいうものを開き、魔力を扱えるようになれるのだ。基本的に群生地は大陸の無数の場所にあり、採取も簡単なことから、どの家庭でも五つを過ぎた子どもにこれを煎じて飲ませ、魔法を扱える下地を作るのである。

「でしたらそろそろ日も落ちるでしょうから、少し早いですがこの付近で野営をしましょう。皆様のおかげで予定よりも早く進んでいきますし」

「賛成デス。私とガントさんとキース君でキャンプは作っておきますデスから、アイリスさんといなほさんは魔性の花を取ってきてくださいデス」

ルドルフの提案にネムネが手を上げて賛同する。ガントも異存はないのか黙ったままだ。キースに関しては、冷たいがここにいないので了承を取る必要はないだろう。

「すみませんビツヒマン殿。そして君達もありがとう。連れの私情に巻き込んでしまい申し訳ない」

そう言ってアイリスは深々と頭を下げた。何処までも律儀な女性だとルドルフは微笑み、ネムネはアイリスに頭を下げられてことに恐縮する。ガントはいつも通りだ。

いい仲間を得られた。アイリスは頭を上げると静かに口を緩め、一転、どうでもよさそうに踏ん反りがえっているいなほを睨んだ。

「君のために皆様が厚意を寄せてくれているというのに！ 君は！ 全く君って奴は！」

「あー？ おう、ありがとうよテメェら」

「この不良！ 最低！」

「んだよ。知ってて俺を誘ったんだろ？」

「それとこれとは話が別だあ！」

今にも泣きそうな悲鳴を上げるアイリスを見ていなほはゲラゲラと爆笑した。

果たしてこんな男のために野営をとるのは正しかったのだろうか。等と一人、ちよつと目が潤んでいるアイリスを見ながらネムネは思うのであった。

第十七話【ヤンキー小休憩】（後書き）

次回、料理とか魔力とか

## 第十八話【ヤンキーと料理話】

街道の道中、草原の一面でいなほ達の野営の準備は始まった。

とはいっても寝床はそのまま馬車を使うのでそこまで準備するものはない。精々馬車に布を敷いて、あらかじめ持ってきていた薪を組んで炎を灯し、そして魔獣の嫌いな匂いを発する香水を馬車を中心に大体百メートルに撒く程度だ。一応ということで、アイリスが普段使っている半日程の効力があるランク無しの魔獣を弾く結界を展開してから、いなほとアイリスの二人は魔性の花を探しに森の中に入っていた。

日も傾きオレンジ色に染まる世界。森の木漏れ日からの斜陽は都会育ちのいなほの目には幻想的だった。

少しばかり歩いたところで、アイリスが立ち止まる。

「見つけたぞ。あれが魔性の花だ」

ほら、とアイリスの指差す先には、紫色をしたタンポポが幾つも木の根っこの傍に咲いていた。魔性の花の名の通り、毒々しい見た目でありながら、艶やかな印象を覚えるのは魔のなす美か。アイリスはその内のひと際大きな物を一つ摘みとった。

「さて戻ろうか。大丈夫だとは思うが、今回の依頼の最高戦力は我々だ。居たほうが依頼主側も安心するだろう」

「わかった……つかよ、それ一つでいいのか？ これかつこむだけでデメエラの使ってる魔力つてのが出るようになるんざ、疑うわ

けじゃねえが、やっぱどうにも信じられねえからよ」

「私としては、いや、私達としてはこの花のことを疑う君のことこそ信じられないといった感じだな。いずれにせよこれを君が飲めば大なり小なり魔力が覚醒するのはまず間違いない。というか私としては君のその馬鹿げた筋肉のほうに魔法染みてる気がしてならないがな」

と言いながら、隣のいなほのタンクトップから伸びる浅黒い腕を見る。

ゴブリン戦後馬車に乗った際、ガントはいざ知らず、鍛えているとはいえ全体的に細身かつ、鎧も付けていないいなほの乗った部分かぎりりと悲鳴をあげたのを聞いて、試しにいなほの腕を持ってみたアイリスはそのあまりの重さに驚いたものだ。

この世界での体重の単位は違うため実際の体重はわからなかったが、いなほに聞いたところ「二百キロ位あるぜ」とのことだった。それがどの程度の重さかは知らないアイリスだが、どう考えてもいなほの体は見た目以上に重すぎる。

「改めて君の筋肉には驚かざるをえないよ」

拳で軽くいなほの二の腕を小突く。力を入れていないにも関わらず、その肉は鉄のような固さを持っていた。人の限界を超えた筋繊維の密度。これこそいなほの人外の秘密なのかもしれない。

「へへっ。俺は馬鹿でろくでなしで良いとこなんざ殆どねえが、こいつだけは俺の自慢よ」

得意げに鼻を擦り、いなほは見せびらかすように腕に力を込めた。くつきりと浮かび上がる三角筋と上腕二頭筋と三頭筋等々、およそ

完璧といつていい程の美しい曲線を描く筋肉を見て、何故だかアイリスは言いようのない敗北感を覚えた。

「確かにな。君のそれは女の私から見ても羨ましい。同性から見たら妬みの対象だろうさ」

隠す必要もないだろう。アイリスは内心の悔しさを隠すでもなく吐露しつつ、掌で魔性の花を弄んだ。

日が落ちるのは早い。太陽がその半分以上の姿を隠した頃、二人は野営地へと溶着した。

「アイリスさんこっちデス！」

燃え上がる焚火の傍から二人の姿を確認したネムネが手を振ってくる。焚火を囲うように、ルドルフ、ガント、そして少し離れてやさぐれたキースが座っている。馬車を操っていた従者も別の場所で焚火を囲って、早速食事を始めていた。

勿論こちらの焚火にも簡単な料理が置いてある。保存魔法により鮮度を保ったままの肉は焚火の火にあぶられ、既にこんがり焼けており、美味そうな肉汁を滴らせていた。当然それだけではなく、村で取れた新鮮な野菜はそのまま一口サイズに切られ皿に盛り付けられてある。使い古されてはいるが、よく洗われ磨かれている軽い金属を使ったマグカップには並々と注がれたアルコールで満たされていた。

「何だネムネ。ガキの癖にいける口か？」

「何言ってるんデスカいなほさん。お酒くらい子どもものころから飲んでるデスよ」

「へえ……まつ、アメリカじゃそれもありなのかもな」

いなほとアイリスはガントとネムネの間に座り、カップを受け取った。

「駆けつけ一杯」

「その前に乾杯だ」

早速飲もうとしたいなほの口をアイリスが押さえた。何となくムカついたので口に当てられた指を舌で舐める。「うわひゃ」とアイリスの悲鳴と共に手が離れた。

「乾杯！」

いなほがカップを掲げて叫ぶと同時に口を付ける。炭酸とビール独特の苦みの向こうで存在を主張するフルーツの甘さが舌を楽しませる。突き抜ける炭酸の刺激を口だけではなく喉でも感じながらいなほは一息で飲み干した。勢いよく胃になだれ込んだアルコールの熱が心地よい。

「くああああ……ッ！ あー、やっぱこれよ」

歓喜に震える。芝生の大地にカップを置いて、いなほは次に良く焼けた肉に手を伸ばした。串に刺さった肉は、一ブロック丸ごと使ったかのように分厚い。熱くなった串の熱など気にせず、串ごと肉を持ち上げたいなほに、ネムネは近くに置いたナイフを差し出した。手渡されたナイフを片手に、空いてる皿の側に近づき、その上で肉にナイフを刺しこんだ。僅かな抵抗の後突き刺さったナイフお切り口から零れ出す油と焼けた肉の匂いが目と鼻に多幸福感を引き起こ

させる。口に溢れる唾液を呑み込み、落とさないように慎重に、だが早く食べたい一心で肉を切り分けた。

皿に落とされた肉を一枚、二枚、三枚切ったところでいなほは隣のカントに肉とナイフを渡した。

絶妙なレア加減で焼かれた肉の色彩の美しさは、他では見れない野生の紋様だ。いなほの目は隣で肉を切るカントと、舌で舐められたことを怒っているアイリスを見ていない。フォークに似た形状の食器を持ち、ふんだんに持った水も弾けるキャベツっぽい何かを肉の上に置く。

いなほはその二つをもろとも突き刺して、一口で口の中に放り込んだ。肉汁の濃い味を包みこむ歯ごたえある野菜の触感が、そのままではしつこそうな肉の味を抑えながらも引き立てる。

噛むごとに零れ出す肉汁が唇を濡らした。いなほは口を拭くと、満足げに息をつく。

「美味え。何だ、随分いい飯だなオイ」

「私、お肉焼いたの私デス！」

片手にフォークに刺した肉を持ちながらネムネが得意げに言った。カントとルドルフも満足そうだ。特にルドルフは自身が持ってきた食料に満足してもらえているのが嬉しいのか、いつも以上に笑顔が晴れやかである。

「これでも本業は様々な食糧物品の卸売なので、こうして私の商品を喜んでいただけるのは嬉しいです」

「最高だゼルドルフのおっさん。戻ったら貰った金でテメエの所の飯たかりに行くから覚悟しとけよ！ こんだけ美味え飯出すんだ！ 金のある限り食ってやるからな！」

カップを掲げていなほは叫んだ。隣で必死に手を拭いているアイリスとの対比は何とも言えないシュールな光景である。

「うう……最悪だ。筋肉馬鹿に汚された……」

「んだよ。食わねえなら貰うぜ」

さめざめと泣くアイリスの前の皿を問答無用で奪おうとするいなほだが、その手が皿に触れようかというところで氷の柱が手と皿の間に壁となって突き立った。

「危ねえじゃねえか」

「知るか！ というか勝手に食べようとするな！」

キツといなほを睨みつけ、アイリスは皿を掴むと作法など気にせず口の中に野菜と肉を流し込んだ。

そして頬をリスのように膨らませながら、マグカップの中身も瞬く間に飲み干す。

「勢いいいな」

「誰かさんのおかげでな」

鋭い眼光なんのその。いなほは低く笑って次の一杯をアイリスのカップに注いだ。

なんやかんやで酌を受け取り一口。まだ一週間程度の付き合いだが、すっかり二人の間に遠慮はなくなっていた。あるいは豪気ないなほの性質が嘔みあったためか。

「あつ、ところで魔性の花摘めましたデスカ？」

「ん……ここにゑぞ」

「じゃあ擦つちゃうのでくださいデス」

アイリスは持っていた魔性の花をネムネに投げ渡した。

「……そんな何に使うのさ」

そこで一步引いていた所に居たキースが声をかけてくる。ネムネは空いている皿の上に魔性の花を置き、いつの間にか作った粗削りの丸い棒を用意すると、キースの方を見た。

「実はいなほさんがまだ魔法はおるか、そもそも魔力すら出すことが出来ないらしいデスので、丁度いいから花を使って魔力を出せるようしようってことデス」

「魔法どころか魔力もって……冗談、だろ？」

「それを今から確かめる。魔力を出したことはないなら、これを飲めば花の魔力で暫く紫色の魔力量になるはずだ」

信じられないといった様子のキースにアイリスがそう続けた。そうこうしている内に、強化の魔法まで使って勢いよく潰り潰しを行ったことで、魔性の花はすっかり紫色のペーストとなっていた。

もう誰から見ても飲んだら死ぬ色をしていた。折角美味のオーケストラを楽しんでいた口内が、目の前のヘドロっばい何かを見たせいで後味も忘れてしまう。

「……おい。やっぱり俺いらね」

「ハハハ、まさか君ほどの男とあろう者が、まさかただか播り漬した花を見ただけで、まさかまさか怖気づいたわけではあるまい」

「っ!? おうおう! 誰がビビってるだつてえ!? 上等じゃねえか! おいへツピリ! それ寄越せ!」

アイリスの安い挑発に乗せられたいなほが、言つが早くネムネの手元から皿を奪うと、素手で一気に流し込んだ。

第十八話【ヤンキーと料理話】（後書き）

次回、ヤンキー魔力に目覚める。その二

## 第十九話【馬鹿ヤンキーと秀才少年】

「モガッ!？」

いなほの口の中を猛烈な苦みが襲う。「アルコールに薄めると何故か苦みがなくなるから、普通それから飲むんデスけどね。それと私の名前はネムネデス」とぼやくネムネの言葉も苦みに苦しむいなほの耳には届かない。

だがそれでも男の面子かただの意地か、顔をまさに言葉の如く苦汁に染めながらも、いなほは悶えたり叫んだりせず、ただ全身に力を漲らせ果てなき苦みに耐えていた。

すると、闇夜に紛れながらではあるが、魔性の花と同じ紫色の光がいなほの体から零れ出してきた。

魔力は普通、個人個人によってその色が異なる。例えば同じ黄色でも、よく見れば薄かったり濃かったりと、一つとして同じ色はない。

だが例外としてこの紫色の魔力光がある。黒の魔力光はあるのだが、何故かこの紫はどの種族でも紫は魔性によって染められる時しかないのだ。

魔力とは本来無色の力であり、肉体にではなく魂にその発生器官があるとされる。よって魔性の花を使い魂と肉体との通路を開けない限り、放出は出来ないのだ。

そして無色だった魔力は、肉体と繋がることでその肉体に侵され、暫くしてから様々な魔力光に変貌する。なので解放した当初は、通路を開けた切っ掛けである魔性の花と同じ色になるのだ。

ちなみに魔力を解放した人間に改めて魔性の花を飲ませても、本人の色に染まっているため紫になることはありえない。

つまりいなほの体から紫の光が溢れたことこそ、いなほが魔力を使えないという決定的な証拠となるのだ。

「……本当にその年まで魔力を使ったことなかったのか」

実際に紫の魔力光がでているのだから間違いない。そして同時にアイリスの脳裏に仮説が一つ生まれる。もしあの時のランク測定が魔力を加算されていない数値だとすれば、もしかしたらいなほの潜在的なランクは

「ケツ、う、美味えもん、だったぜ。この程度なら、ジョッキで、いけ、いけオエエエ……」

「ギャー！ い、いなほさん強がりはいい德斯けど吐くなら向こうでやってください德斯ー！」

顔面蒼白のいなほが紫色の毒々しい色の魔力を放っている様は、まるで余命幾許もない病人を思わせる。

アイリスはそんないなほの哀れな姿を見て、先程のセクハラへの怒りの溜飲を下げ、仮説のことも忘我した。「ほら」とカップに飲み物を注ぎ手渡す。

一瞬で奪われたカップの中身をいなほは飲み干し、何とか人心地といたのか、盛大にため息を吐きだしてから、繕うようにニヒルな笑みを浮かべた。

「超、余裕」

「無理するな」

乾いた笑みを浮かべるいなほの頭をアイリスは軽く小突いた。  
ともかく、これでいなほは魔力を放出することが出来た。早速、  
垂れ流しになっている魔力を閉めなければならぬ。

「それじゃ次は魔力の放出を止める練習に入ろう。流しているだけ  
だとすぐに枯渇してしまうからな」

「おう」

「では早速」

まずはお手本をと思ったアイリスの横で、いなほは誰に聞くでも  
なく魔力の放出を抑えて見せた。

「なんで出来る……」

「あつたのを知らなかったとはいえこいつも俺の一部だ。だったら  
この体を一番理解してる俺がこの程度出来ないわきゃねえだろ」

滅茶苦茶理論である。これにはアイリス達はおろか、ガントとル  
ドルフも苦笑いせざるを得なかった。この男に常識を求めるのも今  
更かと、半ばアイリスは諦め気味ではあつたが。

そんな一同を放っておいて、いなほは未だ自分色には染まってい  
ない紫の魔力を出したりしながら一人でテンションを上げていた。

「でよアイリス！ 早速アレだ……あー、アレ、そう、魔法教える  
よ！」

魔力放出を止めていなほがアイリスに詰め寄った。キラキラ輝く

目がキモい。堪らず視線を切ったアイリスは、「では、初歩的な魔法からいこう」と言うと、その体から青色の魔力を漲らせた。

「『一握りの灯火よ』」

延ばした人差し指の先から小さな炎が現れる。エリスも使っている日常で役に立つ言語魔法だ。

「コツは、今私が出している炎と同じイメージを脳裏に浮かべ、溢れる魔力を言葉と共にイメージに注ぎ込む感じだな。出来るか？」

「任せろ」

ではやってみるとアイリスが促すと、いなほは少し色が薄まってきた紫の魔力を全身から放出して目を閉じた。

一秒、五秒、そして十秒。全員の視線がいなほに注がれる。

全身から迸る魔力の波をいなほは知覚した。脳裏にはアイリスが起こした炎のイメージ、否、それでは生ぬるいのでなんかスツゲー燃える勢いの感じのアレだ。そして脳裏の破壊的なイメージはそのまま、いなほは初めて使う魔力をまるで自分の一部のように自在に操り、想像を現実と化す詠唱に魔力を通す。

上がる劇鉄、言霊に漲る魔力。そしていなほは勢いよく目を開き、掌を頭上に突き出した。

「一握りのお！ 灯火よおおお！」

「そこまで気合いはいらないよ!？」

アイリスが堪らず突っ込みを入れるも、当の本人は火が出なかったことが不思議なようだった。

「出ねえぞ」

「出ないよ!」

「? 気合いで出すんじゃないの?」

「君は私の説明の何を聞いてたんだ!」

「知るか! つか詠唱だとかイメージだとか注ぎ込むとか訳分からねえんだよ!」

「あ、一応聞いてたんだね……じゃなくてわざわざ叫ぶ必要はないだろう!」

「魔力は込めたぞ!」

「むう……問題はそこだな。詠唱はややヘンテコではあったが合っていたし、魔力の注入も完ぺきだった。なら何が……まさか」

ふと何か思いついたのか、アイリスは顎に手をあてて何かを考えた。だした。

「君は、その、文字は読めるか?」

「日本語ならな」

「ニホンゴ? いや、これだが」

そう言ってアイリスは地面に棒で自分の名前を書いて見せた。無

論いなほにそれが読めるわけもなく、アイリスはそういうことかと頭を抱えた。

「いなほ、言いくいが、君はある程度の教育を受けていたかい？」

「教育？ おう、学校ならサボりまくってたぜ」

「この際学校に行ける程そこに裕福な家庭の癖にサボっていたことは置いといて……いなほ、魔法には理解が何よりも必要不可欠だ。つまりイメージだけではなく、そのイメージをさらに強固にするために、多種多様の事柄について理解、つまり勉強をしなければならぬ。詠唱に使う言葉の文字の意味、とかな」

どの場所でも魔法は生きるために必要不可欠なので、文化レベルは地球には劣るが、この世界の読み書きの習得率はほぼ百パーセントである。おろか、魔法使用のための語学勉強は地球のそれよりもレベルが高いとっていい。言葉の理解を怠ることは、必然魔法が使用出来ない、つまり日常生活に支障が出るため、人々は必死に勉強をするのだ。

ちなみにエリスの村では、駐在している王国の兵士と各家庭の親により読み書きと魔法を扱う上での基本的な語学は勉強することになっっていた。

閑話休題。

「つまり、君は言葉の理解の足りない馬鹿だから、理解していない言葉に魔力を込めただけで、そこから魔法を発動することが出来ないんだ」

数学でいうなら、式とそこに当てはまる数字まで作ったが、その数式の意味がわかっていないので、魔法という答えに辿りつかない

ということだ。しかも足し算レベルの数式のである。

この世界の常識なら考えられないが、悉く常識と無縁のいなほだ、何となくその理由がしっくり来たアイリスだった。試しにちゃんとした詠唱でもう一度挑戦したが、いなほは魔力を乗せることは出来たが、それ以上は出来ず魔法を使うことが出来なかった。

「……つまんねえの」

十分程悪戦苦闘して、いなほはふてくされたように唇を尖らせた。自分が馬鹿だから魔法を使えないということだったが、なるほど、いなほ自身も不機嫌になりながらも理由事態には納得していた。

自分が馬鹿なのは分かっている。そして魔法が学問ならお手上げだ。今から勉強することも可能だが、生粋の勉強嫌いであるいなほは、魔法という不思議の興味があっても、勉強だけはする気にはなれなかった。だがそれはともかく、折角だから魔法を使いたかったというのがいなほの本音である。

「……ふざけるなよ」

その直後だった。今まで沈黙をしていたキースが静かに口を開いたのだ。焚火に照らされ揺れる瞳はいなほに向けて敵意どころか殺意を放っている。

キースは怒っていた。というのも、自分の全力の魔法を打ち破ったのが、ただの一般市民ですら使える魔法を一つも使えない魔獣並みに馬鹿な人間だったのだ。

強い魔獣に防がれるならまだいい。でもただの人間の拳一つ、ダメージも与えられず魔法が消されたことが認められない。

「ふざけんなよお前！ 何でお前みたいなふざけた人間が！」

そして、そんな男がこの場所の中心人物となっていることが気に入らなかった。

キースは、端的に言えば優等生だ。入学一年で既にGランク手前、学年でもトップ5に入る実力を持ち、周りから羨望を受けていた。いつも中心人物として活躍し、教師同伴の迷宮探索でも、常に前に出て周りの称賛を浴びていた。

だから今回の正式な依頼を受けるといふ実戦授業でも、熟練の冒険者すら平伏する実力を見せつけるつもりだった。

だが蓋を開ければ、偶然一緒になった同級生のネムネを除き、残りの三人は自分のことなどまるで眼中になかった。アイリスはまだいい。Fランクという常人を超えた実力者なのだ。むしろ認めてもらえらるるよう燃えた程だ。

しかし他の二人はムカついた。ガントなどぎりぎりランクを持つてただけなのに、初めて会ったときは自分のランクを聞いてもまるで態度を変えなかった。

そして一番気に入らないのはアイツ。そう、早森いなほだ。完全に上から目線で、自分のランクを聞いても、むしろそんな自分を蔑むように接してきた。

「どう考えてもおかしいだろ！ チームの調和なんて考えていないでかい態度で、しかも魔法が使えない癖に！ 魔法が使えない落ちこぼれ以下の屑が何で上手くやってんだよ！」

それは正しい意見だ。いなほの態度は少なくとも好感を得られるようなものではない。現にキースは嫌っているし、アイリスも常になほの我がままに怒っている。ネムネもいなほの陰相を怖がるし、ルドルフも普通なら依頼主に敬意を全く払わない態度に嫌悪感を覚えるだろう。ガントについては何とも言えないが。

ともかく、それなのに場の中心にいるいなほが憎かった。まるで自分の居場所がとられたかのようだった。

キースの糾弾を、いなほは口をはさむことなく全て聞いた。

いや、納得である。自分の態度は正直言っているものではないだろう。だがそんな自分の在り方を変えられるなら、いなほはヤンキーなんぞガキの頃からやってはいない。

いなほはキースに再びあの関心のない冷めた眼差しを向けた。視線に晒されたキースの喉が引きつり、次の言葉が出ない。

「だからつまんねんだよテメエは」

いなほはただ自分を見るしか出来ないキースの側に近寄った。敵意も殺意もない。路傍の石ころに意識を向ける者がいないのだから、いなほにとってキースがそれと同じ存在である以上、興味の対象ではない。

だが、それが路傍に転がる糞だったら話は別だ。嫌悪感がいなほの表情に沸々と現れてきた。

「魔法が使えねえってわかっただけで怒鳴りやがって、第一んなことほざいてるテメエはどうなんだ？俺と大して変わらねえ糞つたれじゃねえか」

「お、俺は、あんたみたいな奴とは違う」

声を震わせるキース。いなほはニヤリと肉食獣の笑みを浮かべた。

「いいねえ優等生。俺と違うってことは良い奴ってことだ。で？

良いとこの坊っちゃんはわざわざ八つ当たりで仲間に向かって魔法を使うのかい？」

「あれは……あれは、避けれる速度で放ったし、第一突っ込んで来たのはあんただろ！」

「そりゃそうさ。俺あ馬鹿だからよ、テメエに向かってきた拳にはつい突っ込んでしまうのさ」

いなほはそう言い終わると同時にキースの胸倉を掴み上げた。

片手で容易くその体を持ち上げられ、キースが息苦しさに顔を顰める。

「まだ何か言いたいのか？ いいぜ、ガキだから無視してやったがよ、さつきみてえに俺に汚え花火ぶつ放すような売られ方したら買っのが流儀つてもんだ。この依頼終わって戻ったらやつてもいいぜ。それともアレか、溜まつちまって今すぐやらねえと気がすまねえってか？ 俺あどつちでも構わねえぜ」

「っ……！」

漏れ出た殺気がキースを射抜いた。恐怖に体を竦ませるのを感じて、いなほは手を放すと先程までいた場所に戻る。

「だからつまんねんだよ。ガキはさっさと飯食って寝な」

「畜生……！」

キースは自分の分のご飯の盛った皿を持つと、捨て台詞を残してその場を後にした。

「いなほ……大人げないぞ君は。まだ先は長いというのに、関係を悪化させてどうする」

「私も、出来れば皆様には仲良くして欲しいものですな」

アイリスとルドルフがいなほにそう忠告するが、当の本人は素知らぬ顔で食事を再開し、反省をしている様子はない。

互いに目を合わせてアイリスとルドルフがため息を吐きだす。魔獣の心配はないが、前途多難の旅路に不安を積もらせ、夜は更けていくのであった。

第十九話【馬鹿ヤンキーと秀才少年】（後書き）

次回、討伐会議。その一

第二十話【ヤンキーと新たな村】（前書き）

短め

## 第二十話【ヤンキーと新たな村】

翌日、朝早くから出発した一行は、道中に数回の魔獣との遭遇があったが、どれもアイリスが単独で殲滅したことで、特に問題なく村までたどり着くことが出来た。

「随分と普通なところだな」

と、いなほ。マルクに比べれば、村の周りを簡単な柵で覆い、人のにぎわいも商店街に比べて静かなものであるので、普通と思うのも無理はない。

だが近隣その他の村々に比べて、ムガラツパ村は随分と栄えているほうである。鉱山のほうは、国により魔獣の討伐後、癒しの森と同じ魔法が使われているため、危険はほとんどなく、ここでは安心して鉱山から鉄鉱石などを採掘することが出来るので、色々な場所から出稼ぎにくる人も多いらしい。

「では皆様、村長の元へ御同行お願いします」

馬車を預け、従者に宿屋への荷物の運搬を任せられたルドルフは、いなほ達にそう言った。

勿論断る理由もないので、ルドルフを先頭に、一同は村で一番大きな家の前まで歩いて行った。

数度のノックの後、少しの間を置いて扉が開いた。

「おおルドルフ。随分と早かったな」

出てきたのは、白髪が目立つがまだまだ生気に溢れた初老の男性だ。彼が村長なのだろう、何処か人を引っ張る強さが纏う雰囲気

現れている。どうにもルドルフに対する態度から見ると、二人はかなり気心が知れた友人のようだ。

ルドルフと村長は軽く挨拶を交わすと、中にへと案内した。ルドルフが続いていなほ達も中に入る。随分と広い室内で、村長は全員にテーブルの席に腰かけるよう促した。

「遠路はるばるご苦勞でした。私はこの村長のエドと申します」

上座に腰かけたエドが自己紹介をする。いなほ達もそれから一人一人簡単な自己紹介をした。

「では、早速ですが皆様には近隣の魔獣の間引きのことについて説明します。一応ここにも駐在の兵士の方々はいますが、彼らはあくまで村に来た魔獣を討伐するのが任務なので、原則村から出て魔獣を倒しに行くことは出来ません。なので皆様にはその代わりに、この時期に繁殖するバウトウルフの討伐をお願いします」

エドが簡単にはあるが依頼の概要を説明する。

「規定討伐数以上を討伐した場合、私から依頼料を追加で支払いますので」

そう付け足したのはルドルフだ。アイリスが本来部外者に近いルドルフが何故そんなことを言うのか首を傾げる。というか、そもそもこの間引きについても、依頼料はルドルフ持ちであった。

「すまないが、どうしてビツヒマン殿がそこまで？ 確かに商売相手ということもあるが、この討伐については村が別途で行うことではないだろうか」

「ほほ、実は私、この村の出身でしてね。こうして定期的にここを訪れては、鉱石の取引ついでに、村のためになればと思って魔獣の間引きも請け負っているのですよ」

ルドルフがふつくらとした頬を赤らめて恥ずかしそうに答える。

アイリスとネムネは、ルドルフの素顔の一面の優しさに触れて、穏やかな笑みを浮かべた。その隣でいなほはテーブルの上に肘をついて欠伸をしていた。

ぶち壊しである。アイリスの穏やかな心が一瞬にして荒波だった。何というか、無性に泣きたくなる。

「君は空気を読め」

「ヤだね」

ともかく、と気を引き締めるのも兼ねてアイリスが立ちあがった。

「この期待に応えねばなりません。魔獣の間引きを出来ぬようであればビツヒマン殿が村への信用を失ってしまう」

決意に燃える眼差しが場の全員を見渡した。視線が全てアイリスに注がれる。

やろつ、そつという思いを込めてアイリスは強く頷いた。

「では早速我々は間引きに向けて会議を行いたいと思います。そちらも積もる話があるでしょう。皆、一先ず酒場に行こう」

「よろしくお願いします」

「任せるよルドルフのオッサン」

何故かルドルフの言葉に応えたのは、椅子に背中を預けてふんぞるいなほだった。

「……もういいや」

「大変デスねアイリスさん」

力なく頂垂れるアイリスの背中を、慰めるようにネムネが撫でる。何はともあれ作戦会議だ。一同はルドルフとエドを置いて酒場に向かうのであった。

第二十話【ヤンキーと新たな村】（後書き）

次回も会議。超絶筋肉乱舞まで残り数話

## 第二十一話【ヤンキーと討伐作戦】

作戦会議という名目ではあったが、実際はそこまで大げさなものではなく、ムガラツパ村の東西に二つあるバウトウルフが現れるポイントにどう人数を振り分けるかといった程度の話合いだ。

バウトウルフ、ランク無しの魔獣ではあるが、全体的な魔獣の氾濫時期から少しずれて繁殖を始めるため、現在の個体数は相当なものであるだろう。大型犬と同じくらいの体躯と見た目で、白い体毛が特徴である。

上位固体であるクイーンバウトはランクにしてF-という尋常ならざる能力だが、クイーンのほうは森のさらに奥深くの中心部に生息するため、基本的にクイーンに関しては考えなくていいだろう。

さらに群れの長であるキングに関しても、森の奥深くから出ることはないというのがアイリスの持っている情報だが、念には念を入れて、最大戦力であるいなほとアイリスを別々に分け、クイーンのような上位固体が出た場合に対応することとなった。

という訳で実力があるが冒険者としてはド素人のいなほのサポーターのためにガントが付き、いっそのことということで、チームは男と女で分けることになり。

「ケツ、何で俺がこんなガキのケツ持つてやらなきゃいけないんだ」

「五月蠅い！俺だってアンタみたいな野獣じゃなくてアイリスさんと一緒にパーティーがよかったよ！」

結果、いなほとキースは互いが互いを嫌っているため、森の中を歩く男性メンバーの空気は最悪であった。

「……ガキ共め」

二人には聞こえない程度の声音でガントが愚痴を漏らした。森に入ってからここまでずっとこの調子である。大抵のことでは動じないガントといえど、その精神的な疲労は随分と積もっていた。

何せ口論ともいえない罵詈雑言の応酬である。ガントが間に入ることで直接的な喧嘩には発展はしていないが、一晩置いてすっかり立ち直ったキースと、昨日から全く変わらないいなほを放っておけば、激突するのは必至だろう。

「んだオイ。今日は随分口がスべるじゃねえか糞ガキ。その勢いで口から糞漏らさねえように気いつける。それとも俺が糞出す手伝いでもしてやるうか？」

「ふん、口を開いたら糞しか出てないのはアンタだろ。安っぽい文句しか出ないなんて最悪だ。ああ失礼、簡単な魔法も使えないほどの馬鹿だったねアンタ。脳みそも筋肉で出来てるんじゃない？」

「……へえ、キてるぜテメエ、なんならこの自慢の筋肉とテメエの貧相なもやしボディのどっちがぶっ飛んでるか試してみるか？」

「あーやだやだ。これだから筋肉ダルマは嫌だね。何かとあれば直ぐ暴力、もつと文明人らしく言語で解決しようという気持ちはないの？」

「ああ！？ 先に手出ししてきたのはテメエだろうが！」

「なんだよ！ 過去のことを愚痴愚痴と！ 大人の癖にしつこいんだよ！」

「糞ガキ！」

「糞筋肉！」

ガントを挟んで二人の視線がぶつかり合う。物理的な圧力が視線に合ったら、今頃ガントは爆死していたに違いない。

ガントはいよいよ我慢の限界が来たのか、白熱する口論を止めようと、その分厚い掌を握りしめ、二人の頭目がけて振りおろそうとして、

「オオオオオオオオオン！」

森をざわめかせる遠吠えが、ガントの代わりに二人の口論を問答無用で黙らせた。

「話は後だ糞ガキ……来たぜ！」

三人がそれぞれの獲物を構えた直後、森の茂みから白い影が飛び出て来た。バウトウルフ、ランク無しでは最速に近いスピードを誇る魔獣の速攻だ。

誰よりも早く反応したのがいなほだった。飛んでくるバウトウルフの影を正確に捉え、絶妙なタイミングで右足を胸の高さで振りぬいた。

足の甲に当たる肉と骨のミンチになる手ごたえ、バウトウルフの頬に当たったいなほの足は、その勢いそのままバウトウルフの首を体から分断させた。

三日月のように抉れた顔が真横に吹き飛び、残った体が目標へと飛びかかる体勢のままいなほの横を抜け、地べたに沈む。

「……脆いなオイ」

トロールにぶちかます勢いで蹴ったため、あまりに柔らかい感触に、いなほは勢い余って僅かにバランスを崩した。

加減がもつと必要である。結果として討伐、つまり殺傷が目的であるため、加減する必要はないのだが、いなほの加減とはそういう意味での加減ではない。

いなほレベルの攻撃力を持つと、敵が脆い場合、自身の力の行き場が失われ、蹴った後のようにバランスを崩す時がある。些細なバランスの変化に見えるが、実際は持てあましたエネルギーを分散させるために、攻撃後に精密な技術が使われており、もし間違えれば、いなほは自身の力に振り回され転倒しただろう。

とはいえ勢い余っても、意識すれば体を崩すことはなくなるほどの技量をいなほは持っているため、本来なら手加減は必要ないが、そういったことに気をさくよりかは、手加減することを意識した方が純粹に戦いを楽しめるため、いなほは敵に見合った手加減を常に心がけている。

「ガウツ！」

そうこうしている間に、再びバウトウルフが草木を掻き分けて迫ってきた。

近くにいたガントの側面目がけての奇襲。しかしガントは余裕を持って抜刀していた両手剣を、上段からバウトウルフ目がけて振りおろした。

斬。大型犬の大きさを持つバウトウルフが脳天から左右に泣き分かれます。絶命の瞬間すらわからなかつただらう見事な一撃を見舞ったガントは、油断することなく剣を構え直して周囲を警戒する。

「『戦いの力をこの身に』」

キースが自身に強化の魔法をかけた。村も近いこの森林では炎の魔法は使えない。杖を両手で構え、近接戦闘の構え。そして三匹目のバウトウルフを杖の範囲に入つたと同時に叩き落とし、流れるようにその首に杖を落として首をへし折つた。

どうだとも言わんばかりにキースはいなほの方を見る。だがいなほは次の獲物の襲撃に集中しているのか、キースのことなど眼中になかつた。

その態度がキースには自分を舐めているようにしか見えなかつた。奥歯を噛みしめて、怒りの形相でいなほの背中を睨む。ふざけるな、もうつまらない等と言わせてたまるか・

「チツ……だつたら認めさせるまでやってやる！」

キースはいなほに背を向けて一人で走り出した。背中にガントの制止の声がかかるが、自分をつまらないと言つたあの男の鼻を明かすために、キースは一人でバウトウルフを殲滅しようと決意したから止まらない。

こんな奴ら俺一人で全員片付けて、アンタの出番をなくしてやる。一瞬だけキースは背後のいなほを見てから、振り切るように前を向いた。

「ガオウ！」

「二匹目え！」

進行方向から現れたバウトウルフの口に杖の先を突き刺す。そして強化の魔法で光る体から、さらに黄色の魔力が溢れだし、キースの杖に集まる。

「『一振りの刃』！」

キースの魔力が言霊に乗り、杖の魔力が乗せられた言語の力の通り、先端より銀色に輝く刃を展開した。

喉から尻まで串刺しにされたバウトウルフは僅かに震えた後に動かなくなる。強化された肉体で、キースは刺さったままの死骸を振りで抜き去った。自身の血の池に沈み、弾ける水の音と共に血の飛沫がキースの足元を濡らす。

まだまだ。まだ足りない。水に飢えた獣のように血を欲して、キースの目がぎらぎらと妖しく光った。

殲滅までまだ終わらない。赤をまぶした刃を構え、続いて迫るは三匹一斉。前方から口を開いて突撃してくるバウトウルフに、キースの強化された体は容易く反応して見せた。

「シッ！」

滑り込むように馬鹿の一つ覚えのように飛びかかるウルフ達の下に潜り込み、その柔らかかそうな腹に刃を走らせる。瞬きの交差。標的を失くした魔獣の体は、着地と同時に切り裂かれた腹から重力のままに内臓を一気に落とす。三匹の魔犬の腹から流れるグロテスクな臓器と血により新たな血だまりが完成する。

キースはその様を見ることなく、ただひたすら前を見て駆け出した。早鐘を打つ心臓の赴くままに、迫る脅威を切っては捨て切っては捨て去り、鮮血のロードをひた走る。

どうだ！ どうだ！ これが俺だ。これが学年でもトップクラスの実力を誇る俺の力だ！

誇示するようにキースは血路を描いていく。これが己だという証明の血の絵画。それはいなほといういけすかない男に知らしめるための血の生贄。

だがしかし、キースの狂気的な前進はその直後終わりを告げた。



第二十一話【ヤンキーと討伐作戦】（後書き）

今回は女性組。ついにタイトルからヤンキーの文字が消えるので、  
そういう意味でも色々と分岐点。

## 第二十二話【氷結女の、ドキドキ魔獣狩り講座】

アイリスとネムネのコンビの討伐は、男性組とは違いとても穏やかな物であった。

森の中を戦闘態勢に入りながらではあるが、まるで散策しているかのように二人は談笑しながら進んでいる。

「懐かしいものだ。私も君のように初めての担当教師のいない依頼は緊張したよ」

余裕のあるアイリスと違い、いつ襲われるか不安げに辺りを見渡すネムネを見て、懐かしむように目を細めてアイリスはそんなことを言った。

「アイリスさんがデスカ？」

あり得ないとばかりに目をまん丸にして驚きを表すネムネに頷き一つを返す。

「ああ。特に私の場合は、嫌味な話になるかもしれないが、その、周囲から期待されていてね。他の学生とも組まず、ベテランの冒険者の同伴もなく一人でゴブリン討伐に出かけたものだ」

あの時は本当に怖かったと、その時の心境を正確に伝えるために身振り手振りで当時のことを説明するアイリス。

依頼を受ける前は、キースのように自身のランクを過信し、いざ現場に向かったら方向が分からなくなって迷子になっただ、戦闘のとき疲弊していてゴブリンの群れから必死に逃げだした等、時に笑

い、時に恥ずかしそうにアイリスは語る。

「……私、もつとアイリスさんは最初から何でもできる人なんだって思ってたデス」

「そうでもないさ。それに今となつてはあの一人で赴いた依頼は良い経験になったと思う。あの頃の私は一年目にして既にGランクでね、迷宮でも敵はいなかったから自惚れていた。もしあそこで挫折を味わっていなかったら、私は今の自分より遥かに弱い人間になっていただろう」

仮定の話だが、実際最初の依頼で大ポカしなかったら、アイリスはFランクという領域には到達できず、精々がG+にいったかどうかといった所だっただろう。

アイリスの持論だが、人間はどん底に一度落とされなければならぬ。でなければ今いる場所に安寧し、気付かぬうちにずるずると墮落してしまうのだ。

「だからネムネ。これから出てくるウルフは君一人で討伐してもらおう」

「ハイ！ つてええ！？」

再びの驚愕は先程よりも大きかった。まさかの一人討伐に一層緊張の色を濃くするネムネに、「安心しろ。なるべく一対一になるようサポートはするさ」と慰めるアイリスだが、ネムネ的には結局戦うしかないのには変わらないので、なんとも微妙な表情になってしまう。

そして決意もつかぬままに、バウトウルフが二人を警戒するように低く唸りながら現れた。数は二。「右は任せろ」とアイリスは言

うが早く、バウトウルフ目がけて走り出した。

応じてバウトウルフも向かってくる。言葉の通り、一匹はアイリスのほうに行き、もう一匹はネムネ目がけて駆けてきた。

「たたたた『戦いの力をこの身に』い！」

慌てて詠唱。光が体を包むのと同時にバウトウルフが口を大きく広げてネムネの顔めがけて飛んだ。

「そいつの顎は子どもの首を容易くへし折るぞ！」

「ひいいいん！」

アドバイスというか脅しに近いアイリスの助言に涙目になりながら、ネムネはガントレットから突出した刃を交差させてバウトウルフの噛みつきを防いだ。

がちりと刃に噛みつく魔獣の唾液が飛び散り、ネムネの顔にかかる。怖すぎる！泣きそうになりながら、ネムネは力任せにバウトウルフを振り払った。

だがその程度では当然ダメージにもなりはしない。空中で器用にバランスを立て直したバウトウルフは、着地と同時に再び四肢に力を込めて飛びかかる準備をする。

「飛んだ瞬間に屈んで刃を頭上に突き出せ！」

既にウルフを斬殺したアイリスが助言を送る。ネムネは言われた通りバウトウルフが鋭利な牙のひしめく口内を見せながら飛んだ瞬間にしゃがみこんだ。

バウトウルフは基本的に敵の首を狙って飛びかかる。その習性を利用して、その俊敏さを苦手とするものは、ある程度の憶測を立て

て攻撃するのがウルフの攻略方法である。時間がないため説明出来なかったが、ネムネはアイリスの言葉の通りの動きを律儀にしてみせた。

頭上を過ぎ行く刹那、ネムネが見上げる先で腹を見せて頭上を過ぎようとするウルフ。ネムネは強化された反射神経でそれを見切ると、その腹に三つ又を突き立てた。

腹を切り裂き、骨にぶつかり刃が止まる。

「やった！」

ネムネが初めての討伐に歓喜の声を上げた瞬間、頭上で串刺しにされたウルフの切り口から、盛大に血が流れて真下のネムネに降り注いだ。

「によわあああああ！」

絶叫。そう、絶叫である。花も恥じらう乙女目がけて落ちてくる魔獣の鮮血。咄嗟に目は瞑り視覚はカバーしたが、制服と頭には見事な返り血が付着してしまった。

「うえ……」

むせ返る血の臭いを嗅ぎながら、ネムネは口にも入った血を吐きだした。

名づけるなら鮮血ピンクというところか。場所が場所ならホラーになりそうな姿に、アイリスは苦笑した。

「ま、まあ無事倒せたから良かったではないか」

「うええええん！ もうしゃがみぶツ刺しなんてやらないデスよお



「まさか、クイーンバウトだともいうのか!？」

木々の奥の奥。アイリスですら苦戦を強いられるだろう強敵は、既に標的に狙いを定めていた。

第二十二話【氷結女の、ドキドキ魔獣狩り講座】（後書き）

次回、ヒヤッハ―

## 第二十三話【ヤンキーふるどらいぶ】

「ハア！」

新たなウルフを両断し、これで十匹を殺してみせたキースはようやく一息ついた。

肩は上下し、呼吸は荒い。本来ならまだ疲弊するような数ではないのだが、勢いのままにペースを考えず戦ったため、キースは思いの外疲労していた。ローブの下で汗が蒸れてもどかしい。額にも幾つもの汗が滴となって今にも顎を伝い落ちそうだ。

キースは不快感ごと汗を拭い去り、再びの全身を決意し前を向き、溢れた汗すら一瞬で引くくらいの強烈な敵意を背中に感じて、呼吸を停止させた。

「グルルルルル……」

獣の鳴らす喉の音。剥き出しの敵意が呼気とともに聞こえそうなくらい、その存在の放つ威圧感は強大だった。

それでもキースはおそろおそろ後ろを振り向いた。今にも崩れそうな足を回し、気付けば落としそうな杖を持ち直し、そしてキースは振り向いて、自分の死を理解した。

「あ……んだ……これ」

キースの後ろに居たのは巨大な狼だった。

白銀の毛並みはまるでそこだけは別世界のように妖しい光を放っている。体軀は四足歩行でありながらキースよりもさらに頭一つ分

巨大だ。全長はトロールすら優に凌ぐだろう。

眼光は鋭いというレベルではない物理的な圧力を持ってキースの体を刺しぬき呼吸を許さない。汗などどつくの昔に引いていた。おそらくこの魔獣を見てからまだ一秒も経っていないだろうというのに、一時間は睨みあったかのように遅くなった時間。

「グルあ……」

キース等一飲みできそうな口を広げ、その牙を剥きだす。零れる熱気がキースの肌を焼いた。錯覚だ。だがそう思うほど熱い吐息。確実に明確な死神だった。それは異次元の敵性存在。バウトウルフを生み出す深淵の魔。

クイーンバウト。それがキースの目の前にいる化け物の名前だった。

「あ、ひ、へえあ……」

F。それがこのクイーンの保有ランクだ。この異端と会うまでのキースなら、たかが一つ二つランクが上なだけで、学年トップ数人で戦えば楽勝だろうとタカをくくっただろうが、そんな考えが浅はかだったと思い知らされる。

甘く見ていたという問題ではない。ここに来てキースはようやくランクを持つ『危険指数』の意味を理解した。授業ではワンランク上の敵ならば下位ランクがチームで赴けば倒すことができると思っていたが、あんなのは嘘だ。

「あり、あああ、ありえ、ありえな、ない……」

動くことが出来ないまま、舌をかむのも構わず顎が震え歯と歯が恐怖の音色を鳴らした。

H＋とF－、たがが一つとちよつと程度のランク差が地平線よりも遙か遠く感じる。人族を脅かす魔獣は、そんなキースにゆっくりと歩み寄り、ただ死を待つしかない少年に口を広げ

「うるああああああ！！！」

刹那、大気が破裂した。

キースを縛っていた金縛りが唐突に響いた雄たけびに解ける。クインもその声に驚いたのか、自身の後ろで発生した声の方に体を向けた。

木々の隙間の向こう側、獣の如き叫びを上げた男が爛々と瞳を輝かせてクインを見据えている。

その瞳を見て再びキースの体が恐怖に凍った。何だアレは。『嬉しそうに殺気をまき散らす』人間等見たことがない。アレもまた異次元の化け物、人の皮を被った殺戮兵器。

「ケ、ケケ、カカッ！ テメエ！ クハッ！ テメエ！ ギヤハッ！ 来たあ！ テメエ！ テメエだあ！」

蛇蝎のごとく気味の悪い笑い声を張り上げて、早森いなほがそこにいる。

そいつの気配を感じた瞬間の気持ちはどう表すべきか。まるで一目惚れに似た感覚だった。トロールなんかよりも圧倒的に格上の化け物。あれこそそつだ。気配で極上、ならば見た時の絶頂は筆舌出さない。

いなほは興奮のあまり熱くなった体を冷ますために、脱ぐのももどかしかったのか、躊躇いなくタンクトップを破り捨てた。短パン一丁裸足裸拳。見事に割れた腹筋の中心に空気を取り込み、背筋を盛り上げる。

もう口からは唾液が溢れて止まらなかった。今すぐになでも殺したい。ただその感情だけがいなほの体を埋め尽くす。

「グガアアアアアア！」

クインもまたいなほの殺気に呼応して、全身から闘気を解放する。後ろに居たキースが絶望のあまり股間を濡らして膝をついた。化け物の闘技場にたった一人放り込まれた裸の少年の心境だった。最早嵐に似た闘争が過ぎ去る以外、キースが生き残る道はない。

「ハッ！」

「グルオオオオオ！」

だがそんな路傍の石に二体の化け物が気をかけることはない。互いが互いのみを恋焦がれ憎しみ合う、愛憎のみの混沌をぶつけながら、磁石のように唐突に、木々をへし折り激突した。

「うるあああ！」

両者共に、射程距離内の絶殺確信。いなほがまずクイン目がけて右の拳を放った。手加減も何もない、トロールの腹に穴をこじ開けた必殺拳は、しかし巨体に見合わぬクインの速度を捉えきれずに空を切った。

暴風を巻き起こし、拳の先に合った木が風圧だけで斜めに傾いた。当たれば殺戮を約束する拳は標的の影すら追えない。

同時、拳を避けながら懐に入り込んだクインが口を開いて、全力を放ち隙だらけのいなほの腹に噛みつかんと駆けた。

「こ、の……ッ!?」

いなほが懐に入り込んできたクイーンに悪態をつき、牙から逃れるように身を捻じた。だがそれでもクイーンの速度からは逃れられず、クイーンの鼻先がいなほの腹に触れたと同時に、いなほの体がくの字になる。

瞬間、大地が爆発して周りの木々が根こそぎ吹き飛んだ。風圧が爆弾のように破裂したかのようだった。暴風にあおられたキースが確認出来たのはそこからだ。爆発の以前、彼には衝突の瞬間すら見えない。ただ突然風が凪いだと思ったたら二体の姿がなくなり、十メートル先の大地が爆発したとしか分からなかった。

だがキースの理解など置いていき、戦いは加速していく。体重と速度で弾き飛ばされたいいなほは、巨大な大木を一本二本三本四本、五本を砕いてようやく両足で大地を踏み締めブレーキ。

威圧感満載の眼光を真つ直ぐ前に、クイーンを見据えて鼻を鳴らす。

「ハッ！ トラックよか軽いぞテメエ！」

まるでビクともしていない。鉄をも凌ぐ筋肉が鼻つ面が掠った程度で敗北するはずはないという強烈な自負。とはいえ自分を容易く吹き飛ばしたクイーンに怒りを感じぬわけではない。周りの木々が木の葉を散らす程の殺気をまき散らし、一足でクイーンの目の前に躍り出た。

「マシンガンって知ってるか獣お！」

いなほの巨体すら飲み込めるのではと思うほど巨大な口を開けて待ち構えるクイーンの目の前、笑いながら両拳を腰に構え、飛びかからんとするクイーンに先じて、拳と言う弾丸を連続で放った。

「うおりゃあ！」

右と左。拳で象る筋肉の弾幕結界。常人にはまさしく壁にしか思えぬジャブの嵐を前に、クイーンはその異常な動体視力を持って挑む。

一二三四五も避け六を掻い潜り七の拳を額で受けながら八の拳で顎を弾かれそれでもクイーンは前へと赴く。

「ッ!？」

「グルアアアアアッ!」

再び先と同じ構図。肉の壁が、獣の速度に敗北する。

大きく開かれる口がいなほのわき腹もろとも閉じ込める。鮮血がクイーンの牙を濡らした。鋼鉄を容易に引き裂くクイーンの牙は、噛まれた瞬間その部位を諦めると言われるくらい鋭く、そして強固なものだ。

そんな代物が今、クイーンの突進の力を持っていなほを挟んだのだ。絶命は確実、致命は必死。だがいなほの腹に噛みついたクイーンは、追い打ちとばかりにその勢いを落とさず、眼前の木々にいなほを叩きつけてへし折りながら前進する。その間にもいなほの下腹部では出血が始まっていた。だがクイーンの様子は優れない。

「じゃれ合いてえかワンコロお！」

あり得ぬ声上がる。千切られる未来しか残されていないはずの男の快活な叫び声。

トロールの腹すら食いちぎる異常な顎に挟まれながら、いなほは未だ千切れていないどころか浮かんだ笑みを絶やしてはいなかった。背中で木をへし折り地獄めぐりドライブをしながら、いなほの余裕

は全く持つて崩れない。否、この男ならば余裕がなくても笑つて見せただろう。

異常は腹で起きていた。脇腹を挟むように食われたいなほの腹周りの筋肉は、鉄の鎧も食いちぎるクイーンの牙を通さなかったのだ。流血は皮膚が切られたことによるものでしかない。どんなにクイーンが力を込めても、いなほの筋肉はそれ以上の力を持つて牙の侵入を許さなかった。

叩きつけるのは無駄と思つたクイーンは立ち止まり、四肢を地面に踏ん張らせてさらなる力でいなほの筋肉を食い破らんと滾る。

全身の力を持つて行われた噛みつきが遂にいなほの筋肉へと食いこんだ。痛みに顔をしかめるいなほ、流血が勢いを増す。自慢しな犬っころ。いなほが吠えた。

「俺の筋肉裂いたのあ！ テメエが最初だあ！」

弾丸も寄せ付けなかった己の自慢を破られ、いなほの顔が怒りのあまり鬼のように豹変する。同時、自由な左手でクイーンの下顎を叩き上げた。そのせいでさらに牙が食い込むが、体勢は悪くても人族の限界を極めただろう一撃にクイーンの拘束が緩む。

その隙を逃さずいなほは女王のアギトを抜け出した。女王の顔を両手で叩き、反動で虚空に飛び出すと、ただ逃げるだけではなく、中空で右足を百度近い角度をつけて振り上げる。

天に伸びゆく鬼の一撃。絶頂を極めた男の全霊が眼下の敵を捕捉した。

「ツアツ！」

「グガアアアアアツツ！」

天より強襲する断頭台を見てもクイーンの覇気はまるで衰えない。

むしろかかってこいとばかりに吠えたてると、再びその口を広げた。いなほの右足が神速の勢いでクイーン前へと振るわれる。目指す先は女王の唇。大口広げて待ち構えるクイーンに盛大なご馳走だ。最高の飯をくれてやるとばかりの得意顔。

「俺の蹴りい！ 食って腹壊せやあ！」

体を回転させてさらに加速させた右足の踵の軌跡を王の眼は逃さない。褐色の必殺を、白銀の必殺が絶妙のタイミングで噛み受けた。牙に挟まれた踵が牙との摩擦で火花を散らす。狼による真剣踵取りによつて防がれたいなほの踵。

再び腹を噛まれていたときと同じ状況。踵を搦り潰さん破壊の顎がいなほの踵の骨をミシミシと圧迫する。

だが必殺を防がれたというのに、いなほの鬨気に衰えはなし。むしろそれを待っていたとばかりに喜悦を吠えた。

「ぶあかがあ！ 男一貫二足歩行お！」

伸びあがる左の踵。知恵のなき獣にもそれが意味するところは即座にわかる。

つまりはそう、端から二段構えの踵落としの双連撃。

「足はもう一本あるだろうがあ！」

しかし気付いた時にはいなほの踵は空気の断末魔と共に大地へと落ちていた。そして着弾点には狼の女王の鼻っ面。

鼻の先に炸裂する筋肉爆弾。肉が潰れ、優雅な曲線を描いていた女王の鼻が大きく凹み、先から血が噴き出していなほの上半身に浴びせられた。

「ヒヤハッ！」

放さぬと誓ったはずの顎が、筋肉の暴拳に屈して力が抜け再びいなほを放す。素足の踵には牙による出血が零れる。足首に生まれてこの方感じたことのない痛みが発生。

だがいなほはあえて右足を四股を踏むように上げると、大地を震わす勢いで叩きつけた。

「へっ、俺あまだピンピンだぞ!？」

ただのやせ我慢に過ぎない。しかし気合いこそ喧嘩の勝敗を決めるのならば、ここで痛みに呻くなどという醜態は晒さぬ。浮かぶ脂汗も沸騰したような心臓の高鳴りも燃えるようなわき腹と踵の痛みも、全て総身を支配する歓喜の前には意味をなさぬ。

クイーンはいなほの絶技を受けたというのに、四肢をぐらつかせながらもまだ立っていた。眼には萎えぬ殺気が一つ。

まだやらせてくれんのか。いなほは嬉しさに失禁してしまいそうになった。まだ、もっとこれを続けることが出来る奇跡。

「そうだ！ もっともっと！ まだようやく俺達はスタートだろ！  
？ 俺と！ お前と！ 絶頂でえ！」

左の拳を天高く突き上げる。勝利を謳う鋼の信念を掲げて、いなほの口上はまだ終わらない。

「こっから急降下だ！ 一緒にぶちまけて！ ハイのまんま飛び降りようぜえ！」

死へと向かう闘争というダイビング。より早く、より強く、勢いを落とした方が敗北必死のデスレース。その始まりこそこの刹那。

「グルアアアアア！」

「オオオオオオオ！」

化け物の地獄は終わらない。

醜悪にゆがんだ狼が大気を震わして毛を逆立て突撃体勢。

凶悪にゆがむ野獣が左拳を腰の横に構え右手を前に不動の構え。

スタートでありながらクライマックス。全力で落ちるからこそ、その一撃こそ最初で最後に違いない。互いの距離はいなほが離れて五メートル。どちらも一歩で埋めることの可能な間隔しか二人の間にはない。

直後、吠えながらクイーンが突撃した。そこには呼吸を計る、機を狙うといった人間の駆け引き等存在しない。

ひたすら赴くままに。

四肢の駆けるままに。

牙が欲するがままに。

ただ駆け、飛び、噛みつき、食らう。それだけが獣の原初。本能のありし姿だから。

故にその突撃は完璧なタイミングだった。完全にいなほの裏を取った最速行動。不動であるがためにコンマのずれも許されないいなほからすれば確実に出遅れた形となる。

これこそ獣の強みだ。人の考える理合なぞ容易く飛び越えて本能のみで英知を蹂躪する。いなほが幼少のころから育み鍛えてきた武術を超える生物としての格の違い。人類の理性では届かない本能の領域。

だからこそ、理性ではなくいなほの内に眠る獣 本能 だけは反応してみせた。

クイーンが踏み抜いた大地がめくれ上がり、舞う埃と土の結晶すら知覚するほどの極限集中。一秒を百秒に、百秒を千秒に、そして零

秒こそを無限の刹那へ変貌させて、止まった時間をいなほが動いた。腰だめの左手がやけに熱い。熱湯に使っているかのような錯覚。思考だけが光速を突き抜けたようで、自分の動きも遅く感じる。

だが止まっただけの世界でいなほは動いていた。ゆっくりではあるが、熱血で濡れた体は、加速する思考にすらついていこうとしている。

いや、思考を無視して体は動いていた。鍛えた体は出遅れた主の思考を嘲笑い、理合に沿いながらも理合を超えた、最適最高最強最速の動きを果たそうとしている。そう、事実は逆だった。筋肉が思考に追いつこうとしたのではなく、いなほの筋肉に思考が追いつくろうと加速しただけなのだ。

激鉄は右の爪先だ。踏み込みを行うことで拳という弾丸を突き出す火薬となる。

そして叩きつけられた激鉄は足元から全身を走り抜け、引き絞った弓矢のように限界まで溜めた拳に到達する。脳髓がスパーク、脳内麻薬が頭を丸ごと埋め尽くす。絶頂であり底辺。瞬間のカタルシスを今こそ爆発させる。

「！」

声は出なかった。零コンマの攻防に音はなく、今静かに女王の潰れた鼻に、空前絶後の筋肉の暴虐が、いなほ渾身のとっておきは直撃した。

「おおおおおおあああ！」

拳に感じるクイーンの圧力に体中に血管が浮かび上がる。油断すれば吹き飛ばされそうな突撃の衝撃を左手一本で捉え、受け止め、気合いと根性で打ち抜く。解放の瞬間、全身を雷の如く突き抜ける快感に、いなほは静かに笑った。

まるでピンポン玉のようにいなほの拳に吹っ飛ばされたクイーンが、その巨体を十メートル以上木をなぎ倒しながら吹き飛ばす。筋肉の蹂躞、つまりは物理法則の悲鳴。それらを一身に受け止めたクイーンは、それきり起き上がることはなくなった。

「ハッ……！ ハッ……！」

肩で息をしながら、等速に戻った世界で、いなほは確かな充実感を感じていた。

振り絞った。余力は『まだまだある』が、ここまで振り絞ったのはいなほの戦いの歴史で初めてのことだろう。

本当に戦った。戦いきった。まるで憑き物が落ちたかのような晴れ晴れとした表情でいなほは空を見上げ、

「俺、最っ強」

その拳は、天高く突き上げられたのだった。

第二十三話【ヤンキーふるどらいぶ】（後書き）

次回、つかの間の平穩へ

## 第二十四話【自覚ヤンキーと覚醒少年と現場検証と】

闘争の在り方を、少年は目撃した。

それはキースが想像したこともないレベルの戦いであった。時間にして五分かそこらの僅かな攻防、しかしまるで一日を濃縮したかのようにその戦いの密度は濃かった。

見えない機動。一撃ごとに地形が変わる破壊の嵐。そしてキースには結局一つもわからなかったが、腰の抜けた自分を助け戦いを共に見守ったガントによると、最後の激突は、およそ魔法を使わない素のままの人族が放てる最上級の一撃だったらしい。らしいというのも、ガントもそのほとんどを見極めることが出来なかったからだ。

「あの戦いを見てよかったなキース。アレは、命を晒すだけの価値がある戦いだった」

お前はきつと強くなるよとガントはキースに言い残すと、その肩を叩いてから激闘に幕を閉じて余韻に浸るいなほに向かって歩き出した。

キースもまた戦いの余韻に浸っていた。濡れた股間の気持ち悪さも気にならない。見えなかつたけれど感じる事が出来た、才能に満ち溢れた者のみかたどり着く究極の死闘をだ。

強くなれる。そうガントは言ってくれた。キースは自分の両手を広げて見た。鍛錬で厚くなった掌には治りかけのタコなどがいくつもある。人知れず鍛錬していたことはキースの密かな自信だったが、この程度の鍛錬で自信とは笑ってしまう。今のキースにはこの掌は鍛錬を怠けた結果の情けないものでしかなかった。

あの領域にいつか自分も届くのだろうか。いや、無理なのはわかっ  
つてはいる。いなほの究極は、極限の才能を更に極限まで鍛えたか

らこそ手に入れることが出来た代物だ。才能があるとはいえ、所詮は人より僅かに優れているといった程度。いなほにとどくことは、おそらくあのアイリスですら難しいだろう。なら、自分には到底無理なことだ。

でも、あの男ならそんなことは関係ないと言っただろう。無茶も無謀も鼻で笑い、クイーンを打倒したように笑ったまま苦難の道を走るはずだ。

「……確かに、つまんなかったな。俺」

クイーンを倒した今でもその底を見せない男に比べて、自分のなんと底の浅いことか。性格は最悪で、口が悪くて、見た目も酷い。だというのに、あの男は底が深かった。単純な腕力の底の深さだけで、いなほはキースが認てしまうほどの強者になった。

あれは男が誰でも望む強さだ。人間よりも強い生物を打倒する強さ。真つ直ぐで単純で愚直で丈夫な馬鹿の一念。筋肉と言う名の栄光。腕力のもたらす勝者の貫録。

だから、少しでもその頂に近づこうと、本気の本気、心の奥底からキースは思った。

「畜生。決めた。必ずアンタを超えてやるよ……ハヤモリ！」

その瞳には自惚れはない。ひたむきに力を欲する馬鹿の光がただ一つだけ灯っていた。

駆け足で二人の元に合流する。いなほは体から蒸気を上げながら興奮冷めぬ様子、ガントは他の魔獣の警戒をしていた。

「……しかし随分と派手にやったな」

ガントが辺りを見渡し、咳く。ほぼ周囲一キロの森林は破壊され、尽くされている。これが高位ランク同士の戦い、才能がなければ至れぬ領域。

ガントは森林に刻まれた破壊の爪後を見た後にいなほに視線を戻した。正直に言って羨ましい気持ちはある。デカい体以外に剣の才能も魔法の才能もまるでなく、ただ愚直に自身の限界まで鍛えてよ、うやくH-の能力しかない自分と、才能に恵まれ、類を見ない身体能力と達人以上の技量を持ついなほ。

どうしても比べてしまう。だが嫉妬は恥だ。それにガントはいなほの肉体がただの才能で培われたものではないことも何となく察していた。ひたすらに自分の肉体を鍛え上げた果てに待つ極み。

強いわけだ。嫉妬も超えて、素直に認めてしまう。

「……いなほ、大丈夫だとは思いますがクイーンの生死を確認する。着いてきてくれ」

「おう」

感傷を振り払い、ガントはいなほを連れて横たわるクイーンの亡骸に近づいた。遅れてキースが付いていく。

「ぬっ」

「いい……！」

ただの死骸だというのに、側に来たガントとキースは強烈な圧力に唸り声を上げた。

既に息を止め動かない女王の末路は悲惨だ。顔が完全に潰れ原形はわからず、牙もその周囲だけでなく、吹き飛んできた道にも破片が幾つも転がっている。突撃の力も加わったいなほの拳がカウンタ

「でその顔に入ったためだ。むしろ顔以外の胴体などが原形をとどめているだけ奇跡だろう。トロールなら破裂した風船のようになっ  
ていたはずだ。」

二人がその威容に気圧されてる間に、いなほは一步クイーンの前に歩み出て両手を合わせ黙祷した。街の喧嘩では味わえなかった本物の闘争を味あわせてくれたライバルに対しての敬意。痛むわき腹と踵、熱のこもった拳は誇りだ。

「テメエは最高だったぜ」

目を閉じれば鮮明に甦る。信じられぬ速さと力に、自分もまた相応の力で応えた。

だが、同時にいなほは少しばかりの物足りなさも覚えていた。本当にこの敵は強かった。しかし自分の底を曝け出すまでにはいかなかったのも事実だ。手を抜いたわけではない。確かにいなほは全力を出したが、全力が切れるまで戦えなかった。今だってまたクイーンと戦ったとしても、いなほは充分に戦って、勝つことが出来る。

「……」

ふといなほは血濡れた自分の両手を開いた。この世界に来てから、自分は良く血を浴びているような気がする、いや、事実そうなのだろう。元の世界では感じる事がなかった闘争の快感。その結果が殺戮ならば、いなほは根っからの殺戮者なのか。

「そっか、俺あ……」

自分のことを何度も糞つたれだと自負していたいなほだが、いざ殺戮を歓喜するような、人として最低な糞つたれだということを理解した途端、今更になっていなほは虚しくなってきた。

「いなほ！ ガントとキースは！？」

暫くすると、アイリスが駆け足で合流を果たした。全身には既に強化を掛けてある。手に持つ剣は一見ではわからないが冷気を発しており、切りつけた相手を凍らせる魔法剣に変貌しており、完全な戦闘態勢だ。

だが直ぐそこで倒れているクイーンの亡骸を見て、アイリスはどつやら戦いが終わったことを悟った。血濡れのいなほが気にはなるが、卑屈に笑う姿を見る限り、急をようするダメージを受けたということはないだろう。

ホッと胸を撫で下ろすアイリスの前にガントが立った。

「とりあえず他のウルフの気配はない。村のほうは？」

「それも大丈夫だ。ネムネを村に帰して説明するように伝えた。今頃鉱山のほうへ避難しているだろう。あそこなら魔除けもあるし道も入り組んでいるが彼らには庭のようなものだ。天然の要塞になるクイーンを討伐したのだ、当面の脅威は去ったとみていいだろう」

しかし、なるべく急いで駆け付けたが、すでに戦いが終わっているとは思わなかった。盛大に森の中で響いていた怒声と爆音が途端に鳴りを潜めたことからもしかやとは思ったが。アイリスはいなほを見てため息を吐きだす。本当にこの男は怪物だ。

「折角だから私も観戦したかったよ」

「うむ。あの戦いは一見の価値はあった」

そう言うってからガントは「見てみる」視線をキースのほうに移し

た。アイリスもキースの方を見る。

いなほの後ろで何か言いたげにしている姿は、最初のころとあまり変わらないように見える。だが、その表情は何処か迷いをふっ切ったように晴れ晴れとしていた。  
なるほどとアイリスは得心した。

「確かに。随分いい顔になったではないか。ふ、軟派と思っていたが、彼もまた男子であったということだな」

「いささか暴力的であるがな」

「軟派な駄弱よりはマシだよ。無論、野獣に憧れる感情など私にはわからないがね」

だが、強さの対象としてこれほどのものはないだろうともアイリスは思う。刻まれた戦いの傷跡が、いなほという男の強さを如実に示している。戦後のそれを見ただけで、アイリスも改めていなほの強さを再認識したのだ。間近で見たキースとガントの受けた衝撃は計り知れないだろう。

そんな二人を他所に、いよいよキースは半ば呆然としたいなほに声をかける決意を固めた。何を話すかも決めていない、それでも今話さないといけない気がキースにはしたのだ。

「いなほ……いや、ハヤモリ！」

「あ？ おう、なんだよ」

覇気のないいなほの様子にキースは僅かに疑問を感じた。流石にクインと戦って疲労が出たのか。いやこの男に限って疲労が重なった程度で不抜けた態度にはなるまい。

「……アンタ、一体どうしたんだよ。やる気のない顔しちゃってさ」  
「テメエには関係ねえよ」

突き放すようないなほの態度。だがキースはそれが無性に腹に来た。違う、と。そのやり方は違うんだと。

アンタはもつと覇気に満ちた人間のはずだ。そんな顔、アンタには絶対に似合わない。

「何だよ。アンタもしかしてビビってるわけ？ そりゃ疲れた今なら俺に簡単に負けるかもしれないしな」

キースの挑発は見当違いの意味不明なものだ。せせら笑い、あからさまな挑発をする。

僅かにいなほの肩が揺れた。だがそれは挑発に乗ったからではない。ただキースの言葉にあった『ビビってる』というのが頭に木霊したのだ。

「ビビってる？ この俺が？」

「ああそうだよ！ んな抜けた顔してりゃ拍子抜けちまうからな！」

「俺が、この俺が……」

キースの言葉はもういなほには届かない。なんてことはない。殺戮を歓喜することへの違和感。それはとどのつまり、自分の残虐性にビビっている自分に他ならなかった。

「俺が、ビビるだど？」

誰でもない自分が、自分のたかが一つの側面を恐怖している。そう思った瞬間、いなほの中にあつた空虚な何かが全て怒りに染められた。

ふざけている。誰にもビビらない自分が、一番身近な自分にビビっている？ 笑えない。そんな恥さらし、笑えもしないではないか！

「糞が。俺は俺だろ。下らねえこと考えてるんじゃねえ」

そう呟いてから、いなほはキースを無視してクイーンに再び向き直った。

「悪い。後ちよつとでテメエまで落とすところだった」

戦いを楽しむことを怖がることは、つまり応じて、そして死んでいった者への冒涇でしかない。共に最高の時間を共有した友を、いなほは己で汚すところだった。

「改めるぜ。テメエは最高だった」

再び告げる。その目は今度こそクイーンをしっかりと見つめ、その死を受け入れていた。

キースは自分が無視されたことを怒るでもなく、戦いきった二体の交わす神聖な光景に目を奪われていた。同時に、いつかここに自分もたどり着きたいという決意も固める。

「ところでこのクイーン、随分派手に殴つたものだな。そこも大きく腫れているぞ」

そこで声をかけてきたのは、遠目からクイーンの体を眺めていた

アイリスだ。

言いながら近づくと、白銀の毛で覆われた腹部を掻き分ける。固い毛の向こう、地肌にはいなほが与えたものとは違う最近出来たのだろう青い痣が出来ていた。

「随分手痛いのを与えたようだな」

「……いや待て、俺が叩いたのは顔くらいだぜ」

何だと？ 予想外のいなほの返事にアイリスは眉を潜めた。

ならこの怪我は一体何だと言うのか。アイリスは応えを確認するため、冷気を未だ纏う剣を取り出し、クイーンの青痣にあてがいそのまま引き裂いた。

「おい！」

「いいから見てろ」

いなほの制止の言葉を黙らせて、アイリスは作業を続ける。傷口は冷気により凍りつき、出血を抑えていた。

アイリスは躊躇うことなく開いた切り口に手を突っ込むと、直接付近の骨を触った。

「……これは」

「どうした？」

ガントが聞いてくる。アイリスは深刻な表情で僅かに唸った。

「クイーンが折れている。いなほの言葉を信じるなら、別のだ

れかによってクイーンはその前に怪我をしていた可能性が高い」

「何？」

ガントが驚きに目を細めた。それはいなほとキースも同じだ。

先にクイーンに手傷を与えた者がいる。それが自分達と同じ冒険者なら問題はない。

「少なくとも、私が知る限りではクイーン討伐の依頼はなかった」

もし腕試しにクイーンと戦った者がいるとして、そんな実力者ならマルクで有名になっているだろう。いなほという例外もあるが、彼は今日初めてクイーン戦ったはずである。

「後考えられるのは、魔獣の縄張り争いだ。しかもクイーンに手傷を与えて、普段は来ないような村の付近にまで撤退させるほどの奴が相手となる……」

普通、クイーンクラスの魔獣になると、森の奥地にある物を食べている。何故なら森の奥には普段なら高級食材として並び立つものが多数生息しているからだ。故に高位ランク魔獣と人間の住処は上手く分けられていて、余程のことがない限り森の入り口付近などは現れない。

そして今回の一件は間違いなく余程の事態であろうことは、いなほでも推測することが出来た。

(さらに、いなほが戦ったというトロールの群れの件……偶然にしては出来すぎてる)

国土が違うとはいえ、この二つの事件に関連性がないと言い切

れない。何故なら今いなほ達のいるメルクル王国と、エリスの住んでいた村のあるアードナイは隣接する国で、そしてその二つを跨るように『沈黙の森』と呼ばれる巨大な森林があるのだ。

基本的にクイーンがいる所は、この沈黙の森の奥であり、キングバウトと呼ばれるE+ランクのさらなる上位固体の下で、バウトウルフの繁殖をしているとされている。そしてこのキングこそ沈黙の森の王であるとされており、長年森の奥で生活していると思われる。

「しかし手負いのクイーンを真正面から倒すとはな……普通、手負いの獣は短時間なら無傷のそれよりはるかに厄介なんだぞ？」

「へっ、尚更タイムンでぶっ潰してやれてよかったってものよ」

豪胆に踏ん返るいなほに、何度めになるかわからない溜息をアイリスは零す。初手から最高潮のテンションだったろうクイーンを真正面から倒す。改めていなほの戦闘力には驚かされるばかりだ。

だが今はその戦闘力に驚く暇はない。アイリスは深刻な面持ちで片手で顎を擦った。

「あまり考えたくないことだが……森の方で何かあったのかも知れないな」

「森というと、沈黙の森で？」

キースの問いに頷く。危険な戦いを乗り越えたばかりだということに、一同の間には不安な空気が重く押し掛かるのであった。

「何湿気たツラしてんだテメェら」

「……君はさつさと服を着ろ」

馬鹿なヤンキーは、除く。

**第二十四話【自覚ヤンキーと覚醒少年と現場検証と】（後書き）**

次回、インターバルその2

## 第二十五話【ヤンキー感謝祭】

「まさかこのようなことになってしまい、皆様には何と申し上げたよということやら」

深々と頭を下げるルドルフとエド。簡単な討伐のはずがこのようなことになって申し訳ない気持ちばかりだ。

「氣いすんな。俺らはこの通りピンピンしてんぜ」

そう快活にいなほは返した。傷の方は治癒の魔法を少しかけただけで塞がり、今では目立った傷の後もない。服のほうはガントのシヤツを一枚羽織っている。しかしクイーンを相手どり、結果として肉を裂かれるだけですんだのは滅茶苦茶と評するより他あるまい。怪我をしていたからと侮る者はいない。手負いの獣のもつ力は、むしろ通常の時よりも高い戦闘力を出す。短期間での戦闘力は、常時のクイーン的能力よりも優れていただろう。

それを僅かな時間で制圧することの意味。D+という実力の出鱈目を感じずにはいられない。

「ですがそうですねかと済ませるには、私も、村の皆も申し訳ないという気持ちになります。なのでささやかではありますが、本日は酒宴のほうを用意させていただきました」

エドはそう言うてから、こちらにと自宅のドアを開いた。

「おおー！」

いなほが歓声をあげた。大きなテーブルには所狭しと様々な料理が乗せられ、幾つもの酒瓶が周りを彩っている。見るが早く、いなほは軽いステップでテーブルの側に近付くと、躊躇いなく真ん中に置かれたドでかい肉を掴み口に突っ込んだ。

「なあ！？　ば、馬鹿いなほお！　す、すみません、すみません！　ああもうウチのギルドの者がなんという醜態を……」

泣きそうな顔で何度も頭を下げるアイリスに、エドとルドルフは楽しく遊ぶ子どもを見るような眼差しでいなほを見てから、ルドルフが謝るアイリスの肩を掴んだ。

「ホホ、エドも私も村の者も気にしませんよ。それに本日の主役は彼ですし」

「しかし……」

「ヒヤッハー！　オイテメエらもさっさとこっち来て酒注げえ！」

「君はちよっと黙っててくれないかな！？」

恒例と化したいなほとアイリスの漫才は置いておき、なし崩しに始まった酒宴に交わるため、ガント、キース、ネムネがそれぞれ席に着く。遅れてアイリス、エド、ルドルフも席に座った。

全員が目の前のグラスに金色に薄く輝く酒を注ぎ、代表としてアイリスが立ちあがった。

「えー。一部、い、ち、ぶ！　先に始めてはいますが……んんっ、トラブルのあった今回の討伐で、無事怪我もなく乗り切ったことと、エド殿とビツヒマン殿の手厚い歓迎を祝って……」

「うめえええええ！ 肉うめえええええ！」

「……乾杯！」

怒鳴りつけるように言いながら、アイリスがグラスを掲げた。他の人も乾杯と同時に行って、一人の例外を除き酒宴は始まる。

「むー、にしても私も見たかったデス。いなほさんとクイーンの間い」

グラスを傾けながら、唯一仲間外れとなってしまうたネムネがその不満を零した。

「ハッ、死体見ただけでビビってるお前みたいなのは、あれ見ただけで漏らしちまうだろうよ」

そう何故か得意げに語るのはキース。全力で漏らした自分のことは棚上げだ。

頬を膨らませネムネが不満そうにキースを睨む。とはいっても、運ばれたクイーンの死体の威圧だけで膝が抜けそうになった自分が戦いを見たら、もしかしたらはしたないことになるかもしれないなかった。

「でもでも！ やっぱし見たかったデス！」

「ネムネ、今回はたまたまいなほが居たから何とかだったが、実際手負いのクイーンが相手となれば、大抵の人では戦いにもならない。むしろ出会わなかった奇跡に感謝することだ」

尚も食い下がるネムネをアイリスはそう嗜めた。ガントも同意なのか頷く。今回の場合は、結果的になんとかなっただけで、キースは死んでもおかしくなかった。

身の丈に合わないことを望む者は破滅する。誰にもどん底の体験は必要だが、何も自ら飛び込むこともない。

「君は君のペースで経験を積みればいい」

「はあい……」

頂垂れながらも、アイリスの言うことなので渋々受け入れたネムネ。

ところでクイーンとの戦いを見た後にキースが思ったことをアイリスにぶつけることにした。

「アイリスさんならクイーンとどう戦いましたか？」

「むう……そうだな。唐突に出会ったのなら冷気剣と強化魔法で防戦しつつ、氷結魔法を組んで機動力を削ぎ追撃の魔法。討伐に行くなら何処に現れるのかをしっかりと調査して、罠を仕掛けてから奇襲をかけるだろう」

「討伐に関しては随分と、その……」

「ずるい、だろ？」

言いにくそうなキースの代わりに、アイリスが続きを言った。申し訳なさそうにキースが頷く。アイリスはグラスを傾け中身を飲むと、小さく笑って見せた。

「だがリスクを減らすにはこれが最適なんだ。私達は体が資本だからね、リスクを避けて避けて、安全策を取ることは恥じることはない。むしろ無謀にも突撃するだけでは三流とっていいだろう」

「うっ」

思い当たるところがあるキースは冷や汗を流して唸った。しかも突撃の結果クイーンとはち合わせたことを思えば、返す言葉すらない。

「けっ。こそこそするなんざつまんねえよ」

骨付き肉を片手にいなほが吐き捨てるように言った。

「つまらないとか楽しいの問題ではない。生きるか死ぬかなんだ。君はもつとそういつた部分を勉強したほうがいい。戦闘力だけ高ければ良い話ではないんだぞ？」

「……へっ」

言ってることが事実なだけに、素直になれないいなほは鼻を鳴らしてアイリスから視線を切った。

「全く、子どもだな君は」

呆れて溜息もでない。言った通りに本当にこの男は我が儘な悪ガキだ。

だが、強い。その戦闘力だけではなく、いざ戦いとなったら絶対にぶれない心が強い。

今回の異変と、いなほが遭遇したという異変。この二つが結びつ

くとき、必ずやいなほの實力が必要となるだろうと、アイリスは半ば確信めいた予感を抱いていた。

**第二十五話【ヤンキー感謝祭】（後書き）**

り 次回、初依頼編完全終了。さらにその次より第一章ラストバトルな

## 第二十六話【ヤンキーと別れの挨拶】

クイーン討伐に関しては、村の窮地を救ったとしてルドルフから多額の報酬が渡されたことになり、そしていなほにはさらに、引き裂いたタンクトップの代わりにクイーンの毛で編まれたシャツを渡すことをルドルフは約束した。

そうして、当初の予定通り村の鉱物の取引の商談が終わり、一同は無事帰路に着いていた。行きとは違い、全員が同じ馬車に乗り込み談笑をする姿は、当初の険悪な雰囲気などまるでなかったかのようだ。

何よりも変わったのはキースだろう。相も変わらずいなほには憎まれ口を叩き、いなほもそれに応じてはいるが、その間に刺々しいものはない。悪友同士がからかい合う姿を見ているようだった。

帰りに少々魔獣との戦いはあったが無事にマルクへと到着したいなほ達は、ルドルフを彼の商店に送り届けた後、道の端っこで別れの挨拶をしていた。

「あのあの、アイリスさんといなほさんとガントさん。とても充実した経験をさせていただきありがとうございましたデス」

「君ならいい冒険者になれる。これからも精進するんだぞ」

「ハイデス！」

大袈裟に頭を何度も下げたネムネは、アイリスの激励に笑顔で返事すると「では、アズウェルド君。私は先に行くデスね」と言い残し、振り返ることなくその場を後にした。

続いて背中を向けたのはガントだ。いなほはその背中に視線を向ける。

「また会おう」

「おう、死ぬなよ」

「お前もな」

ガントは背中越しに口を釣りあげると、そのまま人ごみの中に消えていった。

そして最後に残ったのはキースだけだ。

「なあハヤモリ」

「おう、なんだよ」

キースはいなほの真正面に立つと、逸らすことなくその目を見上げた。

良い眼になったじゃねえか。内心でいなほは舌を巻く。この短期間の戦いがキースの様々な価値観を変えたのは、その目を見るだけでわかった。

だからキースは聞かすにはいられなかった。

「アンタ、俺よりどのくらい強いんだ？」

その問いは、以前のキースがいなほに聞けば、いなほは軟弱と吐き捨てただろう。だがいなほは問いに対して見下すでもつまらなそうに眼を細めるでもなく、握った拳でキースの胸を軽く小突き、快活に笑って見せた。

「アホ。億兆倍強えに決まってるんだろが」

得意げに言ういなほの言葉に、キースは悔しさを感じながらも、何故かいなほと同じように笑っていた。

「言ってる馬鹿」

「ほざけよ阿呆」

互いに陳腐な憎まれ口。そしてそれが当たり前かのように、二人は互いの拳を付き合わせた。

「じゃあなハヤモリ」

「ああ、あばよキース」

キース。初めていなほに呼ばれた自分の名前に、僅かに驚きから目を見開き、キースはだからどうしたと頭を振って苦笑。そんなところを見せたくなかったから、キースは言葉もなく背を向けると、ネムネが歩いて行った方向に消えていった。

「次に会ったとき、もしかしたら彼はいいライバルになって現れるかな？」

「だとしたら最高じゃねえか」

アイリスの試すような物言いに、いなほは闘志剥き出しで答えた。当然のようにキースが自分と戦ってくれることを願っているのだから。

際限なき闘争心。これがこの男の原動力かと、アイリスは猪突猛進ないなほに笑ってしまった。

「では帰ろう。エリスが心配しているだろうからな」

だが表面上をいつもの冷静のまま。ともかく今は報告を済ませてひと段落しよう。

「おう！ んじゃ行くぜアイリス！」

いなほはアイリスの言葉に力強く応じると、キース達の無事を祈るように空に拳を突き出してから歩き出した。

楽しい凱旋だった。めくるめく闘争を堪能したし、自分の心にも折り合いをつけられた。今回の依頼の収穫は、いなほにとって充分満足できるものであった。

さて、後はエリスでもからかって寝るとしよう。意気揚々と、自分を待っているだろう少女を思えば、いなほの足は自然と早くなるのだった。

「おい！ そっちはギルド街ではないぞ！」

アイリスの突っ込みはこの際無視して真っ直ぐに行く。他人の言葉に揺るぎはしない。思うがまま進むがままに、とりあえずいなほは突き進む。

こうして、一波乱のあったいなほの初依頼は無事に終わるのであった。

第二十六話【ヤンキーと別れの挨拶】（後書き）

次回、初依頼中の出来事。ありきたりな会議。

第二十七話【老人会議】（前書き）

でも若いちゃんねエも出るよ！（死語）

## 第二十七話【老人会議】

話しはいなほ達が依頼のため出て行った直後に戻る。

ギルド街の事実上の総括である依頼斡旋所にて、その議題が上がったのはアイリスという優秀な冒険者の報告であったからだろう。でなければ、トロールの集団による村の蹂躪など、誰も信じなかったに違いない。

そして依頼斡旋所の職員のプロ十名が集まり、問題の案件についての議会は開かれた。事が事だけに、はいそうですかと依頼掲示板に張り出すわけにもいかないだろう。なのでその会議では誰もが迂闊な発言を出来ずに沈黙を保っていた。

「もしこれが事実なら、各ギルドに連絡を回し、調査団を組んだほうがいいだろう」

一人がこれでは話が進まない、と、無難な提案をする。

「だが人員はどうする？　まずは被害にあったという村に人員を派遣して事の真偽を確かめた後、改めて調査団を組むべきではないか？」

「それについてだが、実はミライイスがギルドで信のおける者を既に二日前送ったらしい。早ければ今日にでも報告が来るが……」

「失礼します」

と、ノックと共に会議室の扉が開く。現れたのはいなほ達の受付をした女性だ。手にはおそらく件の調査結果をまとめただろう紙を

持っている。

「中身は簡単な概要のみですが、精密な調査内容を送る時間があれば、早急な報告が必要と考えたのでこの書類を送る、そう火蜥蜴の爪先のメンバーから伝言です」

「わかった。渡せ」

女性職員が一枚ずつ配って回る。全員に行きとどいてから、資料を読むと、誰もがその表情を変えた。

「村の入り口より少し外れた場所に、十八体のトロールの死体を発見。村には村人のらしき墓があり、村には住人の姿は確認されず。状況を見る限り、現在のメンバーではこれ以上の調査は危険と判断。即座に離脱をした」

場の内の一人がそれを読みあげて唸り声をあげた。

「トロールが十八体だと？」

「それはミラアイスが倒したとみて問題あるまい。だが問題なのはそこではなく、それほどの数のトロールが何故一か所に集まったのだ？」

「推測だが、トロールは誰かに従い、集団で行動していたのではないだろうか」

「馬鹿な！ トロールは群れても二、三体程だぞ！？ それに奴らはゴブリンやオークを従えはするが、奴ら自らが従うというのは…」

思い当たる節があるのか、声を荒げていた男は最後の方は尻すばみになり、最悪の予想を思い浮かべ顔を青ざめさせた。

「まさか、魔族だともいうのか……」

「奴らの大半は大陸の向こう側にいるはずだ！ それにあの魔王共は、五年前に『傾いた天の城 バベル・ザ・バイブル』の狂った化け物に高い金を払って殺し尽くしてもらっただろ！」

「だったらそれ以外に何だというのだ！？ 第一奴らは唐突に姿を現しては近隣一体の人族を狩り尽くす。それに魔王が召喚した魔族を全て打ち滅ぼしたわけではないのだ！ もしかしたらこの五年、潜伏していたのかもしれないんだぞ！」

「だからこそ対応を慎重にするべきだ！ ここは王都に連絡を取って貴族の応援を要請するべきだろう！」

「無理だ。貴族のほとんどは北との戦いに備えて北部に集中している。それにここは中立故の周りに貴族がない！ 近くて応援を呼ぶまでに一月はかかるぞ！？ その間に近隣の村々に被害が拡大する！」

会議は際限なくヒートアップしていく。意見が飛び交い、一層の混沌を描いていく室内。

誰もが声を荒げて、遂には立ち上がって口論をしだす始末。全く持って収集などつかなくなってきた。

そして三十分程経過したところか、ある程度勢いの収まったところで、一人の男が立ち上がった。

「……調査結果から、高い可能性で村の周囲は危険な状況になるとみていいだろう。この案件の調査は緊急を要する。今晚には各ギルドに通達を行い、ギルドへの資金確保のため、各商店にも問い合わせをし、魔法学院からも教職の幾人かに応援を来てもらえるように言っておこう。調査団を整えろ、ただし魔法学院の教職には応援をいつでも出せるように言うだけにして、今回の調査団には組み込まないこと」

「ミライアイスはどうする？ 彼女も居たほうがいいだろう。調査団を派遣して全滅という可能性もあり得るのだから」

「止めておけ、彼女はマルクの中ではトップレベルの実力者だ。調査団を組織するとはいえ、実際は兵を寄せ集めるだけの連携もない烏合の衆、全滅するならばそれは仕方ない。精々足止めとして活躍してもらおう。その後ミライアイズと魔法学院教師クラスとギルドのエースの少数精鋭で臨むべきだ。現にギルドのエースで現在出張している者は何人かいる。彼らが戻るまで待ち戦力を確保するべきだ。ところで彼女は何か依頼を受けているか？」

「ムガラツパに最長一週間程出掛けると」と受付嬢が答える。

「一週間か……確か他の者もそれまでには戻ってくるはずだな……よし、大規模調査団の構成は止めて、各ギルドから数名ずつ集め調査団とする。酷な話だが、これから行く者には状況を確かめる餌と、近隣への被害を防ぐ捨石になってもらおう」

男の発現に誰も意見はなかった。男は小さく頷くと「では、解散」と言っただけで部屋から出ていった。

他の者も慌てて行動に移る。誰もがその顔に焦りを浮かべているのはそう、五年前の惨劇と殲滅を覚えているからこそ。

そして翌日出動することになった調査団は、いなほ達が帰ってきた今も戻ることにはなかった。

## 第二十七話【老人会議】（後書き）

次回、ヤンキーと少女。食事編。

どうでもいい用語説明。

『傾いた天の城 バベル・ザ・バイブル 』  
世界最強のギルド。十の戦闘部隊と八の支援部隊。そしてそれらを  
総括する三人の幹部とトップのギルドマスターで構成されている。  
戦闘部隊は基本Eランク以上でないと入れない。支援部隊でも最低  
Fは必要。部隊それぞれの隊長は全員Aランクで、幹部に至っては  
A+である。マジヤバイ。

でもさらにヤバイのはギルドマスター。ぶっちゃけた話だが、傾い  
た天の城の全ギルド員がかかってギルドマスターに勝つことは出  
来ない。過去、こいつのくしゃみで国が幾つも滅んだヤバイ。ちな  
みにくしゃみさんは二代目ギルドマスターである。初代にフルぼっ  
こにされてギルドマスターになった。

つまり一番ヤバイのは初代ギルドマスター。初代はハッター言い  
ながらリリカルマジカルするポインポイン姉貴である。

総評するとマジキチギルド。今のいなほでは平団員と互角程度（そ  
れでも充分凄いことだが）

第二十八話【ヤンキーと少女。飲食中】（前書き）

エリス「いなほの頭装備

## 第二十八話【ヤンキーと少女。飲食中】

ギルドに帰るでもなく、商店街をぐるぐる回るいなほは、とりあえず色んな商店を見て回っていた。アイリスはどうせ言っても聞かないことはわかっていたが、一応「先に戻って依頼の報告だけはおく」とだけ言うと、いなほとはそこで別れてギルドのほうに行ってしまった。

そして一人になったいなほといえば、別にギルド街へあえて行かなかったというわけではなく、一週間一人だったエリスに何か土産でも買ってやろうと思いついて、こうして商店を見ていたのだ。決してギルド街への道を間違えた言い訳ではない。ないのである。

金のほうは帰り際にルドルフが「これは個人的なお礼です」と渡してきた銀貨が五枚。どの程度の金額かわからないが、多分色的に百円くらいといなほはあたりをつけていた。

しかし今日は街の様子が何処となく変である。数日しかこの街にいないいなほだが、明るく盛況な商店街の様子は変わらないというのに、僅かに影を落とした人間が見かけられた。

別段、人の心も千差万別なので落ち込む人間がいてもいいだろう。だがやはりおかしい、少しばかり思案したいいなほだが、考え込むのもらしくないと違和感を頭から追い払った。

さてさてと、食べ物から武器防具、日用雑貨まで様々なものが売られている商店街の店を見ながら、いなほはどれがエリスの土産にいいか考える。

武器防具　これはありえない。あのチビが剣と防具着けたら、いなほは笑いすぎて死ぬだろう。

アクセサリー　ガキには早い。

衣服　女の服なんか知らん。

「なら飯だな飯。あいつは背も体も貧相だしな」

結論が出ると動きは速い。何よりも肉つきをよくするなら肉がいでだろう。銀貨を手で遊ばせながら、いなほはとりあえず香ばしい肉の良い匂いのする方に向かっていった。

「へへ、ついでだし俺も一個……」

「いなほさーん！」

唾液を滲ませながら歩くいなほの背にかかる聞き慣れた声。

振り返れば、赤が目立つシャツとパンツルックのエリスが、二つにまとめた髪を揺らして人ごみを飛ぶように掻き分けて近づきながら、いなほに向かって手を振っていた。

「おう、帰ったぜエリス」

「おかえりなさいいなほさん！」

「仕事はどうした？」

「お昼休憩です。そしたらいなほさんの頭が見えたんですよ。エへ、いなほさんおつきいから分かりやすかった」

「だろう？ 俺ほどになりや漲る気迫だけで誰かわかるってもんよ」

いなほの腕に飛びつくエリスと、それを当然のように持ち上げるいなほ。

そして恒例となった肩車ポジションに収まって、二人は顔を突き合わせて笑った。エリスが悪夢にうなされていなかったか心配だったいなほだが、どうやら杞憂だったらしい。

一週間前よりも明るくなった風に見えるエリスの姿を見て、安堵する自分を感じたいなほは、俺も丸くなったもんだと苦笑した。

「そいやホラ、ちょうどいいから好きなの買えや」

いなほはエリスに持っていた五枚の銀貨を手渡した。エリスは渡された銀貨を見て「わわっ、こんなに貰えないですよ」と慌てて返そうとするが、いなほは笑って首を振るだけだ。

「……じゃあ、一緒に何か食べましょ？ 私、この一週間で美味しいご飯を出すお店を見つけたんですよ」

「決定だな。全部使い切るまで食いつくすぜ」

「もう！ 銀貨五枚分も食べれるわけないじゃないですか！」

冗談を言い合いながら、エリスが指差す方向に歩を進める。移動型ヤンキータクシーの通行を遮る根性のある人間などいるわけもなく、実にスムーズに目的の飲食店に到着した。

ちょうど昼過ぎで人で混んでいたが、どうにか席を確保出来たので、向かい合うように席に座る。

「どれにします？」

「任せるぜ。金のあるだけ頼みな」

「じゃあじゃあ私は」

そうして店員に料理を頼んで暫くして運ばれてきた料理は、エリスがお勧めする通り実に美味そうだった。

まずテーブルの中央には鮮やかな色合いの野菜と、一口サイズに切られ、柔らかくなるまで煮こまれた肉だ。そこにとろみのついた餡がかかっており、香ばしい匂いで嗅覚を震わせる。脳まで響く匂いは、すっかり腹の減ったいなほの空腹を一層刺激した。しかし主菜は一つではない。肉がよくほぐれるまで煮込んだ魚が一尾と、茶色くなるまでよく煮込まれた大根らしき物が載せられた大皿も一つ。そしてその周りを彩るのは、同じく新鮮な野菜を使ったスープ。様々な具を挟んだサンドイッチ。いずれも取れたてで瑞々しい野菜を使ったものである。

「いただきます」

軽快な音を立てていなほが両手を合わせてフォークを手にとった。まずは餡のかかった肉を野菜ごと一口。甘辛い味付けに舌鼓。勢いよくサンドイッチを空いた手に取り食いちぎる。柔らかいパン生地と、挟まった野菜とハムっぽい何か、そしてしつこくない辛さの味付けが餡かけによく合う。

フォークを掴んだ右手はスプーンに変えて、野菜スープを一口。野菜の味をしみ込ませたスープは、口の中の味を一旦リセットさせながらも、暖かく落ち着く味付けで舌を泳がせる。

そして待つてたとばかりにフォークを持って魚の身をほぐす。骨ごと蕩けた肉はあっさり取れ、肉から汁を滴らせる。熱くもなく程良い温度、ほぐれた肉なのに、味はしつかりとしみ込んでおり、どうやら肉のようにほぐれてはくれない。噛めば噛むほど汁を滴らせ魚の味が口内に行きとどく。締めは大根、軽くフォークを刺すだけで簡単に切れてしまうくらいに煮込まれている。

美味い。大根を飲み込んだいなほは、充分にエリスがお勧めする料理を満喫していた。その表情だけで全てわかったのだろう、エリスも嬉しそうに、いなほの様子を見ながら、その小さな口にサンドイッチを運んでいる。

リスのようにちびちびと食べるエリスとは対照的に、いなほの食べ方はとにかく豪快だ。一通り楽しんだ後は、大口を広げて次々と食事を詰め込んでいく。

「そういえばいなほさん。依頼のほうはどうだったんですか？」

半分ほど料理が片付いたところでエリスがそんなことを聞いてきた。怪我がないように見えたので安心したが、そういえばいつものタンクトップではなく白いシャツなのに気付き、何かあったのではないかと思っただからだ。

「……いんや、途中服を引っかけて破いちまったが、なんもなく終わっちゃったよ」

僅かな逡巡の後、つまらなそうに鼻を鳴らしていなほは答えた。未だ悪夢の中にいるかもしれないエリスを思えば、クイーン等という凶悪極まりない魔獣とタイマン張ったなどいなほは言えなかった。

いずれはエリスの耳に入るだろうが、いらぬ心配をさせたくはなかった。何せ守ると誓ったのだ。ならばいなほはエリスを悲しませてはならない。

「そ、そうですか」

安堵のため息を漏らすエリス。今のエリスにとって、いなほという存在は精神の支柱のような存在だ。何とかこの一週間はゴドーと共に眠ることで悪夢を見ても寝れなくなるということはなかったが、それでもやはり彼女にとっての希望はいなほだった。

だから無事に帰ってきて何よりも嬉しい。安堵に弛緩するエリスを見てから、いなほは店内の様子を見渡した。どうにも店内の様子

がおかしい。

やはり変だ。明るい大衆食堂では忙しなく人が動き、談笑が至る所で繰り広げられているが、緊張の面持ちの者が何人も存在する。いずれも鍛えた肉体等から見て、冒険者のようであった。

こつこつ賑やかな場所では陰鬱な面を見るのはあまり好ましいものではない。だが張りつめた糸のような緊張感のある彼らの様子から、飯が不味くなると文句を言うには、流石のいなほにも憚られた。

「……変なんですよね。ここ数日」

エリスがそんないなほの様子を感じ取ったのか、メニューを片手にエリスが呟いた。

若い少女にも、街に立ちこめる言い知れぬ緊張感を感じ取れたらしい。表情を曇らせつつ続ける。

「火蜥蜴の爪先でも、少し前から突然重苦しい空気が流れ始めたんですよね。私、ゴドーさんに聞いてもみたんですが、ゴドーさんは心配することは何もないって言うだけで……でも、ギルド街はもうずっとあの人達みたいなのが沢山いるんです」

「なんかあった……って聞くのも野暮だな。なんかあったんだろ」

何気なく呟いた言葉は的を得ている。帰ってきて早々嫌な気分になるが、苦々しく歪みそうになる表情をいなほは無理矢理抑えた。目の前のエリスの顔が曇っているからだ。

だからつとめて明るく笑ってみせると、机に影を落とす、少女の金色の髪をそつと撫でた。

「まっ、安心しろ。ともかく今は飯だ。美味しいの期待してっからよ、不味いのでしたら承知しねえぞ？」

「はい……！」

手で撫でられるのに任せる。不安で一杯になる小さな体も、この大きな掌があれば全部を吹き飛ばしてくれるに違いない。

大きな男への全幅の信頼があるからこそ、エリスは釣られて向日葵のように暖かな頬笑みを浮かべた。

## 第二十八話【ヤンキーと少女。飲食中】（後書き）

次回、ヤンキー、敵を知る。

どうでもいい用語説明。その二。

『火蜥蜴の爪先』

魔王戦争後に出来たギルドで、現在Cランク。ギルドのランクは、そのギルドに属する者の戦力を合計して出る。つまりギルド員全員で応じれば、理論上はCランクと闘うことが出来る。でもあくまで理論上。実際やれば多分負ける。戦いは火力だよ兄貴！

本部はアードナイ王国北部にある迷宮都市シエリダムにある。その他に二つの支部がある。いなほが属しているのは正確には火蜥蜴の爪先、マルク支部となる。Cランクは結構優秀なギルドで、マルク内でもトップランクといってもいいだろう。

ギルドマスターは炎の魔法を使う獣人。ランクはE+。最近切れ痔になった。

## 第二十九話【ヤンキー、敵を知る】

五年前、アードナイの現女王の尽力によって四力国同盟は結ばれた。これは北のエトロス帝国の侵攻を防ぐためという名目があったが、実際は北の帝国と四力国の間に『あった』大国、アドラク共和国に現れた三体のAランク魔族によって、大陸の至るところで突如行動を開始したその他の魔族を殲滅するためというのが真の理由であった。

魔族。それは、魔獣が進化した存在とされていて、その力はほとんどがDランクを超える能力を持っている。これがAランクの魔族、現在は三大魔王と語り継がれている存在が活動したことにより、大陸中の魔族が動き出したのであった。

大陸中の国々は暴れる魔族の対処に追われることになり、王族貴族、そして人族と比較的友好的な関係を持つ鬼人や竜人達による善戦により、村々を幾つも滅ぼされながらも何とか拮抗を保っていたが、三体の魔王は次々と魔族を大陸の至るところに召喚し、その間に共和国は魔王の手に落ちてしまった。

このままでは自身の首も危ういと感じた四力国同盟と周辺国家、そして帝国は、海を渡った大陸にあるA+ギルド『傾いた天の城』に魔王討伐を依頼。共和国内の三大魔王は、ギルドが派遣した人材によって、僅か半日で国ごと殲滅されたのだった。

現在、大陸の中央には国一つ分の巨大な湖がある。そして魔王が死んだことにより、各地で暴れていた魔族も次第に鳴りを潜めるようになり、尚も暴れる者は殺されたのだった。これが俗に言う魔王戦争であり、その傷跡によって、未だに四国家と北の帝国との間に、冷戦ともいえる状態が築かれることになったのだ。

だが危険がすぐそこに迫っているかもしれない。依頼の報告を終えたアイリスは、深刻な面持ちで、調査団が今なお帰ってきていないことをゴドーから聞いていた。

「まだギルドのランク持ちと商人のトップ連中しか知らない。今回の調査団の派遣先は、表向きは時期の早い冬に向けた大規模な食糧運搬の護衛になっているから、後一週間は帰ってこなくてもマルクの奴らに動揺はないだろう」

「だが既に魔族の所に調査団が向かったという噂は流れている、と言ったところか」

ゴドーが小さく頷く。「クソっ」と、アイリスらしくない汚い言葉がその口から零れた。

「まさかこうも早くギルドが動くとはな……いや、私が自分の影響力を過小しすぎたのが原因か。せめてもう少し早く動いていれば私も同行出来たというものを……怠慢と油断か。早く行動してほしいと思っただけながら、そんな可能性を否定した自分が愚かだった」

「自分を責めるのはよせアイリス。お前の行動はなんら間違えてはいない」

「こちらからは誰が出た？」

「いや、調査に出向いたのは結局新鋭ギルドの者らしい。彼らには村の救助依頼だと伝えたと報告があった」

「斡旋所の老人共が……！ 所詮、奴らから見れば出たばかりのギルドなど代わりのきく物でしかないのか……！」

カウンターテーブルを強く叩く。テーブルがきしんだが、アイリスは構わず怒りに震えていた。

その叩きつけた拳の隣に、ゴドーが冷たい水の入ったグラスを置く。

「落ち着け」

「……すまない」

アイリスはグラスを持つと、一息で全てを飲み干した。沸騰していた心に沁み渡る冷たさのおかげで、幾許かの落ち着きを取り戻したアイリスだったが、その表情は曇ったままだ。

二つ名に騎士という言葉がある通り、アイリスは責任感の強い女性だ。今回の出兵に間接的とはいえ自分が関わっていることを自覚しているが故に、感じている重責は一入だろう。

そんなアイリスの心情がギルドに彼女が入ってからの付き合いであるゴドーにはよくわかった。だが幾らアイリスが強くなり、聡明になろうがどうしようもないことがある。

「アイリス。今晚マルクの全ギルドのF・ランク以上の者に斡旋所への招集がかかった。出てくれるか？」

「無論、これは私の過ちだ。私が正す。心の何処かでエリスといなほの証言が過大だったと思っていた。その過ちをな」

普通ならばトロールの群れの襲撃など信じるわけがない。疑う気持ちはあったものの、二人の証言を信じたアイリスは例外とでも言うていいだろう。現にゴドーはアイリスからそのことを聞いた時も、アイリスでなかったなら信じはしなかったし、代わりに村に調査に

行った者も、その目で確認するまで疑心に溢れていただろう。

僅か五年前の悲劇があったからこそ、人は目先の脅威を信じられないのだ。同じ過ちは繰り返さない。現実はそれが驚異的であればあるほど、人は過ちを見ようとはしない。

そして結果として悲劇は繰り返された。悠長に一週間の依頼を受けことを今は後悔している。いや、あれはあれで人々の脅威を取り除いたのだから、結果的には正しい選択だったのだが。

いずれにせよアイリスは状況を楽観していた。だがもっと強く進言しなかったいなほとエリスを攻めるようなことはしない。エリスは村で生活していたため、そもそも五年前の悲劇など知りもしないだろうし、いなほに至っては魔獣すらつい最近初めて会ったかのようだった。

だからこれは全てアイリスの責任だ。誰でもなくアイリス自身がそう思っている。

故に怒りは胸の奥。再び上げられた顔には常の凜々しき佇まいが戻っていた。

「あの兄ちゃんとエリスにはどうする？」

「……いなほには私が伝える。エリスは　　ことが終われば必ず、な」

「何を誰に伝えるって？」

不意の声に振り向けば、ギルドの入り口、扉に背中を預ける形でいなほが立っていた。どうにも穏やかではない雰囲気を感じたのか、短い言葉には刺々しさが溢れている。

いなほの傍にはエリスの姿はない。先に戻るといって、大量の昼飯の後処理を任せてきたのだ。今頃泣きながら満腹の胃袋に料理を詰め込んでいる最中だろう。

「……聞いていたのか？」

「今さっきな。エリスはいねえよ。へっ、俺の勘も馬鹿にはなんねえ」

壁から背中を放して、いなほはアイリスの隣に座った。ゴドーが静かに新たなグラスに水を注いで置く。

躊躇いなくいなほは水を飲み干した。よく冷えた水が喉を通り潤わせる。だが渴きを覚えている心はどうしようもない。

「言えよ。ゴキゲンな話なんだろ？」

猛禽類を思わせる鋭い眼光。話を聞かなくても、いなほという男は既に新たな強敵の匂いを敏感に感じ取っていた。

そんないなほが怖いとアイリスは正直思った。何せこの男は、誰もが忌み嫌うか恐れるしかない魔族の話も聞いたとしても、必ずや変わらぬ笑みで変わらず前進し、例え死の間際でも高笑いしているのだ。

闘争本能の塊。今ならばっきりとわかる。クイーンの亡骸を見て感じたいなほに対する予感。この男は、もしかしたらこの戦いのために、ここに現れたのではないのだろうか。

「……君は、以前戦ったクイーンより何倍もの強さを持つ化け物と戦うとしたら、どうする？」

答えの分かりきった問い。是非もない。いなほは興奮に目を剥いて肩を揺らした。筋肉を隆起させると、今にも暴れ出しそうな、獣気とも呼べる気をまき散らす。

「殴る」

をぶじ。

「蹴る」

そして。

「勝つのは、『俺』だ」

絶対的な自信が言葉の節々から溢れていた。気負いもなく、息を吸うのと同じように自分の勝利を疑っていない。

勝つのだと。どんな敵が相手だろうと勝利するのだと。男の眼は何よりも雄弁に語っていた。

アイリスは僅かに押し黙った後、降参とばかりに嘆息をついた。

「そうだな。君は、そういう人間だった……早速本題に入ろう。以前、君が遭遇したトロールの群れ、もしかしたらアレの後ろに魔族がいるかもしれないことがわかった」

「魔族？」

「高度な知恵を持った魔獣、とでもいうかな。そして今回の場合、トロールが相手だったのならば、相手はおそらく……小国ならば存亡の危機があるレベル。クランク、トロールキングだろう」

トロールキング。魔族の中では知能が低くはあるが、魔法すら使う高度な知能、そこにトロールの数倍以上はあると言われる膂力と十メートルはあるという体躯。純粋な身体能力ならば、魔族の中でも上位に入ると言われる接近戦の得意な魔族だ。

そして周りにはトロールの群れを従えており、単体でのランクは  
のだが、これら全てを相手にする場合、C+並みの危険な戦いにな  
るだろう。

「迷いの森から出るといふことはおそらくないだろうが、エリスの  
村と同じように、今後、トロールの群れを使って地道に近隣の村を  
襲撃するおそれがある。いや、おそらくもう二つか三つは潰された  
とみてもいいだろう。普段は定期的に来るはずの村からの商人が来  
ていないらしい……そしてなるべく我々の目を欺くためだろう、生  
き残りは一人も残さず全滅させているはずだ。でなければ誰かが応  
援を要請しているだろう。正直、君達の報告がなかったら、今頃も  
我々は違和感しか覚えなかったはずさ」

淡々と語りながらも、アイリスの胸の奥には怒りが渦巻いている。  
対照的にいなほは怒りを隠そうとはしなかった。眉を歪め、アイ  
リスの話の歯を食いしばりながら聞いていた。

「また、あれが起きてるってのか」

吐きたくなくなるほどに凄惨だった村の光景を思い出す。生き地獄の  
ような世界。あの時に感じた怒りは、今でもいなほの中に燻ぶって  
いる。

もう終わったとばかり思っていた。酷な言い方だが、エリスの村  
の者の生存がないと分かった時点で、後は事後処理だけが残ってる  
ものとはかりだといなほは樂觀していた。

甘かった。そう、戦いによる高揚におぼれていたいなほは、あの  
集団を指揮している存在をすっかり失念していた。

少し考えればわかることだというのに、俺はエリスの仇をまだと  
っちゃいねえ。

歯ぎしり。怒りは自分と敵の両方に。混ざり合う感情の波を今す

ぐにぶつきたい。

いなほは無言で立ち上がると、出口に向かった。

「何処へ行く」

「潰しに行く」

「何のために」

「行くためだよ」

躊躇いないいなほの返答だが、こればかりは頷くわけにはいかなかった。今回の戦いは、いなほという戦力こそ一番の要になるはずだ。

「待て。幾ら君でも、いや、君だからこそ一人で行かせるわけにはいかない」

アイリスが先回りして出口の前に立つ。邪魔だと目で訴えてくるいなほを真正面から睨み返し、確然とした態度で対峙した。

「ああ？ おいアイリス。テメエの言葉、俺が負けるって聞こえるぜえ？」

「ああ。今回に限っては、貴族でも子爵以上でなければ単独で赴くのはただの蛮勇だ。そんなところに、未だ魔法の一つも使えない君を送ることは出来ない」

「……笑えるぜアイリス。俺がこれまで一度だって魔法に頼ったかよ？」

「いいか。相手はクイーン以上の身体能力を持つ。確かにそれだけなら君でも戦いになるだろうが、さらにそこに魔法が加わるのだから？　しかもおそらくは強化の魔法……トロールの数倍の腕力が、強化でさらに数倍以上に膨らむ。この意味がわかるか？」

強化の魔法。これは冒険者になるには必須の魔法と言われている。効果は至ってシンプル。自身の身体能力を爆発的に肥大させることだ。

これにより、ちょっと力の強い少女のネムネですら、強化が使われている最中は馬の速度とトロールの一撃に辛うじて耐えられる腕力とタフネスを得られる。

そうして人族は魔獣と戦うことが出来るのである。常識的に考えれば、これまで強化も使わず魔獣と互角以上に戦っていたなほが異常なのだ。

そして、魔獣と戦うための力を、通常ですら人間を遥かに超える力を持つ魔の者が使う。これが魔族の恐ろしさだ。人族にある知恵という武器すら、奴らは使用してしまう。

「ちっ……わあったよ。で、どうすりゃいんだ？」

アイリスの説得に根負けしたのか、いなほの体から溢れていた攻撃的な気配が霧散する。

この男のことだから無理してでも行くと言っかと思っていたアイリスは、意外な反応に目を剥くが、慌てて応えた。

「とりあえずは今晚幹旋所で行われる作戦会議に来てくれ。明朝、おそらく迷いの森に行くことになる」

「あいよ。じゃあまた後でな」

今度こそいなほは止まることなくギルドを後にした。  
扉を後ろ手に閉めて、前を向く。眼には強烈なまでの戦意があっ  
た。

「確か、迷いの森って言ったな」

そこに行けば、自分よりも強い奴と会うことが出来る。そして、  
エリスの人生を滅茶苦茶に壊した奴にケジメをつけることも可能だ。  
沸々と込み上げる怒りと歓喜。

「……仇はきつちりつけてやるからな」

決戦は明日。いなほは握り拳を作ると、逸る気持ちをぶつけるよ  
うに、勢いよく掌に叩きつけた。

## 第二十九話【ヤンキー、敵を知る】（後書き）

次回、作戦会議

どうでもいい用語説明。その三

『魔王戦争』

三体のAランクの魔族（正確には全員A・ランク）、通称三大魔王による大陸中を巻き込んだ戦争。各地で魔族が動き、幾つもの小国が滅んだ。歴史に残る災厄。このことがきっかけで北の帝国への防衛体制が出来たのはある意味では不幸中の幸い。

ちなみに魔王達はポインポイン姉貴に弄ばれたあげくヒヤッハーされた。

以下戦闘内容。

魔王×3「無理だよおお。全部ヒヤッハーされてるよおおおお」

姉貴「ほらああああ。もっと鳴けよイモ野郎がああああ」

ヒヤッハー（国家消滅）

こんな感じ。実際はもっとシリアスでかつこい戦いでした。

### 第三十話【ヤンキー、斡旋所へ行く】

頭上で輝いていた太陽が沈み、五つの月が放つ淡い輝きが世界を満たす夜の街。普段ならそれでも賑やかさを損なわないマルクは、街全体を包む不気味な気配のためか、いつもよりも何処か静かな雰囲気に包まれていた。

火蜥蜴の爪先の二階。今はいなほとエリスの部屋となっているそこも、何処か神妙な空気が流れていた。

「そんじゃ俺あちよっくら酒引っかけてくるぜ」

そう言って、ベッドに横たわり今にも落ちそうな重い瞼を懸命に持ち上げているエリスの頭を撫でたいなほは、本当に何でもないといった様子で立ち上がった。

「いなほさん……」

「大丈夫だ。どうにも目が冴えてるからよ。一杯飲んだらすぐ戻る…… テメエはさっさと寝てろ」

「ふぁ……い」

限界が来たのか。エリスの瞼がとうとう降りる。同時に、可愛らしい寝息がその口から洩れた。

「ケツ、緩い脳みそしてんぜ テメエは」

口は悪くても、表情には穏やかな笑みを浮かべるいなほ。だがエ

リスに背を向けたと同時に、その顔がきつく引き締まる。  
エリスを起こさないように、ゆっくりと扉を開くと、そこにはもう準備を済ませたアイリスが立っていた。

「行くぞ」

「ハッ、命令すんなよアイリス。付いてきな」

いなほは氣力を漲らせて、アイリスの前に出ると先を行く。その背中に従うようにアイリスも歩き出した。

道中に会話は無い。まだ街をうるついている人の横を抜けて、二人はあつという間に幹旋所に到着した。うつすらと室内から放たれている灯りが、何処か街全体の陰鬱さを映しているようにも見えた。構わず入り口のドアを開けると、カウンターには依頼を受けた時にもいた女性がいて、こちらに気づくと軽く会釈した。

「アイリスさんと……あの時の方でしたよね」

「いなほだ。早森いなほ。こいつに言われてな、仕方なく来てやったんだよ」

「……こういう奴だ、まあ害意があるわけではないので許してやってくれ」

常の威圧感を思う存分發揮するいなほを指差してアイリスが申し訳なさそうに苦笑した。受付嬢も愛想笑いを浮かべて応じると、「ではこちらにどうぞ」と二人を先導して奥にある普段は立ち入り禁止の階段を上って行った。

いなほも誘われるがまま行くこととするが、その肩をアイリスが掴んで抑える。何だ？ と振り向けば、別の意味でも深刻そうな表情

をしたアイリスが一言。

「今更だが態度を改めろよ」

「あ？ 何を今更」

尚も言い募ろうとするいなほの言葉を遮るように、どんよりとした暗い何かを瞳の奥に灯らせながらアイリスがさらに顔を近づけるといつか目が死んでる。

「頼むからこれ以上火蜥蜴の名前を落とさないために頼むから本当に頼むからやらなかったら一生後悔させるからなそして夜な夜な夢に出て筋肉野郎ってずっと呟いてやる！」

「お、おう」

「はい言った！ 今言ったからな！ 今言ったこと聞いたからな！」

あまりの剣幕（むしろ懇願）に思わず頷いてしまっているいなほ。未だ不安は残るが、一応は納得したのだろう、アイリスは懐疑そうにいなほを見るが、肩から手をどけて階段を上っていく。

「………つたく、信用ねえな俺もよお」

アイリスの背中を見ながら一人愚痴る。だがその表情は、真つ直ぐに自分と向き合ってくれる彼女への好意からか、淡い笑みを象っていた。

そして遅れて階段を上がったいなほは、大きめの扉を開けて中に入るアイリスに続いて入室した。

「……」

室内はどうかやら会議室だったらしく、とても大きな作りとなっていた。既にほとんどが集まっていたのか。部屋の会議用テーブルの無数の椅子には幹旋所の間人も含めて十人、内五人がアイリスも知っている冒険者で、三人が魔法学院の教員だ。誰もが歴戦の勇士と聞いた者達が座っていた。入室してきたアイリスといなほ、特に新参者であるいなほに彼らの好奇の視線が注がれる。

当然、堂々とした態度でいなほもまた彼らを見渡した。全員が強者、内の獣が目の前の極上の餌を前に牙を剥こうとするが、今はそのときではない。冷静を装っていなほがアイリスの隣に着席すると、この場の代表である幹旋所側の一人が立ち上がった。

「まずは急な招集に応えていただき感謝する。中には見慣れぬ者もいるが、ここにいる者が連れてきたということは信頼のおける者なのだろう。皆は知っているだろうが、一先ず自己紹介をしよう。私はこの幹旋所の所長、カール・イズルという。自己紹介はしておくかね？」

初老の男、カールの視線がいなほに注がれる。いなほはそれもそうかとゆっくりと立ち上がると、周囲に視線を配ってから口を開いた。

「ちょっと前に火蜥蜴に入った早森いなほだ。まあ頼むぜオイ」

それだけ言うとすぐに座ってしまう。まるで紹介にもなっていない。頭を抱えそうになりながらも、アイリスがその後を引き継ぐように立ちあがった。

「あー、すまない。彼は実は本当につい最近ここに来たばかりだな

そして斡旋所のほうは知っているだろうが、今回の案件の証人にして立役者でもある」

「立役者？」

座っていた冒険者の一人が疑問を上げる。アイリスは頷きとともに返答した。

「トロール総勢十八体。殲滅したのはこの男ただ一人だ」

その言葉に室内が騒然とする。だが斡旋所の人間が懐疑的なのと対照的に、集まっている冒険者の驚きは、「強そうには見えたがそこまでとは」という驚きからだった。

「ランクはD+。今回の案件での切り札になると私は思っている」

「なんと……もしやいなほ殿は何処かの貴族様では？」

カールが興味深げにいなほに問いかける。

だが返事をしたのは当の本人ではなく、疲れた風に肩を落とすアイリスであった。

「それは断じてあり得ない。先に断っておくが、この男、戦闘力は保障するが性格は飢えた獣よりもタチが悪い。皆も必要以上に刺激しないようにしてくれ」

「……俺は爆弾かっつーの」

アイリスのキツイ言葉に、いなほはツッコミと共に嘆息を零す。だが事実ではあるので、別段怒ることはない。「ではよろしく頼む」

そう締めると「そして、もう一つ聞いて欲しいことがある」と、そのままアイリスは先日 of 依頼のことについても語り始めた。

「……と、言うことだ」

「迷いの森のクイーンが負傷した状態で村まで降りてくる……キングは死んだと見ていいだろう。しかし、まさかそこまでのことになっていたとは……」

「ちなみに件のクイーンもこの男が」

「むう……君には感謝してもきれないようだな」

「氣いすんなよ。俺も楽しかったしよ」

本来クイーン of 討伐など楽しむべくもないのだが、アイリスはともかく、室内の人間はいなほ of 発言を場を和ます冗談と受け取ったらしい。

そしてアイリスが座った所で、カールが再び立ちあがった。

「……さて、ではミラアイスからの報告も終わったところで本題に移ろう。ここにいる者はおそらく全員知っているだろうが、十日程前、ミラアイスが得た情報によりトロール of 大規模な集団が発生したという話を受けた。だが先程 of 発言の通りなら、彼、いなほ君が大部分を殲滅したらしい。しかし、その後我々が招集した人員が調査に向かったところ、帰還者は一人もいなかったことより 斡旋所のほうではこの一件が終わっていないという結論に至った」

カールの言葉は誰にとっても予想通りだったのだろう。全員が話を聞いて神妙な面持ちとなったが、それに関しては今更といった様

子だ。

問題なのは敵の規模。そこに尽きるのだから。直後、冒険者の一人が手をあげて質問をする。

「想定される敵は、トロールナイトか？ それとも」

「トロールキングと考えて事に当たった方がよからう」

カールが間髪いれずに答える。「だろうな」と質問した冒険者の男も肩を竦めて皮肉げに笑った。というよりか笑わなければやっつけられないといったところか。

もし敵がキングならば、確かにここにいる面子全員で当たらなければならぬレベルだろう。いなほを入れて総勢七人の少数精鋭。そして相手は王を頂点に置いたトロールの軍。

五年前を知っている人間ならば、この戦いが過酷を極めるだろうことを理解しているだろう。そして知らない者ですらこれまで積み上げた戦いが、今回の戦いの過酷を思い描き真剣な表情をしていた。だがここに、一人だけの例外が存在する。

「でよお、アイリスからも聞いたが……そいつは強いのか？」

手をゆるりと上げてそんなことを言ったのは、その他の人間とは違って随分とリラックスした姿のいなほだ。一応空気を読んでか笑ってはいないが、目だけは喜悦の光を宿している。

いなほの内の輝きに気付いていないカールはゆっくりと頷いた。

「ああ。確か君はD+だったね？ あのトロールキングはC。あるいは君ならば一対一で打倒出来るかもしれないが、それは難しいだろう」

「クイーンバウトと比べたら？」

「……あまり詳しく比べることは出来ないが、おそらくクイーンなら五体程度は圧倒するだろう」

「ふ、ひゃ……それだけ聞けりゃ充分だ」

思わず漏れそうになった笑い声を噛み殺し、いなほは立ち上がり、とその後を後にする。

背中にアイリスが自分を制止する言葉が聞こえたが無視だ。

「クイーン五体を圧倒だってよぉ？ あの極上を五体だ……五体だぜえ」

何せ自分は今こんな状態だ。強敵と戦うと思っただけでこんなにも胸が高まる。言葉で表すなら恋に似ていた。間違いなくいなほはまだ見ぬ敵に恋してる。

だが込み上げる喜びは、唐突に脳裏を過ったアイリスの寝顔によって、途端に罪悪感に変わった。

「……あいつは、トロールがいなけりゃ今も変わらなかつたはずだ」

他ならぬ自分に呆れてしまう。エリスの仇だと理解しているはずだったのに、それ以上に強敵を喜ぶ自分に。

だがこれだけは変えられないし変わらない。いなほという人物の中心にはいつだって『自分が最強である』という概念がある。それがあるからこそ、強者という存在が自分の最強を証明するから欲しくなる。

単純すぎる自分勝手。身勝手な自分本位。いずれは己を滅ぼす自意識故に、いなほは決して止まらない。

「全部ひっくるめて叩いて潰す。それでシめえだ」

明日を思う。臓腑に溜まったマグマを吐き出す瞬間はすぐそこだ。

第三十話【ヤンキー、斡旋所へ行く】（後書き）

次回、永遠の誓い。そして決戦へ

### 第三十一話【ヤンキー、家族を見つける】

その夜。エリスは何かの物音らしきもので目を覚ました。寝ぼけ眼で起き上がり音の方を見れば、部屋の奥、月光の射す窓際でゆっくりと動かないなほがいた。

何かの構えをしながら、足を頭上高く伸ばしたり拳を突き出したリ、体の位置を入れ替えたりといったことをしている。素人であるエリスにはわからなかったが、いなほには狭い室内の中で体をずらし、拳を突き出し、足を蹴りあげる。これらの動作一つ一つを十秒以上の時間をかけて行い、なお且つ木造の床が僅かな音しか立てないというのは驚嘆すべき技術である。

暫くエリスは異国の武術の真髄を観察していた。そうしていれば集中していたいなほだっただけ直ぐに気付く。

「悪いな。起こした」

そう言いながら正拳突きを繰り出す。

エリスは首を横に振った。月光に映えるいなほの動きを見れるのならば、睡眠欲などどうでもいい。

「何か凄いですね。カッコいいです」

「当たり前だろうが」

再び右足が伸びあがる。ゆっくりと伸びた足はピタリと脛が額につくまで上げてから降ろされた。遊んでいるように見えていなほの表情は真剣そのものだ。普段の恐ろしい顔ではあるが、今は何故か神聖さすら感じられる。

「いなほさんは不思議ですよね」

だからふとそんな言葉がエリスの口から洩れた。

「不思議？」

「怖いのに、怖くないです」

「ヘッ、なぞなぞは苦手だ、よ」

「そういう意味じゃなくて……！ その、ごめんなさい。私も言うててよくわからなかったです」

恥ずかしさに目を伏せるエリス。いなほはようやく型の確認を終えると、椅子にかけていたタオルを肩に乗せて、ついでに持ってきた水差しに直接口をつけて一気に飲んだ。

「俺も、お前が不思議だよ」

半分ほど飲みほしてから、いなほがそんなことを言った。

エリスはいなほの言っていることに首を傾げる。自分が不思議？ 自分はただの普通の村人だ。

「私は、いなほさんみたいに強くないです……」

「当たり前だ。俺以外の奴はただの雑魚に決まってるんだろ」

何言ってるんだと今度はいなほが眉を顰めた。呼吸同然に己を信じているその自信。エリスはそれが羨ましかった。こんな強さが自

分にも欲しいって。

「でもよ。お前はスッゲーよ」

だからこそ、いなほのその言葉があまりにも意外すぎた。

「え？」

「二度も言わすな……これでもよ、俺はお前に惚れてんだぜ？」

と、さらなる爆弾にエリスの顔が真っ赤に染まった。今、この人は一体何て言ったんだ？

惚れている。自分に。惚れているだと！？

「ちょ、え、いなほさん、惚れ、って、ええ………！？」

深夜ということでは声は小さいが、エリスの内心の混乱は最早内紛レベルである。眼をぐるぐる回し、今にも倒れそうになっているエリスにいなほは頷いて答える。

「おう。お前は teme が思う以上に最高の女だ」

「そそそそそそ、そんなに………！」

湯だった思考が嬉しさと恥ずかしさで一杯になる。素直に言えば嬉しかった。だがいなほは自分の何処に惚れているというのか。

だって自分には誇れる所などないと言うのに。

そう思うと、浮かれていた気分がすぐに消沈してしまう。突然うつむいてしまうエリス。

「エリス？」

「私、そんなに魅力的じゃないですよ。アイリスさん所か普通の人よりもちっちゃいし、その、オドオドしてますし、それに……」

そうしていなほに目を合わせずエリスは自分の駄目な部分を次々に言い始めた。言ってる情けなくなってくるし、言いながら幻滅されたかなと思ってしまう。いなほの呆れただろう顔を見るのが怖くて顔を上げられなくなる。

さっきまでの気分は地平線の彼方まで飛んでいった。自分は何処までもいなほという男におんぶに抱っこで、何一つ誇るべき部分はない。

「だから私は……いなほさんが思うような人じゃないです」

言い切って、沈黙が生まれる。一秒か十秒か、秒数は関係なくエリスには長い沈黙に感じられた。みつともなくて今すぐに塞ぎこみなくなる。

と、いなほが溜息を吐きだした。エリスの体が震える。呆れられてしまった。ジワリと目頭に滲む涙。

そしてエリスの予想通り、いなほの呆れた言葉は 来なかった。

「でもお前は、強いじゃねえか」

エリスの頭に、何度も感じた大きな掌がのっかかる。髪を掻き分けて優しく撫でる手つきは、ガサツないなほには珍しいことだ。

その優しい感触に身をゆだねながら、エリスが恐る恐る視線を上げれば、あんなにも醜態を晒した自分を真っ直ぐ見詰める強い瞳と交差した。

「そりやお前が言った通りタツパもなけりや物怖じしねえわけでもねえし強くもねえ。でもよ、お前はここが強いじゃねえか」

そう言っつていなほは自分の胸を叩いた。

「あんなことがあつて、泣いて叫んで碌に寝れずに夜を過ごして、でもお前は笑える強さがあるじゃねえか」

それは、誇るべき強みなんだといなほは思う。物語には良く出てくる逆境に負けない強さを持つ人。でもそんなことは万人に望めるものではなく、その万人の一人にしかすぎず、決して特別な境遇にあつたわけではないエリスがその強さを得られたことは奇跡みたいなものに違いない。

「誇れよ。お前の強さは、俺の知らない強さだ」

だからいなほにとってエリスは特別な人だ。体を鍛えて心も強くなつたいなほは、体を鍛えてもいないのに心が強いエリスが羨ましくもあり、未だ答えは出ないが、エリスがいなほには必要なのである。

「どんなに自分をクソだつて言つてもいい。でもよ、誇れるテメエは持つておけ。『これ』つていうテメエが腹に真つ直ぐ刺さつてりやいいんだ」

「なら、いなほさんにとっての『これ』つてなんですか？」

エリスがそう問いかけると、いなほは得意げにいつもの笑みを浮かべた。そして腕を掲げて拳を握りこむ。

「俺は人の話なんて聞かねえし、出てくる言葉は全部クソ以下で、短気で喧嘩っばやい上に人殴るしか出来ない糞つたれだ」

それは、言葉は違うとしても、エリスが自分自身を蔑んだのと同じだった。だというのにそこに愚痴を言うような卑屈さはない。そんな糞つたれが自分であると理解していて、そんな自分をありのまま受け入れている。いや、完全には受け入れてはいないのだろう。迷いもするし、怯みもする。でもいなほはそれも含めて自分を誇っている。

何故そこまで自分を蔑みながら、自分をそこまで誇れるのか。その答えは単純明快。

「でもよ、俺の拳は最強だ」

誇れる自分が、ここにある。

「……いなほさんも、自分が嫌いなんですか？」

「なわけねーよ。確かに俺は糞つたれだが、俺にはこいつがある。俺が俺を嫌うってことは、俺の自慢も嫌うってことだろ？」

「そっかあ……」

握りこまれた拳を見てから、エリスは自分の両手を見つめた。

田畑の仕事、ここに来てからの皿洗い、それらによって幼いながらにタコやら肌荒れやらが目立つ自分の掌。

でも握りこめば、そんな汚い部分は閉じ込められて、突き出た拳がエリス自身の強さを現す。

「私にも、『これ』」

「ああ、んで『じじ』だ」

いなほは軽くエリスの胸を小突いた。いなほの拳に叩かれた胸がぼんやりと熱くなる。心の奥に種火が灯ったような気分。

見上げれば太陽のように笑ういなほがエリスを見ていた。気恥ずかしさと嬉しさがこみ上げるが、それでもエリスははにかむように笑って見せる。

変わらない。この人も自分と同じように、自分の良い所なんて殆どない人なんだ。

でも、だからこそ大きい。どんなに自分が駄目でも、誇るべきものが一つあって、そこを微塵も疑っていないからこんなにも強い。ならいつか自分もこの人みたいに、ちっぽけな自分を誇れるようになったら、彼のように強くて大きく

「明日、ちつとまた出掛けてくる」

不意に視線を切りたいいなほが、窓の向こうを見ながらそんなことを言った。

遠くを見つめる眼差しは、付き合いのまだ浅いエリスでも、いや、『同類』であるからこそわかる。

「怖いです」

あえて何処にとは聞かず、エリスはそう曖昧な言葉を口走った。

「そうかよ」いなほもあえて言及はしなかった。

「まっ、湿気たツラする必要はねえだろ」

そう言って鼻を鳴らすと、いなほはエリスをベッドに寝かしてそ

の額に手を置いた。

「おやすみなさいいなほさん」

「おう」

まどろみに再び飲み込まれる。また少しいなほと距離を詰められたことで、内の不安はまだあるものの、エリスは穏やかな眠りに落ちるのであった。

そして、決戦の時は来る。

第三十一話【ヤンキー、家族を見つける】（後書き）

次回、決戦直前

第三十二話【ヤンキー、出撃】（前書き）

文字数すくないので珍しく場面変換あり

## 第三十二話【ヤンキー、出撃】

その日は怖いくらいの快晴であった。

早朝、日が出た直後にいなほを含んだ討伐隊のメンバーはマルクの入り口に集まっていた。各々が万全の準備を済ませている中、いなほのみは何も持たず、服装もシャツと短パン、そしてサンダルのみだ。

だが文句を言う者は誰もいない。奇異の視線を送りはするが、ある一定の実力者になると、装備にしても珍しい物が多いとも聞く、いなほもその一人なのだろうとあたりをつけたからだ。

だが当然呆れている者もいる。いつもの鎧と剣の上に、背中に巨大な大剣をベルトで締めつけて背負っているアイリスだ。

「相変わらずだな君は」

「そついうお前はガントのでもかっぱらってきたのか？」

いなほは呆れ気味のアイリスの背中に担がれた青い水晶で出来た大剣を見た。全長は柄も入れれば180はあるだろうか。傾けて担いでいるが、それでも座るのにも困難しそうである。どう見ても先頭に支障をもたらす大きさだが、しかしそれゆえに、それこそがアイリスの切り札であることは誰の目にも明らかであった。

いなほの好奇心な視線に気づいたアイリスは、得意げに大剣の柄を持つと、身を屈めながら器用に抜いて見せた。大剣を傾けるとベルトのボタンが外れ浮かびあがる。そして回すようにして前に持つてきて構えた。

日差しを通す青い輝きは鉄の輝きとはまるで違う。だがその内部に込められた魔力は、魔法に疎いいなほですら感じ取れるほどだ。

「氷の女神　アイス・ワード　という。ランク持ちの魔法具でな。しかもE-だ。まだ私では使いこなせてはいないが、あるとないとではだいぶ違うからな」

使いこなせていないとは言いが、抜刀の手慣れた感じといい、それはただの謙遜でしかないのだろう。現にアイリスに持たれた氷の女神は、何処となく喜びを表すように輝きを強くしているようにも見えた。

いなほの喉が鳴る。触れれば忽ちこちらを凍り尽くすだろう神聖な輝きに目を奪われていた。

「……たまんねえなオイ」

「ふふっ、今回は素直に称賛を受け取ろう」

アイリスは嬉しそうに口を綻ばせながら氷の女神を背中の中のベルトに括りつけた。他の面子もアイリスの氷の女神程ではないが、それぞれ特別製の武器を持ってきていた。

普通ならその光景に気圧されてしまっただろうが、いなほは負けじと拳を掌に叩きつけた。負けている所ではない。どんな武器だろうが、己の筋肉以上の物はないという自負がいなほにはあった。

そんないなほの気持ちを察してか、アイリスははしゃぐ子どもを見るような心境でいなほの顔を見つめる。だがそれも一瞬。全員の装備の確認が終わったのを見計らってアイリスが声をかけた。

「ではこれより我々は第一の被害区域であるメルル村にまで行き、そこを拠点にしてから迷いの森へ仕掛ける。おそらく各自の人生でも最大級の依頼となるだろう。なので各自、今回だけはギルド間の争いは抜きにして協力してほしい」

アイリスの言葉に全員が頷く。いなほは笑った。アイリスは溜息を吐きそうになるのをグツと堪える。こいつはこれだから仕方ない。

「では、出発だ。時は一刻を争う。馬では半日以上はかかるだろうから、強化魔法をかけて一気に行くぞ、では」

『『『戦いの力をこの身に！』』』

いなほ以外の冒険者と魔法学院教員が魔法を詠唱する。それぞれの魔力光が輝く中、いなほのみは一人己の体に酸素を漲らせ。

「うおっしゃあ！ 気合い入れろテムエらあ！」

強化している誰よりも早い速度で一気に走り出した。

エリスが起きた時には既にいなほは出掛けた後らしい。だがそれでももしかしたらまだ近くにいるかもしれない。会ってせめていつてっしやいくらい言おうと思ったエリスは、寝ぼけ眼を擦りあげて起きると、直ぐに服を着替えて寝癖も直さずにギルドを飛び出した。早朝とはいえ既にマルクの街は動き出している。とはいえまだ静かな道を早足で進みながら、辺りを見渡しつついなほの姿を探す。だから、その会話を聞いたのは偶然であった。

「オイ見たかよ。各ギルドのエースがアードナイ方面の門に集まっ

てるぜ。なんか気になったけどよ。全員完全装備だから怖くて近寄れなかったぜ」

ピタリとエリスの歩みが止まる。普段なら聞き逃す雑多な立ち話だが、人通りがまだ少ないということもありエリスの耳に入ったのだ。

不安が小さな胸に込み上げてくる。まさかという気持ち。思い出すのもおぞましいあの日の村の記憶。一週間程前に出ていった冒険者達。そして集まっているというエースクラスの冒険者。先日、朝から出かけるといったいなほの言葉。

エリスは居ても経ってもいられなくなり走り出した。荒い呼吸を繰り返しながら、アードナイ側の門へと急ぐ。

「いなほさん……！」

もしも、もしもまたあの場所に彼が行くことになるのであればそれは

「やだよ……！ やだから……！」

もう一人にはなりたくない。何故かここでいなほの所に行かなければきつとんでもないことになる。そんな予感がエリスの胸を燻ぶっては消えないのであった。

そしてそれから暫くして、少女の言葉に出来ない不安は。

「死ネ、人間」

敗北という形で、現実と化すことになる。

**第三十二話【ヤンキー、出撃】（後書き）**

次回以降、ラストまでほぼ戦闘。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6548y/>

---

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

2012年1月3日02時39分発行